令和元年度

第34号

教育実践研究論文集

公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部

「教育実践研究論文集」第34号の発刊に寄せて

公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部
支部長 **安 西 和 彦**

教職員の皆様には日頃より教弘保険を通じまして、（公財）日本教育公務員弘済会千葉支部の事業に対して深いご理解とご支援をいただいておりますことに心より感謝申し上げます。また、教弘保険の加入者が増えることで、教育振興事業を年々拡充することができております。重ねて御礼申し上げます。

さて、この教育実践研究論文の募集事業は、当支部の教育振興事業の大きな柱の一つとなっています。教弘論文を多くの方に読んでいただき、日々の授業等に活用していただくことを願っています。そのためにも千葉教弘として「求める論文像」として次の４点を挙げます。

①取り組みを通して児童生徒の変容やどのように成長したか見える論文
②日常の研究している状況や実践が目に浮かぶ論文
③児童生徒に還元できる論文
④汎用性があり、「私の学校でもやってみよう」と思える論文・・以上

今回の応募では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校すべての校種から合計53点（昨年度42点）でした。内訳は、学校部門25点（昨年24点）、個人・グループ部門ではこれまでの教諭に加え、養護教諭、司書教諭など28点（昨年18点）の応募がありました。いずれも日々の教育実践への工夫改善と児童生徒の成長の様子をうかがうことができ、審査員の先生方からは、素晴らしい実践研究であるとの高い評価をいただくことができました。

厳正な審査結果、今回上位入賞された方々は別掲の通りです。上位入賞された皆様には心よりお祝いを申し上げます。また、今回掲載できなかった先生方におかれましても、引き続き研究を深められその成果を教育実践に生かしていただきたいと思います。

2020年、日本において戦後最大規模といわれる教育改革が始まろうとしています。今ある職業の半分は今後10年～20年でAIなどにとって代わられる可能性があるといわれています。子どもたちの半数は現在存在していない職業に就くだろうと予想されています。予想できない未来に対応するため、社会の変化に主体的に向き合って関わり、その過程を通して一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を切り拓いていくことが大切です。まさに「主体的な学び・対話的な学び」を本気で実践されるならば世界の窮状を回復する希望となると思います。

21世紀を生き抜く子どもたちを育むことは教職員の使命です。県内の先生方が、本冊子に掲載された研究の成果を参考として日々の教育実践に役立てていただければ、この事業は大きな成果を上げることになり、当財団としてこれに勝る喜びはありません。

当（公財）日本教育公務員弘済会千葉支部としましては、今後も事業の充実を図り、児童生徒の学びやすい環境づくりや学校教育の支援など、「最終受益者は子ども達」という理念のもと、教育振興事業の充実に邁進してまいります。今後、多くの先生方に教弘会員になっていただき、引き続きご支援をいただきますようお願い申し上げます。

末筆ながら、この間審査委員長としてご指導いただいた千葉県総合教育センター所長　秋元大輔様をはじめ各審査委員の先生方、さらには論文をお寄せいただいたすべての方に感謝とお礼を申し上げまして、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

新たな時代に向けての教育のために

審査委員長
千葉県総合教育センター
所長　**秋　元　大　輔**

間もなく新しい学習指導要領が小・中学校で全面実施となります。各学校現場では、改訂に込められた思いを自校でどのように具体化していくか検討を進めていることと拝察いたします。また、国は2022年度までに、全国の小・中学校の全学年の児童生徒が一人一台の端末をもち、誰一人取り残すことのない個別最適化学習にふさわしい環境を実現する、ＧＩＧＡスクール構想を打ち出しました。グローバル化が私たちの社会に多様性をもたらし、また、急速な情報化や技術革新が身近な生活を含めた社会のあらゆる領域に及んでいる中で、子どもたちの成長を支える教育のあり方も新たな事態に直面しています。今、学校はどうあるべきか、教育はどうあるべきかを考えなければならない一方で、働き方改革の中で教職員の業務を見直し、働き方を変えていくことも求められています。

このような学校・教育の大きな変革の時に、本年度も公益財団法人日本教育公務員弘済会千葉支部主催による「教育実践研究論文」の募集に、学校部門に25点、個人・グループ部門に28点の合計53点の応募がありました。意識を高く持ち積極的に実践研究に取り組み応募された先生方の熱意に、心から敬意を表したいと思います。

本年度応募いただいた論文は、学校の実態に即して学力向上などの課題に積極的に取り組んだもの、地域の特色を生かし地域の教育力を生かした創意あふれる教育実践、長年の教育活動を地道に積み上げたもの、子どもたちの能力を引き出して資質を高める意欲的な指導方法の研究など、いずれも学校の今日的課題の解決に向けて誠実に取り組んだ論文でした。また、幼稚園から小・中・高等・特別支援学校と幅広い校種から応募があったことも本年度の特徴でした。

審査においては様々な意見が出される中、「理論と実践が一体となりデータ検証や客観的な分析ができているか」、「実践の汎用性や具体性はどうか」、「当該校の教育活動の改善に資するものであるか」、「児童生徒の資質・能力の向上等につながっているか」などを観点として、学校部門、個人・グループ部門の受賞者を決定していきました。特に、エビデンスに基づき、他の学校でも参考にできるかという観点を重視して審査を進めましたが、優れた論文が多く、本年度も学校部門の優良賞を１点多く選出させていただきました。

先に述べましたとおり、新たな時代に向けた変革の時だからこそ、教職員が学び続ける姿勢がますます重要になってきています。時代の変化という「流行」の中で未来を切り拓いていくための力の基盤を、学校教育における「不易」たるものの中で育んでいくためにも、論文に応募された先生方、受賞された皆様には、常に学び続ける教職員の代表として、千葉県の教育を力強く牽引していただくことを期待いたします。併せて、ここに掲載された研究論文に刺激を受けた多くの先生方が、それぞれの研究テーマにそって実践し、その成果を次年度以降の研究論文に応募するような流れができれば、本事業の効果はますます大きなものになると感じています。

結びに、教育実践研究論文を募集されました公益財団法人日本教育公務員弘済会千葉支部様に敬意を表するとともに、貴法人のますますの発展を祈念して、講評とさせていただきます。

審　査　委　員

（敬称略）

審査委員長	千葉県総合教育センター	所長	秋元大輔
審査委員	千葉県総合教育センター	カリキュラム開発部部長	古市利行
審査委員	千葉県高等学校長協会	副会長	安藤久彦
審査委員	千葉県小学校長会	会長	中澤泰藏
審査委員	千葉県中学校長会	会長	市東努
審査委員	元小学校校長		佐藤進
審査委員	元中学校校長		泉晴行
審査委員	元特別支援学校校長		永吉諒
審査委員	元中学校校長		石井章
審査委員	元小学校校長		菅谷充雅
審査委員	元高等学校校長		小川輝男
審査委員	元小学校校長		内田和子
審査委員	元小学校校長		三上雄二
審査委員	元中学校校長		古橋章光
審査委員	元中学校校長		清水幸子
審査委員	株式会社千葉教弘　代表取締役		大竹誠司

── 目　　次 ──

あ い さ つ …… 1
公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部 支部長　安西　和彦
審査委員長　千葉県総合教育センター　所長　秋元　大輔

審 査 委 員 …… 3

〈最 優 秀 賞〉
学校部門
友達と協同して遊べる子をめざして
～協同的な遊びから得られる非認知能力の向上とその発展性を願って～
佐倉市立佐倉幼稚園　園長　古嶋　美文 …… 7

個人・グループ部門
高校生の地域参画とふるさとを愛する心をはぐくむ実践
～フィールドワークとプレゼンテーションを生かして地域とつながる取組～
千葉県立姉崎高等学校　教諭　石川　陽一 …… 12

〈優　秀　賞〉
学校部門
他者に配慮し、思いや考えを伝え合う外国語教育
～ペア活動を中心に話すことのやりとりの充実を図る活動から～
佐倉市立臼井西中学校　校長　加藤　康男 …… 17

全ての子供たちの学びを保証する学校教育の在り方
本校発！～外国につながる児童を理解し学力を伸ばす取組～
千葉市立高浜第一小学校　校長　川名　正雄 …… 21

個人・グループ部門
英語で伝える地元のフリーペーパー作りについて
～定時制高校の英語の授業が社会とつながるきっかけに～
千葉県立松戸南高等学校　教諭　小川　貴広 …… 26

地域と主体的に関わり、未来に向かって学び続ける児童の育成
～第４学年「知ろう！伝えよう！残していこう！魅力いっぱい、天津の海」の実践を通して～
鴨川市立天津小湊小学校　教諭　辰馬　基倫 …… 31

〈優　良　賞〉

学校部門

「３つのあい」で「活気ある学校」を創る系統的マネジメントサイクル
～「故きを温ねて新しきを知る」カリキュラムマネジメントの在り方として～
館山市立第一中学校　校長　鈴木　賢一　……　37

進歩を感じ、やる気が高まり、使える喜びを味わえる小学校外国語教育の実践
～外国語を話す必然性のある言語使用場面と
「フィードバック」を大切にした学習プロセスを通して～
旭市立滝郷小学校　校長　加瀬　政美　……　42

主体的に学びに向かい、「声と汗」があふれる体育授業に取り組む児童の育成
～深い学びの実現を目指して～
大網白里市立白里小学校　校長　内山　知良　……　47

「教わる」から「学ぶ」へ　～「探究ゼミ」の挑戦～
千葉県立浦安高等学校　校長　若菜　秀彦　……　52

個人・グループ部門

読書の質を上げる読書指導の在り方
～司書教諭と学校司書の連携を通して～
市川市立第三中学校　司書教諭　執筆　代表者　五十嵐ふみ代
学校司書　金子　紀子　……　57

主体的・対話的で深い学びの実現を目指す国語科授業の実践
～言語活動のさらなる充実のために、カリキュラムマネジメントの視点やICTの活用を通して～
浦安市立富岡小学校　教諭　伊藤　全仁　……　62

すべての子どもが自ら考え、主体的、対話的で深い学びのある図画工作科
～プロセスを大切にした造形遊びの実践を通して～
八千代市立睦小学校　教諭　有福絵里加　……　67

〈佳　作〉　……　73

最　優　秀　賞

友達と協同して遊べる子をめざして

～協同的な遊びから得られる非認知能力の向上とその発展性を願って～

佐倉市立佐倉幼稚園
園長　古　嶋　美　文

Ⅰ　はじめに

本園は大正２年に創立し、今年で106年目を迎えた。

本園は２年保育、現在年少２学級、年長１学級を合わせて63名の園児を有する伝統ある幼稚園である。

しかし近年、園児数が減少し集団で育む保育の維持が難しくなり、公立幼稚園が担う地域のリーダーシップをとることに陰りを落としている。公立幼稚園の使命を果たすべく、実践の成果をここに明らかにし、幼児教育の重要性を広く知らしめることができれば幸いである。

Ⅱ　主題設定の理由

幼児教育においての遊びは、旧くはピアジュやパーテンが遊びを発達面から分類した。またノーベル経済学賞を受賞したＪ・ヘックマンは、2000年に幼少期の環境を豊かにすることが認知的能力や非認知的能力の双方に影響を与え、学業や社会的行動に前向きな結果をもたらすことを発表した。しかも、そうした効果は後まで継続し、幼少期に付けた力が後の人生を豊かにすることを 40 年間にわたる調査により実証的に明らかにしている。

一方、平成20年の幼稚園教育要領の改訂では、領域「人間関係」に「協同して遊ぶこと」に関する記述が新たに加わった。また、平成29年３月の改訂では「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の明確化」が示され、その中に「協同性」という概念が加えられ、より「協同して遊ぶ」ことが強調された。今後の幼児教育において「協同性」は、より重視すべき今日的なテーマとなった。

本園児は、遊びを好み、快活で素直であるが、「あいさつが返せない」、「相手の思いに気づけない」、「集団遊びが長く続けられない」といった、人とのかかわり方に課題が見られた。また遊びにおいて、「ああしたい、こうしたい」といった、友達と共に試行錯誤を繰り返しながら、遊びを発展させていく様子も見られなかった。

つまり、共通の遊びのイメージが持てないこと、幼児間で遊びが広がらないことが原因となり、年長になっても単調な遊びに終始する子が多いと推測した。

「協同して遊ぶ」とは、幼稚園教育要領解説によると、共通の目的があるという。

本園では「自分の居場所もち教師を心のよりどころとして遊ぶ」「自分の思いを表現しながら遊ぶ」「友達と同じイメージを持ちながら遊ぶ」、などの遊びの発達順序があり、最終的に、共通の目的をもって遊べる協同的な遊びへと進むのではないかと考えた。この過程で人と関わる力や規範意識などの非認知能力を獲得していくのだろうと考え、保育研究を進めることにした。

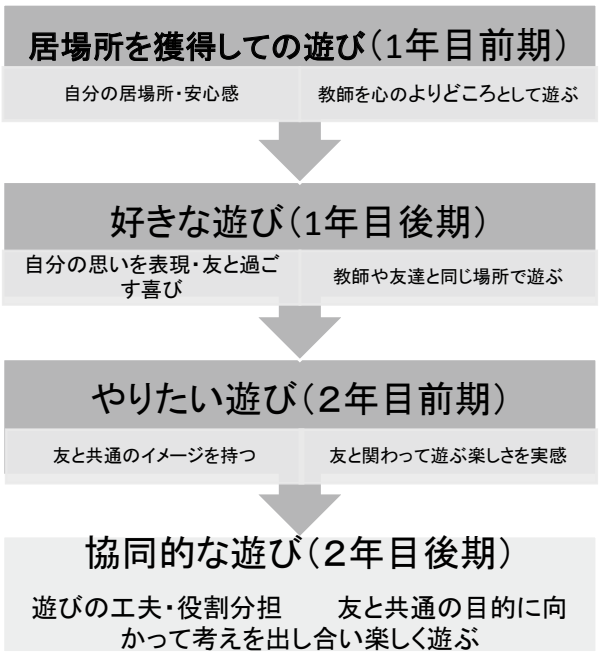
Ⅲ　研究のねらい

幼児一人一人の発達段階を踏まえながら、協同的な遊びに向かうよう、環境構成の工夫や保育者の働きかけを行い、非認知能力の向上とその発展性を探る。

Ⅳ　研修内容

１　幼児の発達と「協同的な遊び」の基本的考え方

研究を進めるにあたり、２年保育の幼児の発達を踏まえて、何をどのような方法で支援をしていくかを計画し適宜実行していくことは、幼児の発達を促す上で重要と考えた。（図１）　　図１



更に発達の過程には幼児の個人差があることを踏まえて、一人一人の発達に応じて支援をしていくように心がけ、集団の変容とともに、個々の非認知能力の変化を可視化できるようにした。

2　実践

2-1-1　1年目の実践

初年度、協同的な遊びは「人間関係の確立」と「規範意識の向上」に関係があるだろうとの仮説により、生活調査を行い、環境構成の工夫や保育者の働きかけにより、日常的な遊びとどのような関係があるのかを調査した。

〇生活調査について

・人間関係は「人への働きかけ、大人や友達との関係」など3観点（10項目）を設定。例えば、「自分から友達に働き掛ける」「友達のことを考えて発言する」等。

・規範意識は「ルールを守って行動する」「集団の雰囲気に馴染んでいる」等1観点（4項目）を設定。

以上の14項目について「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で4～1の点数をつけて測定した。

〇環境構成の工夫とは

・幼児が興味や関心をもち、かかわりたくなる環境や遊びの内容を設定する。

・遊ぶための十分な時間と場を確保する。

・友達の姿に目を向けたり、刺激し合えることができる場を設定する。

・共通イメージを持ちやすい材料、道具を選択する。

〇教師の援助の工夫とは

・幼児が互いの良さに気付いたり、認め合ったりできる言葉掛けをする。

・葛藤体験の場面では、幼児の姿に応じて見守り、共に考え、自ら立ち直れるよう寄り添う。

・幼児から出てきた考えや進め方を整理し、他の幼児と共有するための仲立ちをする。

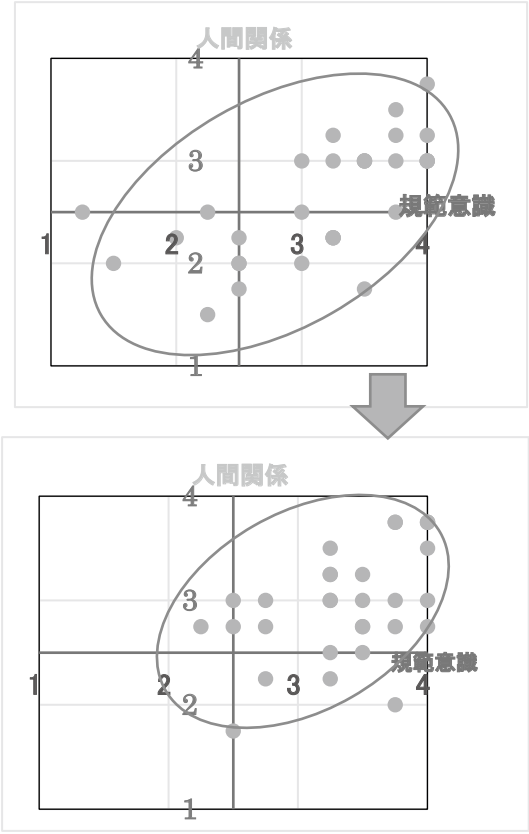
・イメージを広げ、深めためのヒントや投げかけをする。（幼児のイメージを引き出す）

2-1-2　検証

図2は、人間関係と規範意識について、年少児の7月と2月の調査の変化を示している。縦軸は『人間関係の確立』、横軸は『規範意識の向上』を表している。点は各幼児を表しており、学級全体の様子を可視化できるようにした。前期は全体にばらつきがあるが、後期になると右上の方向にまとまる様子が見られる。このことから個々や全体が、人間関係が良くなり、更に規範意識も向上していることが分かる。年長児についても同じような傾向であった。

しかし、人間関係と規範域が向上した幼児（約70%）と個々の園児の日常的な遊び様子を比べても、目だった関係を見つけることができなかった。

図2



2-2-1　2年目の実践

1年目は遊びと生活調査結果に相関がみられなかったため、協同的な遊びと生活調査について、再度洗い直しをした。教師間での話し合い後、協同的な遊びの要素（表1）は4観点4項目、生活調査については「言語能力（話す・聞く）」を付け加え（表2）6観点20項目とし、保育実践の検証スケールとした。

表1

園児氏名＿＿＿＿＿＿＿＿ **協同的な遊び調査シート**

No	観点	質問項目	児童の日頃の様子を思い浮かべながら、該当する□にチェックをし、4～1の判断をしてください。	
1	イメージの共有	遊びのイメージを共有している	□	友だちとイメージの内容について話をしながら遊ぶ。
			□	友だちの遊びを見て、仲間に入り、一緒に遊びを続ける
2	コミュニケーション	積極的に遊びに参加をする	□	友達に「いれて」といってその遊びに参加をする。
			□	グループの遊びを見て、自分のやりたいことを友達に伝えながら遊びに入る。
3	追求	気づいたことを追求する	□	遊びの様々な材料を使って、試したり考えたりする。
			□	遊びの目的に迫るために何度でも挑戦し、友達と教え合う。
4	愛着	遊びを工夫し、愛着をもつ	□	遊びをより楽しくするためにはどうしたらよいのか、考える
			□	自分たちが考えた遊びを大切にし、友達にも伝える。

表２

園児の生活調査　と　留意点

園児氏名　　実施日　平成　　年　　月　　日

No	観点	質問項目	児童の日頃の様子を思い浮かべながら、該当する□にチェックをし、4～1の判断をしてください。
1	人への働きかけ	自分から友達にはたらきかける	□ 自分から友達に話しかけたり、一緒に遊んだりしている。 □ 友達の使っている物を貸してほしい時や友達と遊びたい時など、自分から友達に言葉かけなどをしている。
2		日常的に交流が少ない相手にも関わろうとする	□ 学校に来た人などに挨拶をしている。 □ 組以外の教員や友達に会った時に相手の質問に応じたり、話かけたりしている。
3		集団の中で意欲的に行動する。	□ みんなの前に出て活動に参加している。 □ 友達や教員の動きを見て、自分でも挑戦している。
4	大人との関係	特定の大人を信頼して心を開く。	□ 担任や保護者など特定の大人が近くにいることで、落ち着いて取り組んでいる。 □ 担任や保護者など特定の大人に自分の気持ちを伝えたり、大人の話を聞いたりする。
5		自分から身近な人に関わる。	□ 自分から家族や教員に話しかけたり、遊んだりしている。 □ 自分の知っている教員や大人に話しかけたり、相手の顔を見たりしている。
6	友達との関係	友達との関わりを受け入れる。	□ 友達の話を聞いている。 □ 友達からの言葉かけで、一緒に活動している。
7		友達との関係を考えて発言する。	□ 友達を励ましたり認めたりするなど、相手の気持ちになって言葉かけをしている。 □ やってはいけないことを注意するなど、友達のためになることを助言している。
8		友達のことを考えて行動する。	□ 友達が困っているとき助けるなど、友達のためになることをしている。 □ 友達の気持ちを察して、自分勝手な行動をしない。
9	自立・他律	自分で選択･決定する	□ 遊びや活動においてやりたいことを自分で決める □ 遊びや活動においてやりたいことに自ら取り組む
10		心身の調和がとれている	□ 生活リズムが整っている。(睡眠･食事･排泄など) □ 困難な状況に直面しても、気持ちを立て直して取り組める。
11		身の回りのことを自分でする	□ 一人で着衣ができる。(ボタンやチャックの開閉･衣服を前後正しく着る) □ 食具(箸)を正しく使うことができる。
12		相手の指示や要求を受け入れる	□ 教師や友達から言われたことを理解し、受け入れて取り組む。 □ 自分の本意でなくても相手の要求を受け入れる。
13	規範意識	相手の気持ちを考えることができる	□ 自分がされて嫌なことを人にしない。 □ 相手が困っていることに気が付いて、行動する。
14		場に応じて気持ちをコントロールする	□ 友達とほしいものが重なったときに、譲ることができる。 □ 勝手に物を取らずに、相手に口で伝えられる。
15		約束事を守って行動する	□ 自分の順番を待つことができる。 □ 片付けの声かけに合わせて遊びを切り上げることができる。 □ 教師や友達の話を最後まで聞くことができる。
16		善悪の判断ができる	□ 人の物を勝手に借りることはない。 □ きめられた役割を果たさないことは悪いことだと思う。
17	言語能力（話す・聞く）	会話をする時の態度が身についている	□ 話している人の顔を見て聞く。 □ 相手の顔を見て話す。
18		相手にわかるように話す	□ 正しい発音で話す。 □ 場や状況に応じた言葉を使う。 □ 経験したことを順序だてて話す。
19		自分なりに言葉で伝えようとする	□ 楽しかったことや嬉しかったことを教師や友達に伝える。 □ 自分の困っていることを教師や友達に伝えられる。
20		話を理解して聞くことができる	□ 教師や友達の話を聞いて理解する。 □ 話の内容に合わせて表情を変えたり、興味をもって質問したりする。

※20の質問項目について「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で測定した。

2-2-2　検証保育

年少４歳児　　うさぎ組　　＜砂場遊び＞

実　態

・砂場遊びを好み、友達と誘い合って取り組んでいるが、遊びが広がらずに終わってしまったり、イメージを共有できず抜けてしまったりする幼児が多い。

・作ったものを次に遊びに来た幼児に壊されたり、週末は園庭開放をしているために、継続した取り組みが難しい。幼児の意欲が削がれてしまうことがある。

手立て

・遊びの様子に合わせて道具を提供する。(道具、素材、材料の提供の工夫)

・水を自由に使える環境にし『こわさないでね』の看板を提供する。**(継続できる環境作り)**

・教師も仲間入りし、幼児が互いのイメージを伝え合うための仲立ちをする。**(思いをつなげる働きかけ)**

結　果

・自由に使える水や道具の出現に遊びの魅力が高まり、仲間入りする幼児が増え関係が広がった。

・用途に合わせて道具を使い分け、力を合わせて取り組む遊び（水路作り・落とし穴作りなど）が増えた。

・『こわさないでね』の看板を使えるようになったことで、後からきた友達もそこを避けて遊ぶようになったり、仲間入りして一緒に続きを行ったりできるようになり、興味や意欲が継続して「明日もやろう！」と、続きの遊びをすることが増えた。

・教師が仲立ちしたり話を整理したりしながら、幼児がそれぞれ持っているイメージや意見を伝えることで共有しやすくなり、途中で抜ける幼児の姿が減り、遊びが続くようになった。

年長５歳児　　ぱんだ組　＜お店屋さんごっこ＞

実　態

・役割を分担しながら、イメージを持って遊びを自分達で進めようとしている。その中で友達の意見を聞き入れることが難しく、自分本位に進めてしまう子もいる。

・同じおもちゃを使っているため、遊びが慣習的になり発展せずに終わっている。

・場所を残していくことが難しく、継続して遊ぶ様子があまり見られない。

手立て

・アイドルごっこでは、音楽をかけて歌って踊る姿に合わせ、巧技台のステージと好きな衣装を着られる衣装掛けを用意。

・折り紙などで食べ物を作っている様子に合わせて、廃材セットを置く。手作り冷蔵庫を置き、収納できるようにする。　**(新しい素材・道具の登場や環境の工夫)**

・互いの良さに気づきながら、意見を交わし、自分達で遊びを進めていくきっかけを作る。**(教師による仲立ちや働きかけ)**

結　果

・大きなステージや鮮やかな衣装に興味や魅力を感じた友達が集い、女の子はマイクを作り、男の子は楽器を作ってバンドマンとして参加したりし、みんながコンサートの世界観を持って遊びを広げていた

・意見が異なり葛藤する場面では、友達の考えによりどんな変化が生まれるか一緒に考えたり、教師が認めたりしていくことで、自分とは違う意見を聞き入れて、アイデアを組み合わせたりすることができ、遊びの相談が活発に行われるようになった。<アイドルごっこ>

・遊びに必要なものを自分達で制作したり用意したりすることに興味や意欲が湧き、イメージを伝え合いながら取り組んだ。

・続きができる環境があることを喜び、繰り返し楽しむことや、明日の遊びへの期待につながった。

年長５歳児　　きりん組　　＜空き箱・廃材遊び＞

実　態

・作ったことで満足してしまう幼児が多く、作ったもので遊ぶ様子が少ない。

・一日の主活動によって遊ぶ時間に差が生まれ、継続できる時間が少なく、意欲が削がれることがあった。

・道具の使い方や貼り合わせ方などがわからず、つなぎ合わせるだけで制作に発展が見られない。

手立て

●段ボールなど幼児の遊びに合わせた道具や素材の提供。**（新しい素材・道具の登場や環境の工夫）**

・作品コーナーを設ける。（遊びの継続が可能になる工夫・作った充実感の味わい）

・教師が一緒に制作を楽しんだり、幼児の作っているものに合わせた声掛けをしたりする。**（教師による仲立ちや働きかけ）**

結　果

・今までとは違う道具や素材が出現したことで、イメージが広がりやすくなっていった。

・段ボールという大きな素材が、ままごとで使用する犬小屋作りへとつながった。自然と役割が生まれ、友達と協力して作ったり、どのようにしたら丈夫になるのかを考えたりすることが出来た。

・制作遊びをする幼児が増えたことで、友達と同じもので遊ぶ姿が増え、かかわりややりとりが多くなった。

・友達と遊びを進めていく中で、葛藤する場面があったが、友達の意見に耳を傾けられるように働き掛けたり、幼児たちで考えられる言葉掛けをしたりし、相手の意見を聞くことの大切さを感じることが出来た。

2-2-3　協同的な遊びと生活調査の関連

協同的な遊びが、どのような要因と関わるのか、またその促進要因は何かを調べ保育に活かす。

方法

（1）「協同的な遊びして考えられる要素」、「園児の発達に関わる日常的な要素」を職員で話し合いながら選び出し、調査の項目とする。（表１、表２）

（2）表１、表２の右側にある「園児の日頃の様子を思い浮かべながら…」に書かれている行動をチェックしながら、一人一人の園児について質問項目にそって回答していく。回答は、「あてはまる」、「どちらかというとあてはまる」、「どちらかというとあてはまらない」、「あてはまらない」の４件法で測定する。

（3）「協同的な遊び」が、人間関係（人への働きかけ、大人との関係、友達との関係）、自立・他律、規範意識、言語能力の４つの因子と、どの程度影響しているのか、その大きさを統計的な手法（重回帰分析）で分析する。

（4）影響力の高い因子の詳細を分析し保育に活かす。

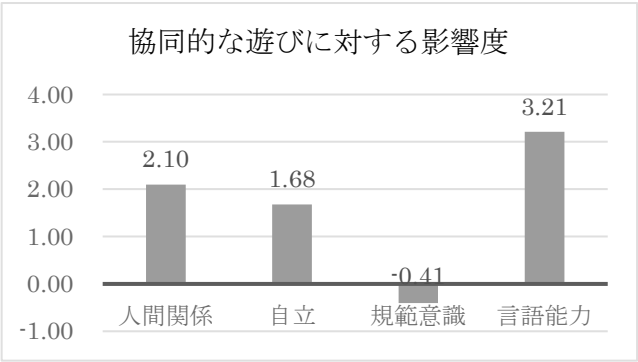
結果

・協同的な遊びへの影響度が大きい因子は、言語能力、人間関係、自立、規範意識の順に高くなる。

・規範意識はほとんど影響がないと考えられる。

（およそ絶対値1.4以上が「影響がある」とされる）

図３



考察

・言語能力（話す、聞く）の差が、協同して遊ぶことに大きな影響があることが分かった。言語能力の質問事項である「自分なりに言葉で伝えようとする」「話を理解して聞くことができる」能力は、遊び仲間を誘ったり、遊びのイメージを相手に伝え、その面白さを感じさせるのに必要な能力である。実際に検証保育においても多々見られた。

・遊びのルールを守ることは、協同的な人間関係を構築するために必須であると考えたが、日常生活の規範意識と協同的な遊びとは、あまり相関はないことが明らかになった。

・協同的な遊びに影響を与えている要因は、言語能力（話す、聞く）、人間関係、自立・他律の３観点であることがわかった。協同的な遊びができるようになれば、3 観点の能力が向上すると考えられ、また 3 観点が向上するような保育を行えば、協同的な遊びへと向かいやすくなるとも考えられる。

以上の考察から平成30年度に行った保育を受けている小学校１年の言語能力（話す、聞く）、人間関係、自立・他律の様子を調べれば、幼稚園での培った認知能力（話す、聞く）と非認知能力（人間関係、自立）が小学校入学後維持されているかどうか検証ができるだろうと考えた。

2-2-4　３年目の実践

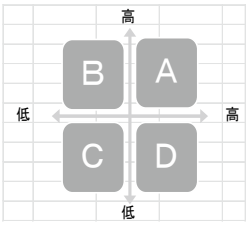
３年目は、幼稚園で育成された認知能力（言語能力：話す、聞く）と非認知能力（人間関係、自立）が小学校に入学後も維持、向上するのか明らかにする。

並行して、協同的な遊びへと向かう幼児の様子をビデオで記録をし、幼児個々の遊びの変化を分析した。

〇調査方法と結果

協同的な遊びと特に関係が深かった人間関係と言語能力を 2 軸として小学校入学後の園児の変容を見ることとした。ある小学校に依頼し、本園の卒園生だけでなく１年生全員の生活調査を依頼し実施した。卒園児は３学級に5～7名分散した。

図４　各領域図



評価者である教師が幼稚園時代と異なるため、細かな数値の変化を比べるのではなく、2 軸共に2.5 点を基準軸とした４つの領域の移動の有無で子どもの１年間の変化を比べた。軸上の点は 2.5 点未満とみなして処理した。

結果

小学校１学級の様子を示したのが図５である。

その他の学級も含めて集計すると

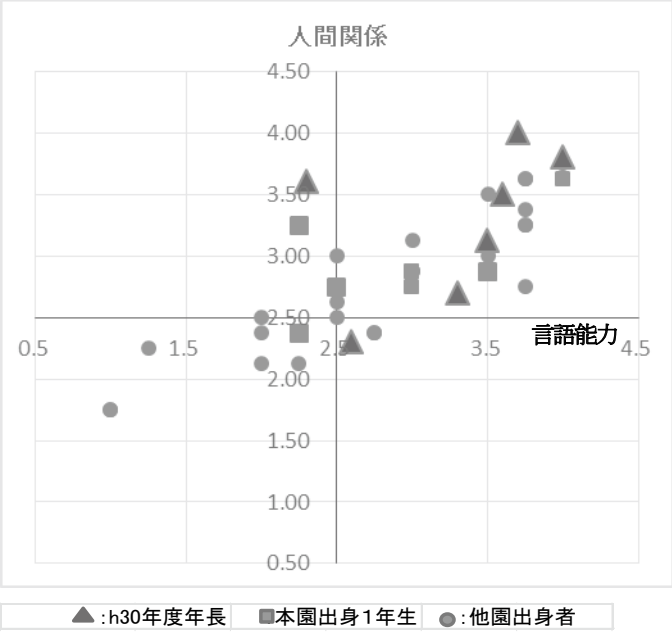
①A領域内に留まっている児童　　：66.7%

②A領域から他の領域へ移動した児童　　：16.7%

③A領域以外から他の領域へ移動した児童：16.7%

以上の結果からおよそ 67%児童が人間関係や言語の能力を維持していることが分かった。

図５



Ⅵ　成果（〇）と課題（●）

〇本研究により、協同的な遊びにまで発展した幼児が増えたことは研究の成果と捉えている。また、その遊びによって得られた人間関係能力や言語能力が小学校に入学後も約 67%が保持されることが分かったことは、幼児教育を推進する上で大きな励みとなった。

●砂場遊びやブロック遊びなど普段行われる遊びの時間的な変化をビデオにより多量に記録したが、分析が遅れてしまった。今年度中に処理をして何らかの傾向がつかめるよう努めたい。

Ⅶ　今後に向けて

・幼児教育は、子ども達の可能性を広げる土台となる、更に魅力ある教育であることを多くの機会に発信していきたい。

・幼少連携推進に協力いただいた小学校に深く感謝すると共に今後も末永く続くことを祈念する次第である。

参考文献

・J・ﾍｯｸﾏﾝ『幼児教育の経済学』東洋経済新聞社

・平成 30 年３月『幼稚園教育要領解説』文部科学省

高校生の地域参画とふるさとを愛する心をはぐくむ実践

～フィールドワークとプレゼンテーションを生かして地域とつながる取組～

千葉県立姉崎高等学校
地歴公民科　教諭　石　川　陽　一

Ⅰ　はじめに

平成２１年４月から市原高校で５年間、平成２７年４月から姉崎高校で５年間勤務した。この１０年間は主に日本史Ｂを担当し、担任・学年主任として卒業生を三たび送り出すことができ教員冥利に尽きる。

市原市は市全域が博物館のような、全国でも稀にみる歴史教材の宝庫である。２０２０年には「更級日記千年紀」のイベントがあり、市が総力をあげて建設中の博物館「いちはら歴史館（仮称）」が完成する。

さて、教育界ではアクティブラーニングが求められて久しい。これまで受験指導一辺倒の授業を繰り返してきた自分を恥ずかしく思う。これらの反省をふまえ、市原市内の２校に勤務するなかで、「生徒の地域参画」が、主体性と協働的に取り組む姿勢を養うアクティブラーニングの実践例になると考えた。

市内の高校で１０年間取り組んできた実践、及び高校生の地域参画と郷土愛をはぐくむ活動事例を広く紹介し、その成果と課題を共有することで、これまでお世話になった埋蔵文化材調査センターや公民館をはじめとした地域の方々への御礼としたい。

Ⅱ　研究の概要

１　学習指導要領からの視点

学習指導要領は、生徒が「生きる力」をはぐくむため、「言語活動」の充実を求めている。未来ある生徒たちが、国家・社会の形成者として自立していくために必要な「生きる力」をはぐくむため、プレゼンテーション（以下プレゼン）、体験学習、調査学習を積極的に取り入れてきた。生徒が「自分で資料を探す」「わかりやすい資料づくり」「みんなの前で発表する」などに取り組んで、言語活動の充実を図りたい。

さらに、生徒自らフィールドワークをおこない、各自の目・手・足など五感を通じて学び取ったり感じたものを報告させる。また、諸資料の収集・整理及びパワーポイントの作成をとおして、プレゼンのスキルを積ませたい。

学習指導要領では、内容の取扱いウの中で「地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫をすること」が求められている。さらに内容の取扱いオでは「地域社会の歴史と文化について扱うようにするとともに、祖先が地域社会の向上と文化の発展に努力したことを具体的に理解させ、それらを尊重する態度を育てる」と明記されている。

市内にある源頼朝伝説の地
「御所覧塚」をＰＲする生徒

２　研究の仮説

これらの視点をふまえ、伝統や文化への関心を高め、地域社会の一員としての自覚を促す方法として、「フィールドワーク」の活用がある。生徒たちの学ぶ意欲の向上と地域参画へのきっかけになると考えた。

次に「プレゼン能力の向上」を図り、諸資料の収集・整理と資料作成、発表のスキルを上げていく。さらに、これらの能力を教科・科目の枠組みを超えて地域との連携を視野に入れた実践を展開する。このような取り組み後、生徒に「地域で活躍する場」を提供したり、また、地域のために「何ができるか」を考えさせる。校内だけではなく、学校外の活動に参加することが、アクティブラーニングの新たな可能性であると考え、次の研究主題を設定した。

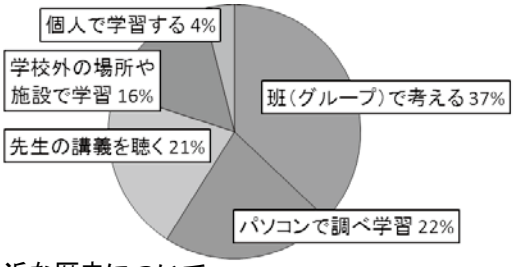
３　研究主題

フィールドワークを伴うプレゼン能力の向上
～地域参画を促す郷土愛をはぐくむ取組～

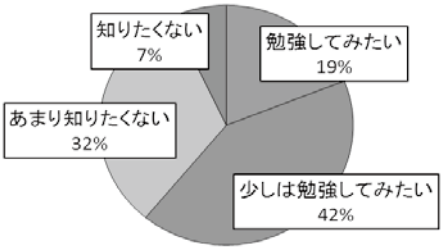
４　研究方法

まず生徒にアンケートを実施する。質問アではグループ学習やパソコンを使っての調べ学習を望んでおり、質問イからは、一見無気力に見える生徒にも、授業に対する期待が内在していることが看て取れる。

ア　どんな勉強法がよいか



イ　身近な歴史について



平成２２年度　市原高校３年生１２２名より

これらに五感を通じて体験するフィールドワークを併用することで、興味・関心を持つのではないかという仮説が立てられる。さらに、プレゼンをとおして、資料作成や発表のスキルを身につけさせ、小さな成功体験を積み重ねて自信をつけさせることで、身近な地域の歴史に親しみ、地域参画への糸口になると考えた。

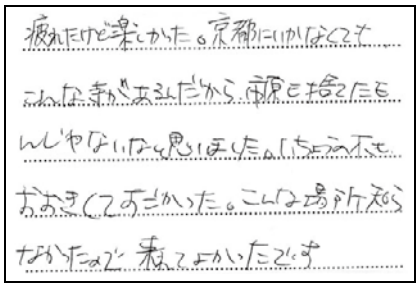
Ⅲ　市原高校での実践

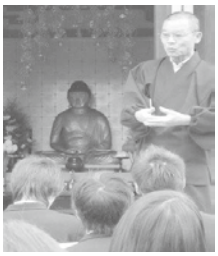
１　クラス単位でフィールドワークへ

日本史Ｂの授業で毎年行っていた取り組みとして、クラス単位でのフィールドワークがある。２時間扱いで計画し、学校から片道３キロまでの寺院（医光寺）で実施した。ワークシート作成、事後指導を教師主導で行っていく。実際のフィールドに身を置くという、体験的な学習を重視する。安全対策を施し危機管理体制も作っておく。他の教員や担任にも引率を依頼するなどの連携も必要である。

フィールドワークのようす

生徒の感想（下）


疲れたけど楽しかった。京都にいかなくてもこんな寺があるんだから、市原と言ったらいじゃないかな思いました。ちょっと不安おおきくておどかった。こんな場所知らなかったので来てよかったです



仏像の解説

２　郷土史班別テーマ学習　フィールドワーク／発表

次の段階として、２～４人の班でテーマを設定し、事前学習と各班ごとのフィールドワークをもとに資料を作成して発表させる。クラス内でテーマの重複がないように配慮する。テーマを構成する要素として、古代～近世までの「身近な地域の伝統や文化」、「郷土史」などを扱い、市原市と在住の地域に範囲を限定した。

各班が設定したテーマ

班	Ａ　組	人数
1	橘禅寺～身近な地域のお宝	4
2	市原の古墳時代～姉崎古墳巡り～	2
3	牛久「八坂祭」について	3
4	パワースポット『高滝神社』	3
5	高滝／日本一の木像地蔵菩像	3
6	池和田城趾について	2
7	国分尼寺～女の人の寺って～	2
8	笠森観音の信仰について	2
9	地元大多喜城の歴史にふれる	2
10	医光寺の崇源院像について	3
11	菅原孝標女～更級日記の旅～	2

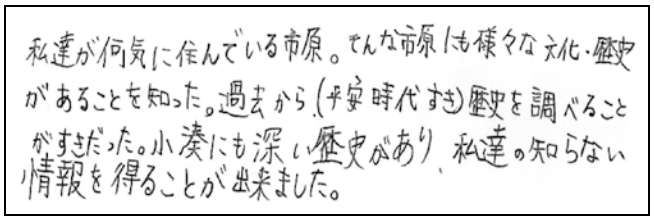
テーマや行程表は、コンピュータ室や図書室を利用して作成する。休日や放課後を利用してフィールドワークを実施し、報告書が完成した班から発表を行った。可能な限り私も同行するよう心掛けた。

３　「わがまち歴史の旅マップ」の作成

郷土史学習の最後として「旅マップ」（以下旅マップ）を作成する。ふるさとの観光振興に一役買う実践である。教科「情報」と連携して、地図作成の技術指導を６時間分とし、史跡調査や写真・資料データに関しては、日本史の時間に３時間を行うことにした。

旅マップは文化祭で展示し、さらに上総牛久駅などで観光客に利用してもらう試みである。「地域の観光振興に一役買う」という試みが、生徒たちのやる気を後押ししていた。

生徒の感想


私達が何気に住んでいる市原。そんな市原にも様々な文化・歴史があることを知った。過去から（平安時代すぎ）歴史を調べることがすきだった。小湊にも深い歴史があり、私達の知らない情報を得ることが出来ました。

旅マップの作成は、３年がかりで小湊鉄道全線の旅マップ作成へとつながった。先輩から後輩へ、数多くのデータを受け継ぎ、上総村上駅から上総中野駅まで全１７駅のオリジナル旅マップを作成した。

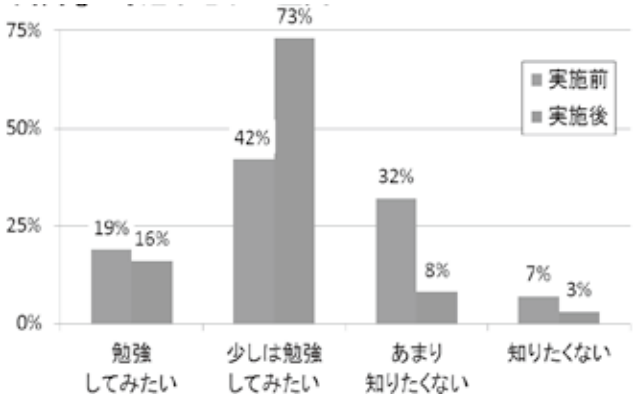
これらの取り組みで、生徒たちは改めて地元を意識していた。「沿線に住んでいても意外に知らない場所が多かった。市内のいろいろな場所を訪れたいと思うようになった」と口をそろえていた。

旅マップは、上総牛久や養老渓谷などの有人４駅から設置し、すぐに補充が必要になるなど評判は上々だった。

旅マップを贈呈　平成２６年３月

これらの実践をとおして、実施前と実施後のアンケートの比較をした。（左は実施前　右は実施後）

質問　身近な地域の学習について



実践後のアンケートから、約９割の生徒が身近な地域の学習をしてみたいと答えるようになっている。

４　地域とつながる

市内ボランティアが主催した「鎌倉街道を歩こう」会というイベントを盛り上げようと、生徒で寸劇を行った実践がある。内容は、石橋山の戦いで惨敗し、逃れてきた源頼朝が上総国を通過する際に閲兵したと伝わる御所覧塚で、当時の様子を再現したものである。

生徒たちが空き缶をつないで手づくりで作成した鎧を着て頼朝と武士を演じ、５０名を超える参加者に楽しんでもらった。私たちの住む郷土に、８００年前の武士たちが鎌倉へ馳せ参じた道…。そんな歴史ロマンはもちろん、参加者に喜んでもらった嬉しさと充実感を生徒は得ていた。ふるさとを愛する気持ちが生徒たちに芽生えたと思える１日であった。

寸劇で参加者を楽しませた生徒

Ⅳ　姉崎高校での実践

１　プレゼンテーションに挑む

姉崎高校では選択科目で日本史研究を設けており、主題学習「歴史と資料」を取り上げている。各時代ごとの地域史に着目したテーマを設定した発表を行う。この発表は、自分たちの目・手・足など五感を通じて学び取ったり感じたものをもとに資料を作成させる。発表や議論の中で、他人の意見を理解しながら、各自の考え方を整理する活動をとおして歴史的思考力を培うことが目標である。

プレゼンテーションのようす

次の表は、平成２８年度に日本史研究（１３名）で実施したプレゼンの一覧表で、２時間扱いで実施した。

班	発表テーマ	人数	時間
①	貝塚からわかる縄文人の生活	２	12分
②	姉崎神社の由来と伝承	２	10分
③	姉崎古墳群からわかること	３	13分
④	上総国　国分寺・国分尼寺の役割	２	12分
⑤	市原市に残る「頼朝伝説」	２	12分
⑥	「鎌倉街道上総路」	２	15分

授業でしか接しない生徒とも、個別に話をしながら準備をすることで、コミュニケーションの場が生まれる。これがもう一つの目的である。教科「情報」の履修により、生徒のパワーポイント作成のスキルは高く、それぞれの生徒が、工夫を凝らした発表であった。

題材名　～古代から中世の「上総国のようす」～

生徒作成のパワーポイントの表紙より（平成 28 年度）

このうち、鎌倉街道上総路を発表した生徒から、県内では唯一「歴史の道百選」に選定されているこの古道をＰＲしようという提言を受け、道標やのぼりを作成することになった。夏休みに道標を作成し、民家の方の許可を得て、沿道に設置した。作成した道標は現在も約２０か所に設置されている。これらの取り組みは新聞や地域の情報誌などで紹介され反響を呼んだ。

歴史の古道をＰＲ　平成２８年度

また、道標の作成・設置だけでなく、鎌倉街道を紹介したパンフレットも作成した。住所が市原市立野字鎌倉街道となっているコンビニ店のレシートを題材に、パンフレットを作成しようとの提案があり、全員が賛同した。

鎌倉街道を紹介したパンフレットは、生徒たちが足で稼いだ情報と撮影した写真を取り入れたものだ。コンビニ店内の休憩スペースに置いていただき、予想以上に多く人が手に取ってくれている。現在でも二カ月に一度は補充している。

次の表は、令和元年度の日本史研究（１７名）での「プレゼンテーションに挑戦しよう」のレジメである。平成２８年度から続けているこの取組は、県内の社会科初任者研修の一環としても授業を公開してきた。

班	発表テーマ・内容	人数	時間
①	県内最多！市原の貝塚について	２	10分
②	古代史に輝く「姉崎古墳群」	３	10分
③	国分寺・国分尼寺とその役割	３	12分
④	いざ鎌倉！「鎌倉街道上総路」	３	14分
⑤	戦国時代の市原　佐是城・椎津城	３	12分
⑥	久留里街道「殿様道」を訪ねて	３	15分

平成２９年度に久留里街道を発表した生徒が、「旧久留里街道西往還」の道標を作成して桜台に設置した。この生徒たちは、後述する公民館主催の講座で、実際に久留里街道西往還を１日かけて歩いた生徒たちだ。西往還とは、市原市内から久留里城下に通ずる代表的な３つのルートのうち、姉崎（椎津）から久留里までをつないでいるルートで、民家の方に許可をいただき、手作りの道標を設置した。周辺を散歩している地域の方々もこの道の歴史的な価値を知ることとなり、声をかけていただく。発表のまとめで、「多くの歴史的遺産が失われるなか、新たな開発から守っていくためには、まずは多くの方に知ってもらうことが大切」と訴えかけた。そして、実際に道標を作成・設置して、ふりかえりを実行したのである。

旧久留里街道の道標を作成

２　公民館とタイアップ！　地域参画をめざして

平成２９年度は、高校生の地域参画をテーマに取り組んだ。地元公民館の社会教育主事と連携して「文化財マップをつくろう」という講座を企画した。私が所属する市原市ボランティアグループ「鎌倉街道を歩く会」のスタッフ約１０名がこの活動を支える。

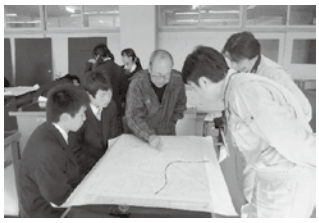
参加する生徒の主体は、姉崎高校からの２０名を超える生徒たちである。三月中に次年度の日本史研究を選択している生徒を中心に声掛けをして、２年生９人、３年生１２名の合計２１名が参加した。この事業の概要は次のとおりである。

「文化財マップをつくろう」　有秋公民館主催事業

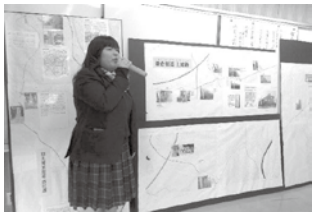
実施日　平成２９年４月～平成３０年３月（参加無料）	
第１回４／１５（土）午前	事前学習／役割分担等
第２回５／２０（土）１日	バス研修　鎌倉街道を歩く
第３回６／１０（土）１日	バス研修　久留里道を歩く
第４回11／４（土）午前	文化財マップづくり①
第５回11／25（土）午前	文化財マップづくり②
第６回３／３（土）午前	完成報告会／展示

鎌倉街道をフィールドワーク

文化財マップの作成



完成発表会でのプレゼン



発表会後の記念写真

公民館内の壁面にＡ３サイズ３２枚分の文化財マップを作成し、利用者に地元の歴史・文化遺産を紹介する。高校生の地域参画をテーマとしている。

これらの活動をとおして、身近な地域の歴史を知り、実際に見て歩いて体験し、仲間との交流を深めることで、大きな充足感を得ていた。その延長上に、地域を盛り上げるためのパンフレットづくりや、新たな道標や看板の作成などがある。これらは、高校生の地域参画として重要な活動であると認識している。

３　地域とつながる

文化遺産を啓発する活動が地域に知られるようになると様々なオファーを受けた。ここでは２つ紹介する。

（１）　地域コミュニティ「青葉大学」で生徒が講師に

地元の人々が３０年以上運営している「青葉大学」での講師を姉崎高校の生徒が務めることになった。これまでの啓発活動などをふまえ、テーマは「久留里道」とした。発表者として公民館主催講座に参加した二人が快諾してくれた。実際に久留里城へと足を運んで写真を撮ったり、博物館で情報を収集するなど１カ月間かけて資料を作成して臨んだ。当日は、パワーポイントを利用しての発表を読み原稿なしで披露し、４０名を超える参加者から絶賛され、次年度の依頼も受けた。

「青葉大学」でプレゼンする生徒　　平成３１年２月

（２）　椎津城跡整備のパートナーとして看板作成

姉崎地区に残る椎津城跡が平成２９年に県指定文化財となった。地元の町内会と市ふるさと文化課による『富士山のみえる城跡』として共同整備が進んでいる。町内会の要望により、看板・標柱などを作成することになり、新たに募集した１・２年生１１名が作成した看板及び標柱１１本を贈呈した。

制作のようす

町内会へ看板を贈呈　　平成３１年３月３０日

この贈呈式を取材した地元のローカル紙に、生徒は次のように語っている。

> 初めてこの活動に参加した蛭田さん（３年・姉崎中出身）は、「以前、友達と散歩がてらに来たことがあり、戦国時代の城跡と聞いてびっくりしました。看板や標柱づくりをして、すごく充実感があります」と話す。鶴岡さん（２年・平川中出身）は、「歴史が好きだったので参加しました。先輩たちが道標を作っていて、私も地域のために役立つことがしたいと思い参加しました」と笑顔で話した。
>
> シティライフ市原・袖ヶ浦版　令和元年６/１号より抜粋

これらの感想から、地域に携わる活動が先輩から後輩へと受け継がれていることがわかる。さらに、卒業生が古くなった道標を交換しようという新たな動きもあった。この卒業生は公民館主催の文化財マップ作成に携わり、授業でのプレゼンだけでなく、中学生対象学校説明会でも、社会科模擬授業を担当した。

卒業生による道標の再設置

Ⅴ　実践の検証と課題

教室での座学が苦手な生徒もフィールドワークが新たな可能性を開いてくれる。生徒と体験を共有することで一体感が生まれる。さらにプレゼンを取り入れることで、生徒が意欲的に学習に取り組むようになった。事後のアンケートでは、ほとんどの生徒が「人前で話をすることの難しさ」を経験しながらも、「やってよかった」と回答している。「次回はもっとわかりやすい資料を作っていい発表をしたい」と前向きなふりかえりも多い。これらをベースとした様々な地域参画への取組は、主体性・協働性を養うアクティブラーニングの１つの実践例と考える。

現状としては、予算がなくマンパワーの域を出ないのが課題ではあるが、少数の生徒で小さな取組を積み重ねていくことは可能であろう。地域参画を推進していくためには、地域の人的ネットワークの構築が不可欠である。市や公民館での行事、研修会などの機会を積極的に利用し、教師自身が地域の活動やスタッフとつながりを持つことである。この１０年間、じつに多くの地域の方々にお世話になって今があると感じる。参加してくれた生徒も含めて感謝したい。合掌。

優　　秀　　賞

他者に配慮し、思いや考えを伝え合う外国語教育

～ペア活動を中心に話すことのやりとりの充実を図る活動から～

佐倉市立臼井西中学校
校長 加 藤 康 男

Ⅰ はじめに

本校は，今年度で開校から３２年目を迎える中規模校で生徒数３０３名・１２学級の学校である。閑静な住宅街と田んぼなどの農地に囲まれ，緑のあふれる豊かな環境の中に学校がある。

歴史的には，佐倉城よりも古い臼井城址があり，印旛沼を臨む眺めは臼井八景という漢詩にも詠われた地となっている。

本校の学区には，佐倉市立臼井小学校と佐倉市立王子台小学校があり，平成２６年度から臼井小が，平成２７年度から王子台小がそれぞれ３年間文部科学省指定教育課程特例校として外国語活動の研究を行なってきた。それに伴い，学校区内で相互授業参観を行なったり，英語の授業形態を同じようにするなど，小中、小小での連携を意識して研究に取り組んだ。

Ⅱ 研究の概要

１ 本校の実態

平成２９年度からは、王子台小とともに、佐倉市の研究モデル校として，連携の強化に取り組むこととなった。その際，具体的な指導の連携をとれないかを検討し，互いの研究に「話すこと〔やり取り〕」の領域を取り入れることになった。また，本校の生徒の実態として，相手の気持ちを考えずに発言し，相手を傷つけてしまうことがあったり，市の学習状況調査の結果からも，「記述力」や「表現力」に課題があることが明らかとなっている。

２ 学習指導要領改訂の趣旨から

「話すこと〔やり取り〕」の領域に関して，学習指導要領では，「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動が十分でないことや場面・状況に応じて自分の考えや気持などを適切に表現することに課題がある。また，互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視することの重要性が述べられている。

３ 研究仮説

本校の実態や指導要領改訂の趣旨を考え，以下のような研究仮説を立てた。

・小学校と連携し，与えられたテーマで生徒が，自ら考えたコミュニケーション活動を繰り返すことで，英語でのやりとりの質（反応,相づち，質問）が向上するであろう。

・CAN-DO リストの効果的な活用を目指し，生徒と到達目標を共有し，評価基準を明確にしたパフォーマンス評価を行なうことによって，意欲的なコミュニケーション活動につながるであろう。

４ 研究主題

「他者に配慮し，思いや考えを伝え合う外国語教育」
～ペア活動を中心に話すことのやりとりの充実を図る活動から～

５ 研究内容

(1)帯活動 One minute talk の取組

授業の最初の方に帯活動で，１年から３年まで１分間英語で会話を続ける One minute talk の活動を行なう。

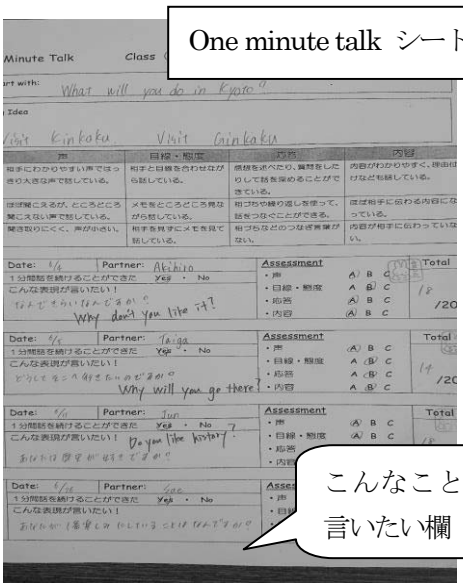
方法

①始めに，１，２分自分の言いたいことをまとめる時間を設ける。その際メモ程度の英語で記入し，即興的に会話をするように指導する。また，評価基準表（ルーブリック）を活用し，生徒と評価基準を共有する。生徒に事前に何を目標にして一分間話すかを意識させる。

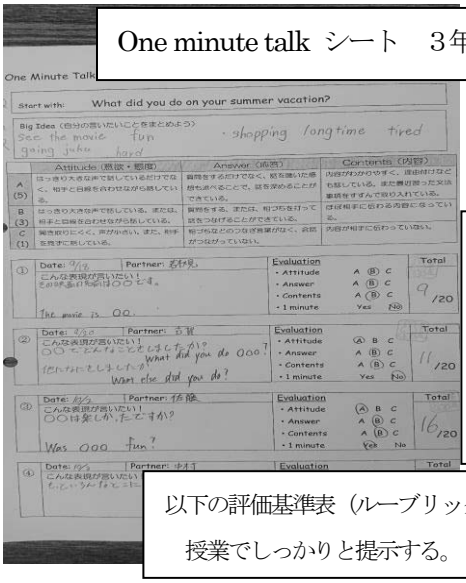
②準備時間が終わったらペアで１分間英語で話をさせる。その際，本校では，QAR(question-answer-reaction)の流れを意識させ，相手と気持ちの良い会話になるように指導する。

③１分間の会話が終了したあと，自己評価を記入させる。以下のシートは，平成３０年度の３年生の One-Minute talk のワークシートである。トピックは，修学旅行前ということで，What will you do in Kyoto?（京都では，何をする予定ですか）で６月に実施した。

自己評価の中に「こんな表現が言いたい！」という欄を設け，実際の活動で言えなかった表現を記録させる。このことが，次の会話の充実につながるポイントとなる。同じトピックを３回～４回繰り返し行なうことで，やりとりの質を向上させていく。



One minute talk シート　３年１学期



One minute talk シート　３年２学期

1回目９点
2回目 11 点
3回目 16 点

以下の評価基準表（ルーブリック）
授業でしっかりと提示する。

トピック What did you do on your summer vacation?

Big idea(自分の言いたいことをまとめよう)

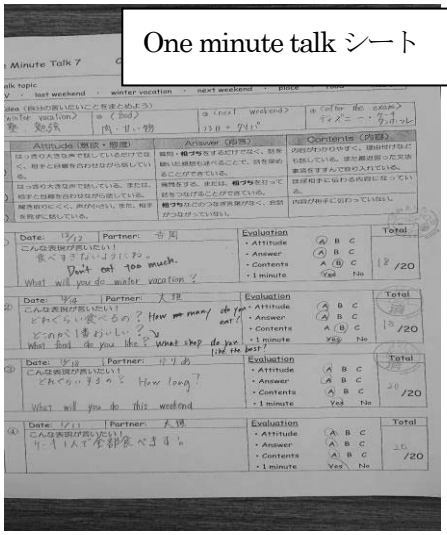
	Attitude(意欲・態度)
A(5)	はっきり大きな声で話しているだけでてなく、相手と目線を合わせながら話している。
B(3)	はっきり大きな声で話している。または、相手と目線を合わせながら話している。
C(1)	聞き取りにくく、声が小さい。または、相手を見ずに話している。

	Answer(応答)
A(5)	質問するだけでなく、話を聞いた感想も述べることで、話を深めることができている。
B(3)	質問をする、または、相づちを打って話をつなげることができている。
C(1)	相づちなどのつなぎ言葉がなく、会話がつながっていない。

	Contents(内容)
A(5)	内容がわかりやすく、理由付けなども話している。また最近習った文法事項を進んで取り入れている。
B(3)	ほぼ相手に伝わる内容になっている。
C(1)	内容が相手に伝わっていない。

次のシートは，３年生の２学期に実施した。トピックは，What did you do on your summer vacation?（夏休みは，何をしましたか）

９月に同じトピックで４回実施し，一回目（９点）より，２回目（１１点），３回目（１６点）と自己評価の点数が上がっていっている。ルーブリック（自己評価表）を用いることでどこを頑張ればよいかの目標が定まり，会話に対する自信も向上し，英語のやりとりに対する不安感が減ってきている様子が伺える。



One minute talk シート　３年３学期

上記シートは，１２月から３学期のもので，トピックは，選べるように設定している。トピックを選べることで，主体性や即興性を養うことを目標として実施している。

（２）学期末のパフォーマンス評価

学期末にOne minute talkのパフォーマンステストを実施した。ALTを活用し，ビデオ撮影を行ない，ALTからのアドバイスも生徒の励みとなった。実施後は，

生徒が実施したビデオを検証し，分析するとともにその結果を踏まえて次学期の評価項目を変更したり，トピックの難易度を変えたりと，評価だけでなく指導内容にも生かすようにした。テスト後には，自己評価を記入させた。以下は，年度末の振り返りの感想から

Q. どんなことができるようになったか？

・自分が何をしたかや好きなことなどが言えるようになった。

Q. これからどんな話題を英語で話したいか？

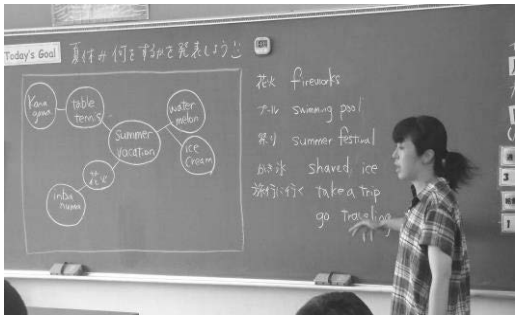
・自分の好きなことやどんなことをしたかを何分でも話したいです。

・今の日本について　　・すらすら話したい

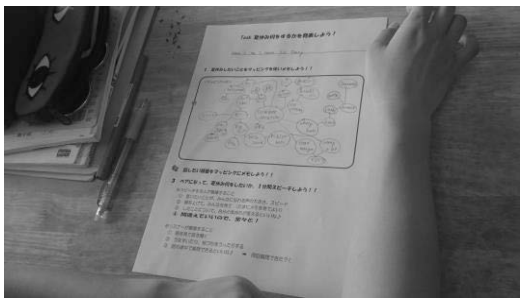
・高校で何をがんばりたいか。・将来の夢　など

（3）帯活動をいかした授業の取組

・マッピングを活用し，自分の意見をまとめ即興的に英語で発表する取組

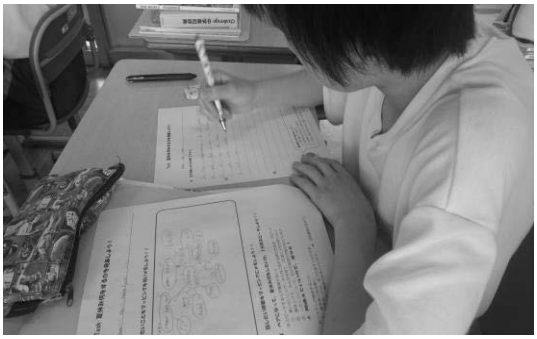


①　「夏休み何をするかを発表しよう」という学習課題に向けて，思いつくことをマッピングの手法で書き出していく。



②　発表したいことの優先順位をつける。

③４人組の小グループの中で発表。タイマーで時間を決めて，４人全員が発表する。グループ内の仲間の発表をしっかりと聞いて，疑問があったら質問をする。



③　自分が話したことを振り返りながら，文章で書く。書くことで，自分が伝えたかったことが上手に言えたかの確認となる。また，相手の発表にあいづちをうったり質問ができたかをチェックし，振り返りを行なう。最後に，振り返りを入れ書く取組みを入れることで，自分で考え，発表したことを見直し，深く考える機会ともなる。相手の発表を聞くこと，聞いてうなづいたり即興的に質問したりすること，自分の発表をすること，発表したことを書くことなど，「聞く」「話す」「書く」などの統合的な活動を繰り返し行なうことが大切であると言える。

（4）各学年のプロジェクト学習

1 年生「自己紹介をしよう！」を一工夫し，相手の発表に対して，必ずリアクションをし，質問をする取組みを入れ，話すことのやり取りの部分を設ける。

研究テーマ：「他者に配慮し，思いや考えを伝え合う外国語教育」　佐倉市立臼井西中学校
１年生「プロジェクト学習　自己紹介をしよう！」

	1．ALT と JTE で自己紹介のプレゼンを行なう まず ALT が写真をしめしながら自己紹介を行います。それを聞いた JTE は、その内容について質問をします。
	2．本時のねらいの確認 本時の課題：「友だちの自己紹介を聞き、質問することで、仲間の意外な一面を引き出そう」を確認し、どのように取り組めばよいかの評価基準についても生徒と共有する。
	3．グループ内で練習 ４人のグループで一人ずつ発表し、グループ内の聞き手は、話し手に対して質問をします。相手の発表に対して、Question→Answer→Reaction の流れで行なっていきます。 発表後、英語で表現できなかったことや質問内容をグループ内で考えます。
	4．ペアでの発表 ペアでの発表を相手をかえて何回か行ないます。発表で聞いたことについて、間違いを恐れずに進んで相づちをうったり、即興で質問をして話題をふくらませることを目標とします。
	5．発表と振り返り ペアでの発表の中で、紹介や質問のやりとりが上手だったペアを前で発表させ、良かった点を紹介します。 授業の最後に振り返りの行い，自己評価を行います。

2年生「アンケート結果をわかりやすく発表しよう」

学年の終わりにアンケートした内容をグループごとにパワーポイントでまとめ，英語でわかりやすく発表するという授業を行なった。One minute talk の延長線上で，自分たちで調べたことを英語でわかりやすく伝え，発表後，他のグループから質問を受け，即興的に答える場面を設けた。パワーポイントを工夫したり，相手にわかりやすく伝えるため，ジェスチャーなどを取り入れるグループもあり，クラスのお互いのことをよく知るいい機会にもなった。

3年生「自分たちの町を紹介しよう！」

公開授業の際，多くの来校者（英語の先生やALT等）に対して自分たちの住んでいる町，佐倉市についてわかりやすく英語で説明をする授業を行なった。それぞれの生徒が佐倉の親善大使になったつもりで，いかにわかりやすく説明するか，また，来校者からの質問にも即興的に答えられるように準備をすすめた。

授業の進め方

① グループで紹介したい場所を決定し，紹介文を考える。
② 紹介文の発表の練習
③ グループでスピーチ発表
④ 評価基準の確認
⑤ 来校者をそれぞれのグループに招いての発表

６，成果と課題

（1）成果

学習指導要領の改訂にともない，特に中学校の外国語科で留意すべき点は､「授業は英語で行なうことを基本とする」，そして，いままでの「聞く」「読む」「話す」「書く」の４技能から，「聞く」「読む」「話す（やり取り)」「話すこと（発表)」「書く」の４技能５領域となったことである。そこで，本校では，小学校と協力してコミュニケーションを大切にした授業を行なうため､「話すこと」のやり取りに焦点をあてて取り組んだ。特にOne minute talk の取組みは，１年生から３年生まで，方法を検討しながら，段階的に取り組むことができた。英語科３名の職員の努力と小学校の先生方の校内研修に取組む熱心な姿が，中学校職員の背中を押してくれた。小学校は，全校体制で１つの教科について研修するため，年間３回校内研修をおこなっていた。そこに英語科職員が必ず参観するように教務からの協力も得た。情報交換と教科会議の充実で良いアイデアを生むことができた。また，評価基準を示して継続的に活動を行なうことで生徒の意欲が増していくことがわかった。1年から3年まで継続的にOne minute talk を行なうことで，３年間の流れができ，３年終了時のゴールを定めやすくなった。

・英語のやりとりの増加(質問と答えで１ターンとし，ターン数で検証)

3年	1学期末	2学期末	変わったこと
Aさん	5回	9回	会話が続くようになった。
Bさん	4回	10回	具体的な説明があった。
Cさん	5回	8回	相手の感想を述べていた。
Dさん	4回	5回	相づちを打っていた。

・全国学力状況調査の結果から（H31.4.18実施)

平均点および生徒質問紙から	本校	全国
平　均　点	59.0%	56.0%
授業では即興で自分の考えや気持ちを英語で伝え合う活動が行なわれていたと思いますか	55.3%	26.0%
授業では自分の考えや気持ちなどを書く活動が行なわれていたと思いますか。	54.4%	41.0%
授業では聞いたり読んだりしたことについて生徒同士が英語で問答したり意見を述べ合う活動が行なわれていたと思いますか。	50.0%	39.1%

（2）課題

・1年生については，One minute talk を始める時期を考慮する必要がある。最初は，自己紹介や好きなもの紹介から対話につなげていくことが大切といえる。

・単発の一問一答的な会話になっている生徒もいる。あいづちやつなぎ言葉をさらに定着させたい。

・決められたトピックに対してはすらすらと会話ができるが，その場で与えられたものに対してはぎこちない会話になる。事実を述べることはできるが，思いや考えを述べるに至っていない。様々な工夫をして思いや考えを伝え合う活動を発展させていきたい。

・小中の授業内容の連携をさらに進めることが重要であると言える。

全ての子供たちの学びを保証する学校教育の在り方

本校発！～外国につながる児童を理解し学力を伸ばす取組～

千葉市立高浜第一小学校
校長　川　名　正　雄

１　本校を取り巻く環境と現状

本校のある千葉市美浜区は、外国につながる（外国籍および父母等が外国籍）児童が多い地域である。中でも高浜地区の市営・県営住宅には中国系の方が数多く居住し、街には右写真のような中国物産店が立ち並ぶ。公園に集う外国の方も多く、日常的に中国語の会話が飛び交う中で、児童は生活している。

本校の外国につながる児童の割合は下表のように推移し、令和となった今年度は５０％に上っている。

年度	H3	H13	H23	R1
全校児童（人）	634	399	326	160
外国につながる児童（人）	15	50	103	80
全体に占める割合（%）	2.4	12.5	31.6	50.0

また、つながりのある国と地域は日本を含め１０か国、人数の内訳は中国が約８割、その他（台湾、韓国、スリランカ、パキスタン、フィリピン、タンザニア、ナイジェリア、ハンガリー）が２割となる。

多国籍の児童が共存している本校の特徴を一言で表すと「寛容」が当てはまる。外見、言語、文化的背景等の異なる友達と普段から接する中で、その違いを許容し受け入れるなど、緩やかではあるが「グローバルな感覚」が育っていると考えられる。

一方、学力向上については大きな課題ととらえている。下表は千葉県標準学力テストの国語を、本校と県平均を比較した一覧である。（上段:本校平均　下段:県平均との比較）

学年	関心・意欲	話す・聞く	言語	書く	読む
２年	64.0	68.0	79.1	62.0	54.0
	-20.0	-7.1	-3.5	-4.9	-11.1
６年	65.8	69.7	72.3	64.5	53.1
	-14.5	-5.1	-4.3	-9.0	-10.4

２つの学年の抽出からも、全ての観点で県平均より低くなっていることがわかる。他学年、他教科も同様の傾向であるが、日本語の理解度と直結する国語の差異が顕著である。また、 実験的なデータではあるが、外国につながる児童の平均値は本校平均よりさらに１５ポイントほど低くなっている。

外国につながる児童を支える保護者の特徴は、「日本の学校教育に不慣れであること」「学校を信頼しているが、学校に任せる度合いが高いこと」である。中国語のみで生活できる地域コミュニティが存在するため、児童以上に日本語理解の必要性が低い。提出物等の回収率の低さや個人面談等での無断欠席など、保護者・家庭との連携が難しい現状にある。

２　主題について

今年度４月１日に改正入管法が施行、また６月２８日には日本語教育の推進に関する法律も施行された。外国人の受け入れの拡大は仕事のみならず、教育現場の在り方にも変容が求められてくるだろう。

本校は外国籍の児童が増え始めた平成１２年度より目指す子供像に「国際性豊かな子」を採用している。多文化等の豊かな共生を願ったものであり、金子みすずさんの詩より「みんなちがって　みんないい」を全校児童の合言葉とし、すべての教育活動を通し心の育成を図ってきた。その成果は、学校評価アンケートにおいて「挨拶、異文化理解・思いやり、友達関係、清掃」等、徳育に関する項目がいずれも３．６点以上（４点満点）の数値であることからもわかる。しかし、「基礎学力の定着」や「自ら進んで学習」の学力に関する項目は、２．８点であり、児童・保護者・学校とも課題としている。

そこで、その改善や学力の定着をめざし、①「本校独自の教育システムである日本語指導のさらなる充実」、②「各学級における児童理解の促進や教材の工夫」から主題に迫ろうと考えた。

また、本校に在籍する外国につながる児童及び保護者のほとんどが、将来も「日本で暮らし日本で働く」ことを願っている。それを踏まえると、課題の改善には、③「保護者の理解」を取り付け、一緒に育てい

こうとする協力体制を得られるような連携についても不可欠と考えている。

さらに、④指導を行う教員が資質・力量を向上させることで、より良い教育の提供が叶えられることから、本校発の取組について提案したい。

３　実践内容と成果

（１）指導の形態＜２主題①に関して＞

本校の教員や教育委員会派遣の指導協力員等を、以下のように配置・分業し、より効果的な指導体制を創出している。

Ａ：通級個別指導・・・取り出しによる個別指導

Ｂ：付き添い指導・・・各教科等の学習支援

Ｃ：放課後学習支援教室・・・保護者の同意を得て放課後に指導のための教室を設置、教科の補習をする

Ｄ：通訳・翻訳・・・お便りの翻訳、面談等の通訳、保護者への連絡・意思疎通

○主担当 △副担当	Ａ通級 なのはな	Ｂ付添 在籍学級	C放課後教室 少人数教室	D通訳・翻訳
専任①	○	△	○	○中国語
専任②	○	△	○	○英語
専任③	○	△	○	―
少人数	△	○	○	―
指導員	○	―	―	○中・英
ボランティア等	―	△	○	―

※なのはな学級：本校の日本語指導通級教室の名称

（２）日本語指導の充実＜２主題①に関して＞

①専任教諭及び指導員による取り出し指導

本校で力を注いでいるのが、専任教員の取り出し指導である。対象児童の生活・学習・適応状況・日本語能力等を総合的に判断し、指導の段階や指導内容を決定する。大別すると、

Ａ：日常会話に支障がある児童

Ｂ：日本語での学習参加が困難な児童

Ｃ：学習の理解が不十分な児童

となる。取り出しの際は、特別な教育課程を作成し、一人一人に応じたきめ細かな指導を提供している。以下はその指導内容である。

②３段階に分けた指導内容　（　）内は在日期間

第１段階　サバイバル日本語（０～３月程度）

Ａの「日常会話に支障がある児童」が対象で、令和元年度は１０名である。集団生活に最低限必要な日本語の力を身に付けることを主とし、「トイレに行きたい、水が飲みたい、具合が悪い」などの言語や、「トイレの位置や保健室の使い方」等を最優先に指導する。児童は、困ったときの対処を理解することで、安心して学校生活を送ることができるようになっている。周囲の言っていることを何とか理解でき、平仮名の読み書きができるまでの段階。

第２段階　生活日本語（３月～１年程度）

Ｂの「日本語での学習参加が困難な児童」が対象で令和元年度は９名である。学校生活を送るための日本語の力を身に付けることを主とし文法や語彙、漢字の習得等を通し、自分から用件や意思を伝えられるようになるまでの段階。

第３段階　学習日本語（１年～６年程度）

Ｃの「学習の理解が不十分な児童」が対象で、令和元年度は９名である。教科内容を理解できる日本語の力を身に付けることを主とし、予習・復習を行う段階。復習は補習的な要素が強いが、予習は、先に内容に触れておくことで学級での授業への主体的な参加が見られるなど、大きな効果を生んでいる。

③教材研究と開発

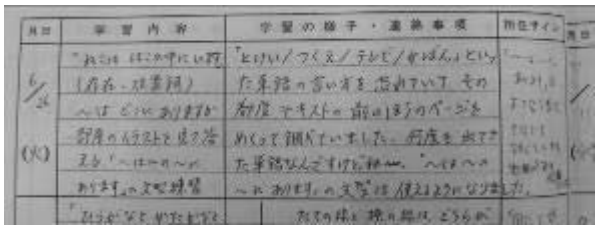
より効果的な指導を行うために、専任教員による教材研究と開発を進めている。動作化、ゲーム化、日常生活とつなげることなどがポイントとなる。以下は、本校で活用している教材である。

＜アプローチゲームを取り入れた指導＞

「○○がいちばん△△です」という文型指導の際に活用する。目標物に向かって自分の積み木を滑らせ、その距離を競う。「赤が一番近いです」「私のが一番遠いです」などのやり取りを、繰り返し行った。ルールが簡単なこと、短い時間で何度もゲームができることから、楽しく意欲的に活動し、より文型の理解を深めることができた。

だるま落としの活用

④担任との連携・「なのはなノート」の活用



日本語指導教室での学習の様子を、在籍学級の担任と情報共有するため、「なのはな連絡ノート」の活用を図っている。日本語指導担当から学級担任に「今日は、文具の名前について学んだので、教室でも言わせてほしい」などの情報を伝え、担任はそれを受け、在籍教室で声かけをする。また、「宿題のドリルの言葉がわからないので、支援をお願いしたい」といった担任からの依頼に応じて、日本語指導担当がルビ振りをするなど、双方向の情報共有により、学習内容の定着につなげることができている。

⑤全校体制の構築　校内研修

年度初めの職員会議において、今年度の日本語指導体制について提案し共通理解を図っている。また、年度に複数回、日本語指導教室の授業研修を行い、各担任も参観することで、児童の学びの様子を知るとともに、学級での日本語指導の在り方についての見識を深めている。各担任は、学びを日常の指導に生かすことができている。

（３）通常学級での指導の充実＜２主題②に関して＞

①対訳教材の活用

国語の授業では、物語文や説明文で対訳教材を活用している。日本語では読むことのできない文章も、母語であれば理解できる。また、話合い活動の場面で、同じ言語同士のグルーピングを行うなどの工夫により、主体的に話し合うなど学習意欲の高まりが見られている。

②同時通訳機器を活用した指導実践

担任と児童、児童同士また担任と保護者との会話を成立させ、意思疎通を図るために同時通訳機器を活用している。

（活用例Ａ）担任が学習指導に用いる。読み取りの難しい文章を母語に翻訳することで、児童は学習内容の理解に近づく。

（活用例Ｂ）児童が休み時間に用いる。他の児童との会話が成立し、意思疎通が図れる。児童の安心や安定に効果が見られている。特に、外国につながる児童の国籍が単独や少数の場合に大きな効果が見られる。

（活用例Ｃ）担任と保護者の面談等に用いる。生徒指導の問題等、専任教員や指導協力員の支援がすぐには得られない際に活用している。

（４）基礎学力を高める取組＜２主題①に関して＞

①朝の学習時間の取組

ア）オリジナルチャレンジプリント

基礎的な計算技能を高めるため、本校独自の四則演算プリントを作成している。担任外の教員も支援に当たり、全学年が毎週２日取り組んでいる。小学校１年生から６年生までの四則演算の内容を難易度に応じてそれぞれ２５段階程度に分類。児童は原則、初めの級を合格すると次の級をチャレンジする権利を取得する。カードに合格シールを積み重ね、意欲的に学習を進めることで、四則演算の定着度が高まっている。

イ）高浜名文１００選

日本の名作に触れ、語彙を増やすため本校独自で選定した作品の暗唱に取り組んでいる。オリジナルチャレンジプリント同様、担任外も支援に当たり、全学年週に１回実施している。児童は家庭学習や始業前に練習し、担任や支援の教員に判定を依頼する。間違えず、すらすら暗唱ができれば合格となる。教科書教材や、その作者の別作品、また早口言葉やいろはがるたなど多方面の作品を選んでいる。文章表現の面白さやリズムの良さを感じるなど、読書意欲の高まりにもつながっている。

②放課後学習支援教室の開設

下学年に在籍する外国につながる児童等の学力向上を図るために、放課後を活用して学習支援教室を開設し、復習を中心とした指導を行っている。

下学年が５校時で下校する水曜日の課外時間に、年間２０回、１回４５分で、同意書により希望者を募る。今年度は１５名が対象となっている。指導に当たるのは日本語指導の専任３名、少人数、下学年の担任、管理職等。学習内容はワークプリント、音読、かけ算九九、漢字書き取り等、個々に応じている。児童に寄り添い、きめ細かな指導

を行うことで、参加する児童も安心し意欲を持続して学習に臨んでいる。

放課後学習支援教室

（5）自国及び他国の文化の良さに触れる取組

①日本語指導ルーム

教室環境

日本の文化・畳敷き

取り出しを行う教室には、日本の文化、季節の行事、名詞・動詞・時間等に関する資料を掲示している。児童は、興味を高め参加し、生活と学習を結びつけることで定着を高めている。また、少人数で臨むため、自分のわからないことをじっくり教えてもらえたり、困っていることや悩みを打ち明けたりできるなど、メンタル面のケアにも効果が見られている。

②世界の食文化に触れる給食

昨年度、本年度ともに、中国や韓国、タイ等、児童の母国も含めた１０か国の食材を生かした給食を提供している。栄養士がその都度、読み物教材を配布し、給食時に児童がそれを読むことで、料理を味わうとともに、調理法や使用食材、その国の特産物や気候等を知り、食への関心を高め、世界の食文化に触れる機会となっている。

③外国との交流

中国小学生の発表

本校児童の発表

平成３０年度に、北京市の小学校と交流をする機会を設けた。中国の小学生は民族音楽を披露し、また、飲茶の会を行い本校児童との交流を深めた。本校の児童は日本の歌だけでなく、中国の「茉莉花」という歌を送るなど、互いの文化の良さや違いを感じ考える場面となった。

令和元年度は千葉市オリパラ推進課の事業によりシッティングバレー中国代表選手との交流の機会があった。ゲームを楽しんだ後、児童からのお礼の言葉を、中国籍の児童が同時通訳で述べると、選手をはじめ参加者全員から歓声があがった。言語は通じなくとも飲食や音楽、スポーツといった交流活動の経験は、その後、外国につながる児童の自尊感情の向上につながっている。

（6）保護者との連携＜２主題③に関して＞

①中国語に対訳した配布物

本校の配布物のうち、特に保護者に伝えるべき内容があったり回答を得たかったりする文書については裏面に対訳文を掲載している。対訳は日本語指導担当及び指導協力員が行っている。弁当を忘れる児童がなくなったり、授業参観や個人面談の参加率が向上したりするなど、保護者との意思疎通の改善が見られている。

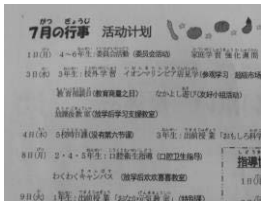
②日本語指導教室の参観・懇談会

学習参観時に、通常学級と時程をずらし、日本語指導教室の参観や懇談会を実施している。保護者は、通級での取り出し学習の方法や内容を知る機会となっている。その後の懇談会では、「丁寧な指導が行われていて安心した」「日本語が上達していくのがとても嬉しい」など前向きな感想や「何かあったら相談に乗ってほしい」といった学校を信頼する発言がたくさん見られた。

③保護者面談への日本語指導専任教員の同席と指導協力員の通訳

日本語指導を行っている児童の保護者及び日本語の理解が不十分な保護者に対して、専任教員や指導協力員が同席できるよう、優先度を上げて日程調整を行っている。学校の状況を伝え、また保護者に家庭での様子や要望を伺い、日常の指導に生かしている。状況を共有できることで、学校、家庭双方に良い効果が表れている。

④日本語指導教室通信の発行



日本語指導専任教員が毎月、通級指導の活活動等を伝える「なのはな通信」を発行している。児童の頑張っている様子や転入生の紹介、行事予定（対訳）、指導

協力員の来校予定等を記載。保護者はこの通信を読むことで、子供の学習や行事の様子、参加の必要な学校行事などを把握できる。学校行事等の参加率の向上と本校教育の理解の深まりにつながっている。

４　本校からの発信・共有**＜２主題④に関して＞**

（１）千葉市日本語指導者連絡会の設立

令和元年度５月現在、千葉市には１０校１６名の日本語指導専任教員が配置されている。その半数は今年度からの担当であり、試行錯誤の中で日々の指導にあたっている。また、千葉市に点在する外国につながる児童は５００名にも及ぶ。その児童が在籍する通常学級担任は、必要な指導を提供できない悩みと戦う毎日である。

そこで、これまでに述べてきたような本校の指導技術や教材等を市内に還元するべく、本校が幹事校及び事務局となり「千葉市日本語指導担当者連絡会」を設立した。

目的や活動内容は以下のとおりである。

①目的：日本語指導教員の資質・能力の向上により効果的な指導の提供につなげる

②内容：年間３回の学習会（令和元年度活動内容）

・第１回　７月
効果的な日本語指導の在り方について
・・・本校日本語指導専任教員が講師

・第２回　１０月
授業研究会（授業参観と協議会）
・・・指導案作成の際に本校日本語指導専任教員が助言・指導

・第３回　１月
教材を持ち寄りその工夫について協議

・３回とも、その都度の情報交換や悩み事の相談を話し合う場面も設定している

③助言者・協力者

・千葉市教育委員会指導主事・近隣大学教授等

第２回の授業研究会には、専任教員配置校だけでなく多くの学校からの参加者が見られた。協議会では、参加者から、「教材の工夫がすばらしく、参考になった。自分でもやってみたい」「相談できる体制があることを知った」など今後につながる感想が多かった。活動内容に賛同した千葉市教育委員会や近隣大学教授等も参加するようになり、助言指導を仰ぐことが可能となっている。

（２）情報共有システム

千葉市で採用している「校務システム」は、学校枠を超えた情報共有が可能である。本校発案により、今年度「日本語指導フォルダ」及び「日本語指導加配教員配置校フォルダ」を作成し、その中に該当校で使用した教材を保存するようにした。その結果、他の学校で作成した教材等も活用できるようになり、日本語指導担当教員の指導効果の向上と、業務の効率化の両面が図れている。

５　考察

サバイバル日本語からスタートした外国につながる児童も、日本語での学習意欲を徐々に高めていくことで、安心した在籍学級での生活が可能となっている。本年度に設けた「家庭学習強化週間」について、面談や懇談会で意図を説明していることから、少しずつ学習習慣の定着度が高まるなど、家庭との連携にも効果が見られてきた。学校評価の「家庭との連携」を示す項目も３．５点と高水準となった。子供が伸びる様子を実感した保護者は、変化を見せつつある。保護者の協力を今後にもつなげることで、さらに効果を高めていきたい。なお、本校は「不登校０、いじめ０」を４月より継続している。保護者からの厳しい意見が０というのも、これらの教育実践の成果といえよう。

６　今後の課題

（１）指導形態Ｂ（付き添い）の限界

学級内に様々な指導段階の児童が共存する中での学習支援の在り方に難しさを感じている。また、支援の仕方に加え、人的配置にも困難がある。今年度始めた習熟度学習を、算数だけでなく国語でも行うことによる効果も見込めるが、担当者を配置できない現状にある。

（２）指導の継続性

外国につながる児童にとって、なのはな学級での取り出し学習は学力、学習意欲、精神面での安定につながるなど、学校生活の大きな役割がある。一人一人の学習内容の定着や進度等を確実に引き継ぎ、より効率的、効果的な指導につなげる必要がある。また、指導者については、加配という不安定な配置であることから、指導体制確保のための働きかけ、指導者を育成するためのシステムの充実のための教育委員会や近隣大学等との連携、さらには地域指導者等との連携を図ること等を今後の課題とし、実践を進めていきたい。

英語で伝える地元のフリーペーパー作りについて

～定時制高校の英語の授業が社会とつながるきっかけに～

千葉県立松戸南高等学校
教諭 小 川 貴 広

1 はじめに

(1) 松戸南高等学校について

本校は千葉県においては２０１９年時点では２校しかない三部制の定時制の課程を持つ高等学校である。本校の特色として学校の体制を以下に示させていただく。

① 三部制…午前・午後・夜間部の三部からなり，基本的に生徒は１日の授業は４時間である。
② 単位制…卒業に必要な単位を修得するシステムである。
③ 卒業年数…基本は４年(四修制)であるが３年での卒業も目指せる（三修制)。

(2) 生徒の実態

本校は定時制の課程であるが，ほとんどの生徒が全日制の高校生と同じ年齢である。これまでの何らかの事情で学校に通えなかった経験のある生徒がほぼ全体の７割を占める。コミュニケーションに自信が持てず，消極的な生徒が多いように思われる。一方で，自分の趣味・特技を伸ばすために，１日４時間の定時制である本校を選んで入学した生徒も一定数いる。

(3)本校の英語の授業について

本校で設けられている英語の授業科目の主なものを以下で紹介させていただく。

科目名（一部を掲載）	対象年次
コミュニケーション英語基礎（２単位）	１年次
コミュニケーション英語Ⅰ（２単位）	２年次
コミュニケーション英語Ⅱ（４単位）	３・４年次
コミュニケーション英文法（２単位）	２年次
英語表現（２単位）	３・４年次
Daily English（２単位）	３・４年次
Vocabulary Walking（１単位）	主に１年次

本校は習熟度別授業を展開しており，１・２年次の国数英の授業では自分のレベルにあった授業を受けることができる。上記の科目ではコミュニケーション英語基礎Ⅰがそれにあたる。また学校設定科目（上記では Daily English・Vocabulary Walking）などでは比較的少人数での授業が展開されている。

授業では，本校の「学び直し」の理念の元，義務教育段階での学習の基礎・基本を補い，高等学校の学習内容へとつなげていくことが必要とされている。

(4) 本校生徒の課題

筆者は本校に着任してから３年目になるが，３年間担任をし，そして日々の授業で生徒と接する中で見えてきた課題を５つ提示させていただく。

① 基礎学力の定着度が低い
② 同年代とのコミュニケーションが不足している
③ 自己肯定感が低い
④ 社会性が乏しい
⑤ 社会とつながる機会が少ない

上記の課題に共通して言及できるのは，これまでの小中学校時代の長期欠席による「体験の不足」から浮かび上がってくる。中学校時代の授業を十分に受けられていない（全欠でないにしてもところどころ穴がある）ことにより①の課題は必至である。②の課題にもつながり，「他人と比較しての私」を十分に律することが困難であることから③にもつながる。「不登校」という経験は④，そして⑤へもつながる。

多くの生徒は人前で自分を表現することに臆しているが，筆者は「生徒の中にある多様なものを引き出し，それを強みにしていける場として，本校の授業を再定義できないか」と考えていた。

本文では，以上に示した本校生徒の課題に資する授業として「フリーペーパーを作ろう！」を紹介させていただく。生徒はこの取り組みの中で，全て英語を使用し，自分の「伝えたい！」を明確にし，作品を作り上げることができた。次章ではそのフリーペーパー作りのきっかけとなった，松戸市で発刊されている MATSUDO PAPER を紹介し，それを用いた授業を提案する。

2　松戸を英語で紹介する MATSUDO PAPER を教材として使用

(1) MATSUDO PAPER との出会い

本校の地元である松戸市で活動されているグラフィックデザイナーの佐藤大輔氏とつながる機会があり，彼が中心となって制作している MATSUDO PAPER を紹介していただいた。

(2) MATSUDO PAPER について

以下の３点について魅力的であると感じた。

① 魅力的な写真がたくさん掲載されている

② 記事は日本語と英語で書かれている（直訳の日本語ではなく大意は同じ，くらいのもの）

③ スタイリッシュでクリエイティブに松戸を紹介している。松戸であることを自慢したくなる。

佐藤氏によると，フリーペーパーのコンセプトは３つである。

① 松戸を魅力的に伝えるフリーペーパーであること

② 写真・イラストをメインにして思わず手に取るデザイン力があること

③ 英語を入れて，外国人にも松戸をアピールする仕掛けを作ること

(3) リーディング教材としての使用例

MATSUDO PAPER Vol.2（現在 Vol.11 まで発刊）から，松戸市の八柱駅周辺を紹介している文を抜粋させていただく。参考として，本校の最寄りは東松戸駅というところで，八柱（JR の名称は新八柱駅）の隣駅である。松戸駅から新京成電鉄を乗り継いできたり，比較的店舗が多い当駅で休日を過ごす生徒もいる，という背景事情も踏まえて，読んでいただければと思う。

> Yahashira –journey of 8
>
> The number 8 is considered lucky in Japan. With that in mind, Yahashira is undoubtedly the most auspicious area in Matsudo.（中略）Not to mention it is only 8 minutes away from Matsudo Station when traveling on the Shin Keisei Line. Surely it is a sign.

この文章を読解していく中で，以下のような問いを立て生徒たちと考えていった。

① なぜ日本で８は Lucky なのか

② auspicious とはどういう意味か

②　Not to mention ～　Shin Keisei Line.までの日本語訳

①ではそもそもの日本の文化が知れる。漢字の「八」は末広がりで縁起がいいという話をする。すると②の問いは，辞書を使わずとも何を意味しているのかがだいたいわかる。auspicious は「縁起がいい」という意味だが，自然と生徒が英文での類推を覚える。③も答えを書かせる時間を用意するが，単語・文法，構文がわからずペンが進まない子がほとんどであった。しかしタイミングを見て「新京成電鉄を使っている人いますか？」と聞く。数名の生徒が手を挙げる。「松戸駅からはどれくらいかかる？」と聞くと「１０分かからないくらい」と答える。「ありがとう。この本文を見ると Matsudo Station というのと Shin Keisei というところはわかるね。あと 8 minutes というのもあるけど，もしかしたら今〇〇さんが話してくれた事が書いてあるんじゃないかな？もう一回読んで考えてみよう」と返し，また改めて考えさせる。

佐藤大輔氏による MATSUDO PAPER　Vol.2

いずれにしても，生徒の頭の中には八柱駅や新京成電鉄のイメージがある。それが英文解釈を助けてくれる。さらには，「英文でなんて書いてあるのだろう」という前向きな問いが芽生える。「知らない単語・表現」「調べなきゃいけないもの」が，まちのイメージが既にあることによって「知りたい単語・表現」更には「地元を読み解くために必要な情報」に変わるのだ。

以下，MATSUDO PAPER を使うメリットとして３点が挙げられる。

① 生徒が探求的な英文読解に興味を持つ

② 「読めない単語」が「読みたい単語」になる

③ いつもの風景が英文の中にある

しかし，４技能指導という点で考えた時に，いずれにしてもこの活動では「読む」にしかフォーカスされていない。前述したように，授業を「生徒の中にある多様なものを引き出し，それを強みにしていける場」にするには，「話す」もしくは「書く」の表現活動を是非とも実現させたかった。そういった文脈を踏まえ，次章では「生徒のフリーペーパー作成の実践」を紹介させていただく.

3　生徒のフリーペーパー作成の実践

(1) 授業の実施要項

授業の実施要項は以下の通りである。

科目	コミュニケーション英語基礎（発展クラス）
教科書	JOYFUL English Communication Basic
単元	Lesson4 “Our Life”
対象	午前部１年次（現２年次）
人数	３３名
期間	2018 年 12 月初旬～2019 年２月初旬

発展クラスはレベルとしては一番上である。単元は Lesson4 “Our Life” という題材で，障がいを持った方との共生が主題であり，キーワードとして Society や Community を考える機会にもなった。単元内容を終わらせた後に，発展活動として「この機会に，自分の街についてもう一回考えてみよう」という目的から，その探求の手段としてフリーペーパーを作成するという方法を取った。

このクラスでは，以前 MATSDO PAPER を扱ったリーディングの授業を行なっている。(Vol.4「松戸のスイーツ」の題材を使用)

生徒が制作するフリーペーパーの仕様は以下の通りである。

サイズ	B４のクラフト紙
ページ	２ページ（B４２枚分）
内容	自分の街の魅力的な紹介
言語	全て英語
その他	自分の街の魅力を見つけ，取材し，英語の記事にし，デザインすること

(2)生徒がぶつかった問題「３つの『ない』」

デザインをしていく中で生徒は３つの問題に直面した。

①英語で文章を書けない

②絵が描けない

③地元にいいところがない

①に関してであるが，本校の授業でもライティングの内容に関しては十分に扱えていないのが現状である。主語と動詞を組み合わせた簡単な英文ならまだしも，魅力を伝える文は凝った表現や難しい単語が必要だと思っている生徒が多かった。中学校の知識がごっそり抜けている生徒も多くいる。今回の授業では，探求的な内容ということもあり，時間や用法を指定して，生徒が各々で持っているスマートフォン等の端末の使用を許可した。生徒が一葉に揃って頼りにしたのが翻訳機能を持った検索エンジンであった。最初は日本語で考えた文章を全文入れて，出てきた英文をそのまま書く生徒も一定数いた。

②に関しては，デザインのいろはを知らない生徒が嘆いていた悩みである。

③に関して，生徒の抱える最も深刻な問題がこれであった。「地元にいいところがない」と生徒は言い続けていた。こちらが「〇〇の方は△△があるじゃん」と返しても，「書いたってしょうがない」という。生徒は自分の街にあるものも，当たり前になっているせいか，自分にとって価値のないものとして見なしている。そういった感情は高校生が持ちがちな「東京志向」から起因すると思われる。ものと人が多く集まる場所に価値を置いてしまう生徒たちのその心情はよく理解ができる。

生徒たちが概ねの案を考えたところで学校は冬休みに入ってしまった。宿題として，休み明けに制作が捗るように調べたり取材をしたりしてくること，と生徒たちに課したが，「地元をそう見てしまっている目」というのはなかなか変わらないということは想定された。冬休みを使って教員の方からアクションを起こすことにした。

(3) 教員の挑戦

生徒に，具体的な制作のイメージを持ってもらうため，自分がフリーペーパー作りを経験し，休み明けに生徒にプレゼンテーションをしようと考えた。作る際に意識したポイントは以下の５つである。(筆者は千葉県柏市旧沼南町出身)

① 地元のキャッチコピーを英語で作る
　(→ The Terminal of TSU というキャッチコピー，手賀沼の形がひらがなの「つ」に見えるという理由から)

② 誰に読んでほしいか，対象を明確にする
　(→ 対象は本校生徒)

③ インスタグラムで加工したオシャレな写真を使う

④ 改めて地域を歩いて調査する

⑤ 自分にとっての当たり前 PR
　(→いまだに屋号で家々を呼び合うという慣習を紹介)

これらについてのプレゼンテーションをしたことにより，ペンの進まなかった生徒が「頑張ってみようと思いました！」とその日のフィードバックシートでコメントをくれたりなどした。

(4) 英語とデザインの指導のポイント

以上を踏まえて，改めて生徒に提示した英語活用とデザインの指導を以下にまとめる。

デザインの指導		英語の指導	
①	対象を決める	①	日本語でどう言いたいか決める
②	街の見る角度を決める	②	英語への直訳はしない
③	コンセプトを決める	③	翻訳機能は効果的に使う
④	視覚材料を使う	④	自分のまちを魅力的に伝えられる英語を選んで使用
⑤	文字と視覚材料のバランス		

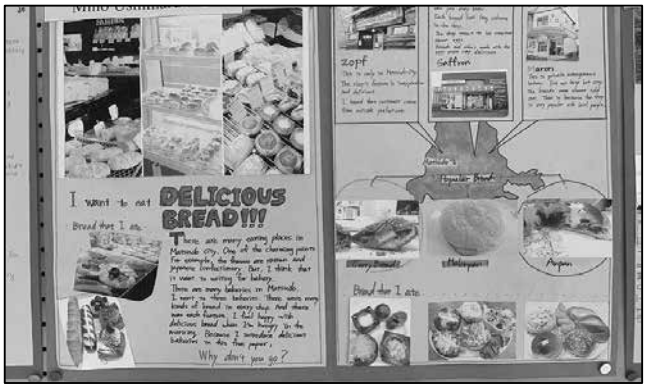
この活動では，美術の教員にも授業を見てもらい，デザインのアドバイスをもらうなどした。MATSUDO PAPER の佐藤氏からも筆者がアドバイスをもらい，「プロはこう言っていたよ」と生徒に伝えることで，地域の人が見てくれている実感を持たせるよう努めた。

その他の指導については以下の通りである。

① なるべく写真は自分で撮ってくる（土日など使って）
② 写真を撮った場合は「英語の授業の一環で使わせていただいてもよろしいですか？」としっかりことわる
③ インターネットから取ってきた画像は引用元を明記する

(5) 完成後のシェアとアーカイブ

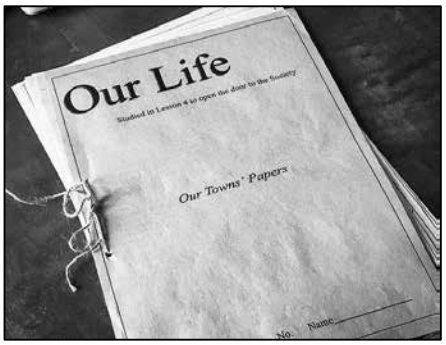
以下のようなフリーペーパーが完成した。



松戸のパン屋さんを特集したフリーペーパー（松戸市　女子）

校内（渡り廊下）への掲示

また右のような形で一つの冊子にし，生徒一人一人に配布した。生徒の作品Ｂ４の２枚分を両面印刷し，クラフト紙で表紙を作り，麻紐で綴じて冊子を作った。一人一部手渡した。授業でもらった教材をどれだけの学生が持ち続けるであろうか。多くの配布物がゴミ箱に捨ててしまうことが多いと思われるが，生徒が作ったものをオシャレにアーカイブすることで，一時の頑張りではなく，人生で残り続ける一品にしたかった。



4　生徒のフィードバックからわかったこと

(1)地域の見方に対する方の変化

〇松戸市在住　女子

[前]何もない町だと思っていた。特徴がなく新聞を作ると聞いた時はどうするか本当に迷った。

[後]目立たないだけでいいものはあるとわかった。新聞をきっかけにパン屋に通うことになりそう。

〇市川市在住　男子

[前]自分の住んでいるところにあまり関心がなかった。

[後]深く見つめてみると，特定の人にしか知られていない，みんなにもっと知ってもらいたい町の魅力をたくさん発見することができ，「自分の街を散歩する機会」が増えた。

(2)英語の使用について心がけたこと

〇なるべくたくさんの人に見てもらえるように，わかりやすい英文を使って書いた。長い文章だと読み手が飽きてしまうと思ったので，文を短くし見やすさ重視で書いた。

〇今使える英語でなるべくわかりやすく伝わるよう意識しました。文法なども知ってる範囲で書けるものにしました。

生徒たちは，ほとんどの生徒が地元の魅力を再発見できたと回答してくれた。英語の使用については，上記の２名は共通して「わかりやすさ」を重視したという点が挙げられる。それ以外にも，「わかりやすい英語で書いた」と回答した生徒が多くいた。いずれにしても，生徒が伝える相手を具体的に意識したことがそういう工夫をさせたことがコメントからも見て取れる。

5　まとめ

(1) 社会とつながることが英語力のステップアップにつながる

前述した松戸南高生の課題を再度示させていただく。

① 基礎学力の定着度が低い
② 同年代とのコミュニケーションが不足している
③ 自己肯定感が低い
④ 社会性が乏しい
⑤ 社会とつながる機会が少ない

今回の筆者の授業における取り組みは⑤からアプローチを行った。そうすることで⑤→④→③→②→①という順に英語力の向上が望まれることがわかった。

フリーペーパー制作にあたり，自分で街へ出て調べ取材し（⑤の達成），そうした中で人とのつながりを感じ，地元の良さを再発見する（④の達成）。地元は紛れもない生徒一人一人のアイデンティティーであり，唯一無二である。その価値を認識することで「私にも伝えるものがある」という気持ちを持つ。そして自分という存在を認めていくことにつながる（③の達成）。自分にも伝えるべきコンテンツがあるというマインドセットができて初めて，他者と対等にコミュニケーションができるという自信を持つ。同年代とはいい意味で競争する相手ではなく，違いを共有し合う存在だと認識する（②の達成）。隣の生徒と話したり，グループワークで議論したりという言語活動が促進され，主体的・対話的で深い学びが達成されていく（①の達成）。

(2)伝えたいものを探求する尊さを認識する

英語の授業でもアイスブレークとして，自分のことを隣の人とペアで話し合うというものがあるが，本校ではそれを容易にできない生徒が割合的に多い。それを達成するには授業の中で他者と話す必然性が必要となる。つまり生徒が内発的に持っている情報を「伝えたい！」「共有したい！」と思える必然性を作ることである。今回のフリーペーパーの制作では，持っている情報（生徒それぞれの地元）を「伝えたい」と思う気持ち作りの部分に重きを置いた。それらを意図した４つのプロセスを提示する。

① フリーペーパーのモデルとして MATSUDO PAPER を参考にする
② 教員が作ってみるなどデモンストレーションをする
③ 英語の使用やデザインのポイントを明確にする
④ 思い悩む生徒には個別でヒヤリングをし，持っている情報が価値あるものであることを伝える

筆者も，生徒が本当に全て英語でフリーペーパーを作り上げた時には驚きの気持ちでいっぱいであった。生徒のペンが進むようになったターニングポイントは，生徒が持っている地元の情報がただの情報から「伝えたい情報」に変わった後であることは確かであった。

6　新たな展望　地域と連携した授業作りの継続

(1)クリエイティブシティ松戸とのつながり

松戸市は平成 26 年３月に「松戸市文化芸術振興基本方針」を打ち出し，文化芸術を機軸として創造都市に向けた取り組みを開始した。「暮らしの芸術都市」というコンセプトを掲げ，市内のクリエイティブな店舗や施設，団体などが遍在するようになってきた。MATSUDO PAPER の発刊もその文脈にある。筆者はありがたいことに，このコンセプトの元で松戸を盛り上げてくださっている方々とのネットワークを持つことができ，学校教育にも色々な場面でご協力いただいている。

(2) 英語の授業と総合的な学習の時間での実践

今年度もフリーペーパーの制作を行っていきたい。また地元のカフェの店長とコラボレーションをし，2020 年の松戸市内のインバウンドを見据えた「英語版カフェメニューを作ろう！」なども制作を行った。総合的な学習の時間では，「クリエイティブ先生 s～まつどのまちを彩る人たち」というプロジェクトをさせていただいている。総合的な学習の時間に，年間５回，松戸で面白く仕事をしている方をお招きし，講演やワークショップを行うという企画である。この活動は現在進行中である。

(3) 地域とつながる新たな形の授業へ

本校の生徒は前述したように，同年代の生徒とのコミュニケーションに慎重な生徒が多い。確かに同年代の生徒と良好なコミュニケーションが取れることはこれからも大切である。しかし，Society 5.0 の時代を目前として，同年代との良好な関係構築と同様に，多様な年代と良好な関係を作り，多様な価値観・生き方を受け入れて自分の人生を創造していく能力がこれからは求められていくことは間違いない。本校の生徒たちには，これまで多様な人生を歩んできたからこそ，授業という限られた時間の中で，学校の外の風を感じて欲しいと願う。松戸市はとても面白いコンテンツがたくさんあり，文化を盛り上げている面白い大人がたくさんいる。教員がコーディネーターとなり，たくさんの生き方を生徒に見せてあげたいと思う。そして，しっかり社会で生きていくことに関して自分ごととして捉えて欲しい。

地域と主体的に関わり、未来に向かって学び続ける児童の育成

～第４学年「知ろう！伝えよう！残していこう！魅力いっぱい、天津の海」の実践を通して～

鴨川市立天津小湊小学校
教諭　辰　馬　基　倫

１．主題設定の理由

本校のある天津地区には、ひじきやわかめなどの豊かな食材、様々な種類の魚を漁獲する漁業、サーフィンに代表されるマリンスポーツ、天津漁港にて打ち上げ花火を背景に巡行する「船万燈（ふなまんどう）」などがあり、それぞれに大きな魅力がある。ひじきはおいしさを保つために他の産地とは違う方法で加工されている。そして、そのひじきをたくさんの人たちに食べてもらいたいという強い思いをもち、千葉県内はもとより各地で宣伝や販売をおこなっている方々がいる。漁業は、県内４位の漁獲量（天津漁港）を誇っている。そして、その漁業を絶やさぬよう、漁師になり仕事に励む方々がいる。サーフィンは、二夕間海岸で盛んにおこなわれている。そして、その海岸でサーフィンができることに喜びを感じ、海を愛して止まないサーファーの方々がいる。船万燈は、天津の古くから伝わる伝統である。その、伝統を未来に伝えたいという思いをもち、活動をしている方々がいる。天津の海は、児童が「魅力を伝えたい！残していきたい！」という思いをもつことができる、すばらしい教材である。

本学級は男子１２人、女子６人の１８人学級である。身近に海があるにも関わらず、普段なかなか海に行く機会はない。休日には家でテレビを見たり、ゲームをしたりして過ごすことが多い。また、「海は危険だから」という理由で、行くことを制限されている児童もいる。

第３学年時に、児童は地域の「民話」について学習をおこなっている。そのため、天津の地域について学習するということに強い興味・関心をもっている。このことは、年度当初におこなった意識調査（総合的な学習の時間について）の結果からも明らかで、児童は「今年も天津の地域のことについて学習したい」という思いをもっている。

また、児童は「天津の海には魅力がある」と考えている。しかし、「天津の海には、どんな生き物がいるのか？」「天津の海では、どんな食材がとれるのか？」等の問いに対して、明確に答えることのできる児童はいない。このことから、児童の「天津の海には魅力がある」という考えは、イメージであり、漠然としたものであることがわかった。

「本学級の児童に天津の海の魅力をたくさん知ってほしい。その魅力を『伝えたい！残していきたい！』と実感してほしい。そして、天津を愛し、天津に誇りをもってほしい。」この思いから、地域と主体的に関わり、未来に向かって学び続ける児童を育成するための取り組みをおこなうことを決意し、本主題を設定した。

２．研究目標

地域と主体的に関わり、未来に向かって学び続ける児童を育成するための方法を明らかにする。

【未来に向かって学び続ける児童とは】

○課題を解決するために情報を収集し、それを他者と伝え合うことのできる児童
○計画を立てて、課題を解決することのできる児童
○進んで様々な人や物と関わり、自らの課題を解決することのできる児童
○地域のよさに気付き、地域に愛着をもち、将来の夢や希望をもつことのできる児童

３．研究仮説

多様な体験活動の工夫をすれば、地域と主体的に関わり、未来に向かって学び続ける児童を育成することができるだろう。

【多様な体験活動の工夫とは】

学びを深めることのできる人との関わりを意図的に取り入れる。

〈どんな人か〉

・児童の思いや願いを叶えることのできる人
・自らの地域や仕事に対して誇りや愛着をもっている人
・高い専門性をもっている人

〈どのような場で関わらせるか〉

・児童の学びのステージに合わせて、関わらせる。

〈学びのステージとは〉

① 地域の人や物にふれ、そのよさや不思議に気付くステージ【ふれる・気付くステージ】

② 自らの学びを深めるステージ【深めるステージ】

③ 学びを広げるステージ【広げるステージ】

〈どのように関わらせるか〉

① 【ふれる・気付くステージ】
第１次の磯学習では、児童の知的好奇心に対応するため、ゲストティーチャー（海の博物館の先生）を招く。第２次では、児童一人ひとりの思いや願いに合わせて地域の方々へインタビューをおこなったり、ゲストティーチャーの方々から話を伺ったりする。
② 【深めるステージ】
第３次では、ゲストティーチャーの方々との座談会を設け、その思いを受け止めながら学びを進めることができるようにする。
③ 【広げるステージ】
第１次では、全校児童、保護者に評価してもらう。第３次では、ゲストティーチャーや地域の方、観光客、全校児童、保護者に評価してもらう。

４．研究内容

学びを深めることのできる人との関わりを、学びのステージに合わせて意図的に取り入れる。

〈評価規準〉

ア．知識・技能	①課題を解決するために必要な情報を収集している。 ②調べたことを友だちと伝え合っている。
イ．思考力・判断力・表現力等	①課題について計画を立てて解決し、学んだことを表現している。
ウ．学びに向かう力・人間性等	①天津の海に興味・感心をもち、自ら進んで様々な立場の人々と関わりながら課題を解決している。
エ．総合する能力	①学習を通し、地域のよさに気付き、将来の夢や希望をもっている。

５．研究の実際

（１）単元名

「知ろう！伝えよう！残していこう！魅力いっぱい、天津の海」

（２）単元の目標

○課題解決に向け、情報を収集し、調べたことを伝え合っている。【知識・技能】

○計画を立て、課題を解決し、学んだことを生活につなげている。【思考力・判断力・表現力等】

○天津の海の魅力について興味・関心をもち、進んで課題を解決している。【学びに向かう力・人間性等】

○天津の海の魅力やそれを支える人々にふれ、自分の生き方（天津の海とよりよく関わる方法）について、考えている。【総合する能力】

（３）活動の実際と考察（７０時間扱い）

第１次　天津の海にはどんな生き物がいるのだろう？

【ふれる・気付く・深めるステージ】

ゲストティーチャーとの関わり

第１次の磯学習では、児童の知的好奇心に対応することのできる環境づくりをするため、ゲストティーチャー（海の博物館の先生）を招いた。この方は、天津近隣の海の生き物について詳しい方である。

最初に天津地域の魅力や天津の海の魅力を話し合い、「天津の海には、どんな生き物がいるのだろう？」という課題を設定した。その後、３回の磯学習を実施した。１回目に行った実入の磯では、アゴハゼやイソガニ、アオウミウシ等の様々な種類の生き物を観察することができた。観察中に「こんな色のウミウシ初めて見た！」「いろんな種類のカニ見つけたよ！」「この魚は何ていう名前だろう？」等と声を出す児童が多くいた。児童はわからないことをゲストティーチャーに質問しながら生き物観察をおこなうことができた。

生き物観察後の児童の感想には、「天津の海でいろんな生き物を観察できたのがうれしかった。」や「また生き物観察をして、たくさんの生き物を見つけたい。」というものが多くあった。

そこで、児童の「また生き物観察をしたい。」という感想を取り上げ、「何のために行くのか？」を話し合った。児童は、「もっとたくさんの生き物を見つけたい。」「他の磯との違いを調べたい。」等と発言していた。話し合いで児童一人ひとりに目的意識を明確にもたせた

後、２回目（浜荻の磯）、３回目（二夕間の磯）の生き物観察をおこなった。

磯学習後の感想は以下の通りである。

- 海の博物館の川瀬先生は、いろんな生き物のことを知っていてすごいなと思った。
- 浜荻と実入の磯の生き物は違っていた。なぜ、いるのかいないのか気になった。
- 見たことない生き物がたくさんいてびっくりした。みんなに伝えたい。
- 全校の人にも、生き物を探しに海へ行って、いろいろ見つけてほしい。

【広げるステージ】全校児童、保護者との関わり

３回目の生き物観察が終わった後、児童は「見つけた生き物を全校の友だちやおうちの人たちに伝えたい。」「みんなに天津の海へ行ってほしい。そして、天津の海を好きになってほしい。」という思いをもった。そこで、全校児童や保護者に向けて情報発信するために海の生き物図鑑やパンフレットを作成した。海の生き物図鑑は図書室に置き、全校児童が読むことができるようにした。また、パンフレットは保護者面談の時期に合わせて昇降口に掲示し、全校児童だけではなく、保護者の方々に見ていただくことができるようにした。それを見た他学年の児童からは、「こんな生き物見たことない。ぼくも探してみたいなぁ。」という言葉が聞かれた。

第１次を終えた児童の感想は以下の通りである。

- 生き物図鑑を上手に作ることができてよかった。たくさんの人たちに読んでもらって、天津の海を好きになってもらいたい。
- 天津の海の生き物をたくさん観察することができて、楽しかった。パンフレットを見た人が、天津の海に行きたいと思ってくれるとうれしい。

これらの感想を生かして、第２次の学習に進んだ。

第２次　天津の海の魅力をもっと見つけよう

【ふれる・気付くステージ】

ゲストティーチャーとの関わり

第２次では、多岐にわたる児童の課題に対応するため、ゲストティーチャーの方々を招いた。この方々は、「児童の思いや願いを叶えることのできる」「自らの地域や仕事に対して誇りや愛着をもっている」「高い専門性をもっている」人である。

最初に「天津の海には、もっと自慢できる魅力があるのではないか？」という問いについて、ウェブマップを活用して話し合った。そこで児童からは「ひじき」「漁業」「サーフィン」「祭り」「環境」が魅力であるという意見が出されたため、「天津の海の自慢をもっと見つけよう」という全体の課題を設定した後、個々の課題を決定し解決する活動をおこなった。その際、第１次と同様に、「何のために調べるのか？」と児童に問いかけ、目的意識を明確にすることは欠かさなかった。児童からは、「天津の海には、まだまだ知らないことがたくさんあるはず。」「魅力をいっぱい見つけたい。」等の意見が出された。また、個々の課題ごとに５つのグループ（「ひじき」「漁業」「サーフィン」「祭り」「環境」）を編成し、協力して課題解決をおこなうことができるようにした。

情報収集をする際は、児童自身に課題を解決するための方法を考え、検討させた。はじめは、図書資料やインターネットを活用していたが、次第に限界があることに気付き、「地域の人にインタビューしたい。」「直接、見学に行きたい。」という思いをもつ児童が増えていった。そこで、一人ひとりの思いや願いが叶えられる人との関わりを取り入れた。

実際の活動は以下の通りである。

人との関りを取り入れた活動（グループ名）
天津でひじきの加工、販売をおこなう斎武商店の齋藤さんにインタビューをする。（ひじき）
天津漁港を訪れ、地元漁師の金髙さんにインタビューをする。天津漁港に水揚げの様子を見学に行く。（漁業）
地元プロサーファーの小川直久さんが経営するサーフショップを訪れ、インタビューをする。（サーフィン）
ふるさと港まつり実行委員の鎌田さんにインタビューをする。（祭り）
千葉大学海洋バイオシステム研究センターを訪れ、文部科学技官の瀧口さんにインタビューをする。（環境）

活動を終えた児童の感想は以下の通りである。

- 天津の海はサーフィンをしやすいことがわかった。また、サーファーは海に感謝の気持ちをもっていることがわかった。このことをもっと PR すれば、た

くさんの人が天津の海に来てくれると思う。
・天津と他の地域のひじきは加工方法が違うことがわかった。だから、天津のひじきは長くて太くておいしいんだと思った。この秘密をいろいろな人に知ってもらいたい。

その後、グループごとに報告会をおこない、調べたことを伝え合った。児童は、ゲストティーチャーとの関わりの中で、「魅力を伝えたい！残していきたい！」という強い思いをもっていた。そこで、「天津の海の魅力を発信したり、課題（問題点）を解決したりしていこう」という課題を設定し、第３次に進んだ。

第３次　天津の海の魅力を発信しよう

【深めるステージ】ゲストティーチャーとの関わり

第３次では、最初に自分たちが発信したい天津の海の魅力や解決したい課題（問題点）を考えた。しかし、天津の海の魅力をこれから先も残していくために、私たちがすべきこと（できること）は何かを考えるうえで、どうしたらよいか悩んでしまう児童もいた。そこで、「もう一回、ゲストティーチャーの人たちの思いを聞きたい。」「ゲストティーチャーの人たちと相談したい。」という児童の声を受けて、ゲストティーチャーの方々との座談会を設けた。この座談会で児童は、ゲストティーチャーの方の思いを受け止めながら、自分たちが発信したい天津の海の魅力や解決したい課題（問題点）を考えることができた。

「サーフィン」グループの児童は最初、天津のサーフィンスポットをたくさんの人たちに宣伝することが、魅力を残すことであると考えていた。しかし、ゲストティーチャーの方は、「本当にたくさんの人が天津の海にサーフィンをしに来るようになったら、今のようにサーフィンをすることができなくなる。それにゴミ（ポイ捨て）等の問題も今より大きくなるだろう。私たちは、それを望んでいないんだよ。」と真逆の思いをもっていたのである。そこで、「サーフィン」グループの児童は、その思いを受け止め、宣伝するのではなく、今ある海を守ることに考えを変えたのである。児童がゲストティーチャーの方の思いを受け止め、天津の海の未来について一生懸命に思考した一場面であった。

【広げるステージ】ゲストティーチャー、地域の方、観光客、全校児童、保護者との関わり

座談会後、グループごとに計画を立て、準備をして、天津の海の魅力を残していく活動をおこなっていった。その際、児童の願いや思いに合った様々な人を関わらせ、評価をしてもらった。

活動内容は以下の通りである。

おこなった活動（グループ名）
二夕間海岸のビーチクリーン活動（４年生全員） ・児童自らが保護者や地域の人たちに呼びかけ、一緒に二夕間海岸の清掃活動をおこなった。後日、その記事を地元新聞紙「房日新聞」に掲載していただいた。児童は、「やったぁ、ぼくたちの活動が新聞にのったよ！これでたくさんの人たちに、知ってもらえるね！」と話していた。
海の環境を守るための看板づくり（サーフィン、漁業） ・海の環境を守るための看板を４枚作り、設置した。後日、看板を見た保護者が「よくできているね。これでゴミが減るといいね。」と言ってくださった。児童は、「天津の海がいつまでもきれいであってほしいな。」と話していた。
ひじきパンフレットの作成・配布（ひじき） ・天津のひじきの魅力をまとめたひじきパンフレットを作成し、斎武商店に置いていただいた。後日、齋藤さんが「とてもよくできたパンフレットなので、増刷して配らせてもらいます。」と言ってくださった。児童は、「天津のひじきが有名になるといいな。」と笑顔で話していた。
海の環境を守るためのポスターの作成（環境） ポスターを作成して学校内に掲示した。ポスターを見た他学年の児童が「これからは海にゴミを捨てないようにします。」と言っていた。
天津の海パンフレットの作成（環境） 「ひじき」や「漁業」「祭り」等の天津の海の魅力をまとめた天津の海パンフレットを作成して、全学年の学級文庫に置いていただいた。また、図書室にも置き、だれでも手に取って見ることができるようにした。後日、３年生の先生から「パンフレット、人気でみんな見ているよ。」と聞き、「よかったぁ！」と笑顔を見せていた。

ふるさと港まつりへの参加を呼びかけるポスターの作成（祭り）

ポスターを作成して学校内に掲示した。ポスターを見た他学年の児童が「今年は行ってみようかな。」と言っていた。児童は、「ふるさと港まつりが盛り上がるといいな。」と話していた。

たくさんの人が参加したくなるふるさと港まつりの考案（祭り）

全校児童の保護者にふるさと港まつりについてのアンケートをとり、それを集約しながらたくさんの人たちが参加したくなるふるさと港まつりにするためには、どうすればよいかを考え、ふるさと港まつり実行委員の鎌田さんに提案をした。提案を聞いた鎌田さんは、「この提案をヒントにして、これからのふるさと港まつりを考えていきます。みなさん、ありがとうございました。」と、言ってくださった。児童は、「これから何十年先もふるさと港まつりが残っていってほしいな。」と話していた。

キンメダイについてまとめたチラシ配布（漁業）

キンメダイをとるための漁の仕方やおいしい料理方法等をチラシにまとめて、全校児童、保護者に配布した。チラシを見た保護者が、「キンメダイについて、よくまとまっていますね。」と言ってくださった。

感謝する会での発表

３月におこなわれた感謝する会で、全校児童、保護者、地域の方々に向けて、劇や歌で天津の海の魅力を発表した。発表後、大きな拍手とともに、「よかったよ！４年生、頑張ったね！」という声をかけられ、児童は皆、満足した表情をうかべていた。

お世話になった方々への感謝の手紙

お世話になったゲストティーチャーの方々へお礼の手紙を書いた。どの児童も自分たちの活動内容や天津の海に対する思い、ゲストティーチャーの方々への感謝の思いを真剣に手紙に書いていた。後日、ゲストティーチャーの方々から、「手紙ありがとう。これからも天津の海を大切にしていってください。」との言葉をいただいた。

ふるさと港まつりでのパフォーマンス
※２０１９年８月１０日実施

今年度、ふるさと港まつり実行委員の方から「港まつり当日、子どもたちにパフォーマンスをお願いしたい。」という話があった。そこで、参加することのできる児童と職員が集まり、保護者や地域の方々の前で「校歌」と「ソーラン節」を披露した。地域の方々からは「子どもたちのおかげで、盛り上がった。ありがとう。」という言葉をいただいた。児童は、「私たちの提案で港まつりが変わった。うれしい。」と笑顔で話していた。

第３次を終えた児童の感想は、以下の通りである。

- ぼくは、この１年間で天津の海の魅力がたくさんわかりました。４年生が終わり、天津の海の勉強が終わっても、天津の海の自慢をたくさんしていきたいと思います。これからも天津の海を大切にしていきます。
- 天津の海には、ひじきやサーフィンや祭りなどたくさんの魅力やじまんできることがありました。だから、これからは私たちが天津の海の魅力やじまんを残していける活動をどんどんして、天津の海を守っていきたいです。
- 泣いたり、笑ったりしながら意見をかわしてきたグループのみんなに「ありがとう」の気持ちでいっぱいです。そして、いろいろ教えていただいた地域の先生方にも感謝しています。来年も天津の地域のことについて、勉強をしていきたいです。

６．研究のまとめ

【成果】

○本単元の学習に、「児童の思いや願いを叶えることができる人」、「自らの地域や仕事に対して誇りや愛着をもっている人」、「高い専門性をもっている人」との関わりを取り入れたことで、課題解決に向けて主体的に学び続けることができた。

○それぞれの学びのステージにおいて、児童の思いや願いに合わせた人を関わらせたことで、地域の具体的な魅力に気付き、地域に愛着をもつことができた。そして、この魅力を「これから先も残していきたい。守りたい。」という思いをもつことができた。

【課題】

●児童の思いや願いに合った人材確保や連絡調整をすることが難しい。次年度は、校内で人材マップを作成したいと考えている。また、管理職や学年サポートの教職員の協力を得ながら、実践を進めるうえでのサポート体制を整備していきたい。

優　　良　　賞

「３つのあい」で「活気ある学校」を創る系統的マネジメントサイクル

～「故きを温ねて新しきを知る」カリキュラムマネジメントの在り方として～

館山市立第一中学校
校長　鈴　木　賢　一

Ⅰ　はじめに

以下は中学３年生の進路選択、その目標とする進路先の面接の場面だと思ってほしい。

面接官：「館山一中はどんな学校ですか？」
生　徒：「館山一中は『伝えあい・認めあい・磨きあい』という『３つのあい』を大切にしている学校です。」
面接官：「なるほど。それであなたは何を頑張りましたか？」
生　徒：「私は部活動で仲間と『磨きあい』を・・

生徒が誇りをもって語れる学校。その姿の実現を目指し、本校は平成19年度はじめに「３つのあい」という旗印（ビジョン）を掲げ、以来一貫してこの旗印の下で学校づくりに邁進してきた。

取組の開始からおよそ12年を越える時が経った。この間の教育界は、ゆとり教育の見直し・現行学習指導要領実施にはじまり、県下では新旧「みんなで取り組む『教育立県ちば』プラン」が実施される中、今回の新学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」が求められるまで、という義務教育をめぐる様々な変革の波が押し寄せた時期にあたる。本校はこの変革の荒波をこの「３つのあい」の旗印に集約・収斂するかたちで理解・解釈し、教育課程を編成・実施してきた。

中教審は、カリキュラムマネジメントの「学校全体の取組」として、全ての教職員がその必要性を理解し、教育課程全体の中での授業等の位置付けを意識する必要性や、学習指導要領等を豊かに読み取り、生徒の姿や地域の実情等と指導内容を照らし合わせ、校内研修等を通じて研究を重ねていくことの重要性を述べている。また、「３つの側面」として、教科横断的な視点やPDCAサイクルの確立、地域等外部人材の活用にも言及している。こうした流れが確立しつつある現在だが、本校はカリキュラムマネジメントという文言が教育界で大きな課題として注目される以前から、中教審が求めるマネジメントの手法を確立・実施していた。

本研究は、まさに「故きを温ねて新しきを知る」観点から、長年にわたる本校の取組の集積が、今求められている新しいカリキュラムマネジメントの在り方にいかに迫っているかを検証する。校長のリーダーシップで学校が変わるといわれる昨今だが、本校は「校長が代わっても変わらない学校」として一貫したビジョンを追求し、短期および中長期のPDCAサイクルを確立・実施してきた。それは、どういうことなのか。以下に紹介・検証する。（写真は本校校舎正面の看板）

Ⅱ　実践の概要

１　「３つのあい」とは何か

（１）「３つのあい」の成立の経緯・定義

本校は２つの小学校区からなる、全校200人規模の中学校であり、学校教育目標は「心豊かで活力ある生徒の育成」である。平成18年度当時、本校は問題行動や授業規律の確立等で多くの悩みを抱える学校であった。そこで従来の校内研修の手法を抜本的に見直し、まずは生徒や地域、保護者の実情の把握からスタートすることとした。方法については、Q-Uおよび評定尺度法によって生徒の願いと実態を、KJ法によって教職員による現状把握と目指す学校像を、アンケート調査によって地域や保護者の願いを集約・分析した。この結果、指示待ち傾向が強く、表現が苦手で「認められている」と感じる場面が少ない生徒像と、学習の土台となる人間関係づくり・規範意識の醸成を学校に強く求めている家庭や地域像が浮かび上がった。

この結果を受けて、校長のリーダーシップの下、研究推進委員会を核に全教職員で協議・検討を重ね、およそ１年がかりで確立したのが「３つのあい」の旗印とその取組の推進であった。

「３つのあい」は、

●「伝えあい」＝双方向のコミュニケーション能力や表現力
●「認めあい」＝お互いの「よさ」を相互に評価できる肯定的態度や感受性
●「磨きあい」＝お互いに力を合わせながら理想に向かって活動する実践行動

という資質・能力として定義した。この定義を生徒・教職員・保護者・地域で共有するとともに、あらゆる教育活動でこの旗印を打ち出すことで学校教育目標を具現化することが目指された。その挑戦はいわゆる仮説検証型の研究の範囲にとどまらず、全教育課程（部活動を含む）を舞台に学校改革を進めていく「臨床的実践研究」と呼ぶべきものとなっていった。

（2）「３つのあい」のコンセプト

「３つのあい」の全体構造は、上図のように家庭・地域・学校という「３つのＩ（主体）」がそれぞれの役割を果たすことにより、「３つのあい」＝「伝えあい・認めあい・磨きあい」の取組を通して、「３つの愛」＝「自他を愛し、母校を愛し、地域に愛される生徒・学校」を実現しようというかたちで成り立っている。

（3）継承される理念と、柔軟に領域を横断する取組

平成18年度以来、現在まで本校に着任した校長は6名である。当然ながらそれぞれ経営の重点は、その時時々の生徒の実態や保護者の願い等をふまえ、違うところもあるが、まずは歴代校長の経営方針から抜粋してみたい。

●「伝えあい」をとおしての言語活動の充実
●「３つのあい」に基づく、生徒主体の教育活動
●人権教育を全ての教育活動の基盤とし、「３つのあい」の取組を継続する。
●全ての教育活動において一中の目指す「３つのあい」を実践していく。
●生徒および教職員が互いの良さを認めあい、励まし合える、望ましい安心感が持てる人間関係を構築する。

次に「３つのあい」の積極的展開として、令和元年度まで２回の研究指定を受けているが、その概要は以下のようであった。（指定は仮説検証型の研究を展開）

H21・22	文部科学省指定「人権教育」	【研究主題】「伝えあい・認めあい・磨きあい」を身につけ自他を尊重できる生徒の育成
H28～30	千葉県教育委員会指定「学力学習状況検証」	【研究目標】伝えあい活動（言語活動）を充実しコミュニケーション能力を養い学びを深める。

上記２点からも、「３つのあい」はその時々でフレキシブルに表現を変えて登場するが、前掲のコンセプトは確実に生きていることがわかる。また、１（1）の定義は、生徒や教職員が努力・成果を「３つのあい」の文脈に則して評価するものさし（評価基準）として機能する。こうして「３つのあい」は通奏低音のように教育課程の根幹・展開を支え、カリキュラムに浸透していく。この一貫した理念の継承と各領域に展開する実践が学校教育目標の具現化につながっていった。

２「３つのあい」の具体的実践

「３つのあい」の取組をその特色から以下の通り、

（1）創造期（平成18・19年度前半）=Plan期
（2）実践期（平成19年度後半～23年度）＝Do期
（3）検証期（平成24～27年度）＝Check期
（4）改善期（平成28年度～）＝Act期

というかたちで区分した。各期は各年度あるいは教育課程上の各教育活動のPDCAサイクル（短期）を包含するかたちで中長期の大規模な PDCA サイクルを形成している。各期の実践例から全体像を具体的に示す。

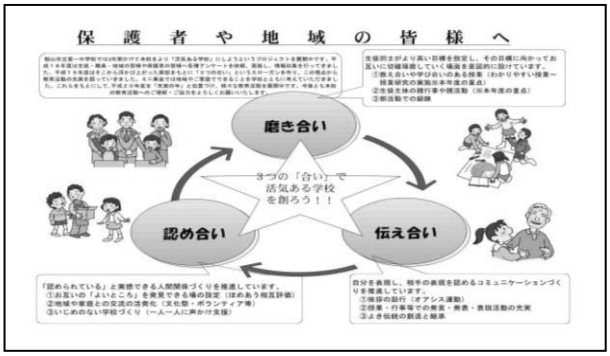
（1）創造期（平成18・19年度前半）＝Plan期

この時期は、まずは一中を活気ある学校にするための土台（考え方）と骨組み（具現化の手立て）づくりに力点が置かれ、取組の構想・計画が確立する。

① 啓発リーフレットの作成～取組の宣言

平成年19度当初、今後の指針をリーフレットとしてA3版で制作。生徒・教職員および地域・保護者用として三者に３種類を配布し、取組を宣言した。

【保護者・地域向け用リーフレット】



この取組により教職員の目標が明確になり、使命感が向上し、地域や保護者も「３つのあい」の視点から評価できる等、共通の土台をつくることができた。

②生徒への現れ（理想とする姿）の整理

リーフレット作成配布と並行して、望ましい生徒の変容の姿を描いた指針「３つのあいの視点から見た、生徒への現れ」を検討・整理し、図示した。これにより「伝えあい」を土台として段階的に「認めあい」「磨きあい」とステップアップし、最後に「活気ある学校」が具現化することがイメージされ、取組の基礎が固まった。(学校教育目標の「心豊かで活力ある生徒」＝「活気ある学校」とシンプルに表記することとした。)

③行事等の目標への「３つのあい」の位置づけ

教育課程で特に重要な位置を占める各種行事の充実を図るため、各分掌担当が「３つのあい」を目標に位置づけ、「生徒への現れ」と行事の目標の双方から実践を評価し、具体的改善点を整理。短期のPCDAサイクルを回す体制を整えた。以下は目標の一例である。

> ●３年生最後の県総体やコンクールに向け，お互いの健闘を祈る言葉を送り，「伝えあい・認めあい」の場とする。またその中で最後まで「磨きあい」の精神で部活動に取り組む意識をもたせる。(部活動がんばろう集会)

④生徒会活動によるあいさつ運動

具体的な一歩は、すぐにできる地道な実践から始まった。校舎正面の看板に掲げられているとおり、「明るいあいさつ・輝く笑顔」が心をつないでいくという観点から、生徒会本部や校紀部を中心としたあいさつ運動を展開。あいさつ指導は学年学級での指導だけでなく部活動単位でも行われ、地域や外部の教育関係者からも「一中生のあいさつがよくなった」という声が次第に聞かれるようになっていった。(全期で継続中)

（２）実践期（平成19年度後半～23年度）＝Do期

実践期には、創造期を土台として、教育課程全般にわたり組織（研究推進委員会・学年会議等）が有機的に機能しはじめ、実践範囲が拡大していった。特に取組を軌道に乗せるべく文部科学省の人権教育指定を受けた時期でもある。この指定を機に２カ年にわたる中期ビジョンを策定して中期のPCDAサイクルを確立。「３つのあい」を人権教育における資質・能力向上の視点から検証して、一定の成果を得ている。

（上図は平成21・22年度中期人権教育ビジョン）

①一中人権宣言の採択・掲示

生徒総会の場で「３つのあい」を基盤とした人権教育に取り組むことを宣言。文言は生徒から募集し、採択した。宣言は各教室に「３つのあい」と並べて掲示されていた。（平成 30 年度まで実施）

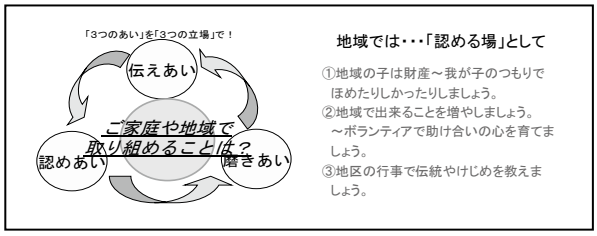
> **一中人権宣言**
>
> **た** 大切に、みんなの心と私の心!
> **て** 手と手をつないで広がる輪
> **い** 一緒に守ろう!みんなの人権
> **ち** 地域と生きる我が一中!

②「振り返りシート」等の「伝えあい」と「認めあい」（相互評価）の場の設定・内容の充実

この時期に生徒同士が「よさをほめあう相互評価」を各教科・領域部会等で検討、積極的に導入している。左写真は仲間の作品を見ていいところを記入する活動の様子である。他者に対する肯定的記述→教員のコメント→掲示→相互評価というサイクルを日常化し、「伝えあい」「認めあい」を深め、更に取組の質が向上する「磨きあい」を目指すという構図が教育課程全般で展開された。この結果、「３つのあい」は生徒の姿や成果物として「見える化」し、双方向のコミュニケーションによる相互理解が全校規模で促進されることとなった。

③地域に愛される学校を目指した取組

実践期には積極的な地域との交流も実現した。全校ボランティア体験として学区内の保育園や病院でのふれあい活動や寺社の清掃、NPO 団体との連携等を行っている。（創造期まで）また、文化祭カルチャー講座として、市のボランティア登録者を中心に講師を募り、生け花や切り絵、郷土の特産品である房州うちわづくりや手話講座など、毎年 15～20 講座を開設し、生徒がそれを選んで制作・体験活動を行っている。（全期にわたり継続中）こうして、地域と連携して「３つのあい」を実践し、相互に評価・共有する仕組みが整った。



さらに、上図のように、ミニ集会で本校の取り組みを地域に広く周知し「地域にできること」を考える機会をもっている。これは民生委員や区長会長等を招聘して家庭・地域の役割を確認し「３つの愛」の実現を目指す取組であった。（平成 19・20・22 年度）

（３）検証期（平成 24～27 年度）＝Check 期

この時期には、創造期・実践期に教育課程全般にわたり幅広く拡大・展開した「３つのあい」の理念を継承しつつも、カリキュラムの検証とスクラップアンドビルドを行い、長期 PDCA サイクルとしての取組の見直しを行っている。理由の一つは生徒の実態の変化であり、もう一つは現行学習指導要領への対応であった。この時期、「認められていない」と感じる生徒は一連の取組で減少したが、学校生活不満足・侵害行為等が増加傾向にあった。また、授業時数の確保等、現行学習指導要領への対応が喫緊の課題となっていた。このため、ボランティア体験の廃止等を行い、新たに学力向上による不満足解消を重点とした取組にシフトした。

①「伝えあい」をテーマとした仮説検証

検証期の研究主題は以下のように定められた。

> ・「伝えあう力」を活用した「確かな学力の育成」
> ～「聞く」「活かす」「深める」の学習サイクルの活性化をめざして～　（H24～26）
> ・「伝えあい」を通しての言語活動の充実
> ～双方向のコミュニケーションを通して～(H27)

特に、授業規律の確立という面から「聞く姿勢」という原点に返って各教科・領域で授業の見直しを行い、主として「伝えあい」についてペアやグループ学習での問題解決を行うなどの具体的手立てを試みている。

教科・領域名
◎各教科・領域における具体的手だて

	学校全体の仮説	学校全体の仮説に対する具体的手だて	進捗状況
1	学校生活のあらゆる場面において、「聞く（聴く）」ことに重きを置いた指導を続けることで、互いの心に安心感が生まれ、聞く（聴く）姿勢はもとより、自分の考えを他者に表現できるようになるであろう。	①「授業を始める前の約束」がしっかりできているかを確認する。 ②現在の学習活動（「話す」「聞く」「書く」「考える」等）を明確に指示し、他の生徒の発表しやすい環境に配慮できるようにする。	1学期　「授業を始める前の約束」と本時の学習の見通しを、授業の始めの時間に明示できた。 2学期　「授業を始める前の約束」を授業の初めに確認することで、授業規律が確かなものになってきた。
2	学習活動の中で、自分の考えや学んだことを生徒間で伝えあう活動（言語活動）を充実させることができれば、学んだことを活かし深めていくことができるであろう。	③５～４人の小グループで、生徒全員が意見を伝え合う場面を積極的に設ける。 ④「話す」「話し合う」ことを前提として「聞く力」を身に付けるために、約束にメモを取る機会を設ける。	1学期　小グループで話し合いメモをとる機会を設け、グループ内で考えを深めさせることができた。 2学期　少人数グループで、全員の前での発表を前提にした話し合い活動を行った。ゴールが見えていたことで、具体的な話し合い活動が出来た。
3	さまざまな教育活動において、本校がこれまで取り組んできた「認めあい」「磨きあい」の人権意識を持ってあたれば、「伝えあう力」の育成が促進されるであろう。	⑤他を尊重する態度を養うためにグループで言語活動をした際に他者評価の場面を設定する。 ⑥自分の考えを効果的に伝える技術を向上させるために、多人数（小グループ以上）の前で一人で発表する場面を設ける。	1学期　小グループでの活動を多くの生徒の前で発表する機会を設け、伝え合う経験をさせることができた。 2学期　全員の前でグループ発表をして、相手や質問内容から自分達のグループ発表の出来を振り返ることができた。

上表のような様式を用い，校内研修で，各教科が単元の中でどのように手立てを講じ、進捗状況はどうか、取組の状況を報告・共有する体制が整った。

②全校朝ドリル・学習相談の充実～教えあいの導入

授業改善の取組に加え、全校で朝ドリルを行い，クラス対抗で得点平均を順位付け、表彰する「磨きあい」を導入した。これによりクラス内での励ましあい・教えあいが促進された。また、定期テスト前に放課後組

まれる学習相談でも生徒同士の教えあいの機会を作る等、新たな取り組みを行っている。（改善期も継続）

（4）改善期（平成28年度～）＝Act期

改善期には、創造・実践・検証期の取組が教育課程内でバランスよく機能しはじめ、活気ある学校を生徒・教職員・保護者が実感できるようになった。

特に、検証期の授業実践を土台として、平成28～30年度に学力学習状況調査検証で3か年の指定を受けて取り組んでいる。（結果は平成30年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書にて報告。）研究主題は

基礎・基本の定着を図る学力向上を目指して
～学力・学習状況調査の分析を通して～

で、教科の重点としては以下のような手立てをとった。

【国語の手立て】

・文章を含む資料から読み取った内容を自分の言葉で表現する場や，読み取った内容に対して自分の意見を記述したり表現したりする時間を設ける。

【数学の研究構想と進捗状況・評価】

学力向上に向けた各教科の研究（平成３０年度）

教科名　数学

研究テーマ

基礎・基本の定着を図る学力向上を目指して
～学力・学習状況調査の分析を通して～

研究・研修目標

（１）わかりやすい、魅力ある授業づくりや学習支援を通して、基礎基本の定着を図る。
（２）伝えあい活動（言語活動）を充実させ、コミュニケーション能力を養うことで、学んだことを深める。
（３）学習習慣の確立や生活習慣の見直しおよび改善をし、学力の向上を図る。

◎学力向上に向けた各教科における「具体的な目標」
（学年末でこの目標が達成したか、達成しなかったかはっきりわかるもの）

３月に行われる再確認テスト（類ドリル）において、１・２学年において、達成度６０％以上にする。

◎この目標を達成させるための具体的な取り組み

	具体的な取り組み内容	進捗状況	成果と課題
1	毎時にかプリントを行い、基本的な計算技能の定着を行う。	1・2・3・4・③ 基本的な計算問題の解法を全体で行うことによって、計算ができる生徒が増えてきた。	1・2・3・4・③ 毎時間のプリントを行っていることは評価でき、作業は、かプリントを解くトリを連携させて取り組ませていく。
2	ＴＴや少人数指導を通して、個別の学習支援を行う。	1・②・3・4・5 ＴＴ指導では、ＴＴ教師が生徒を見ることができていない。少人数指導では、学習時間が足りていないケースが多	1・②・3・4・5 少人数授業における、ＴＴ・ＴＴの運用方、授業の進め方を工夫していく必要がある。
3	定期的に復習プリントを出し、復習に努める。	1・2・③・4・5 定期的に復習プリントを出しているが、数学が苦手な生徒ほど、復習していない現状が見られる。	1・2・③・4・5 多くの生徒は自習をしているが、ＴＴの方法を工夫することで、自習を強化できるかの検討が必要である。

◎「記述式」に対する改善策

具体的な改善策	進捗状況	成果と課題
ポイントやまとめを自分の言葉でまとめさせる。	自分の言葉でまとめさせることによって、授業を通して、何を学んだのかと、を振り返らせることができた。その達成感や充実感を全体で共有する場も考えていきたい。	ポイントやまとめを毎日の授業の中で行えるように毎時の授業の前にも意識して取り組むことができた。作業は、振り返りの時間に集中させて、「何を学んで、何ができるようになったのか」をノートにまとめられるような取り組みをノート指導の工夫をしていきたい。

上表、数学の例のように検証期に行っていた各教科・領域の実践の評価をバージョンアップ、工夫改善した。こうした取組の結果、国語で「記述式」について、少しずつＡ問題で学力向上が図られた。（平成28～30年度）また、数学の「関数」領域では全国平均を上回り、質問紙調査では「規範意識」が全国平均に並んで、学習規律の向上がみられた。（令和元年度）

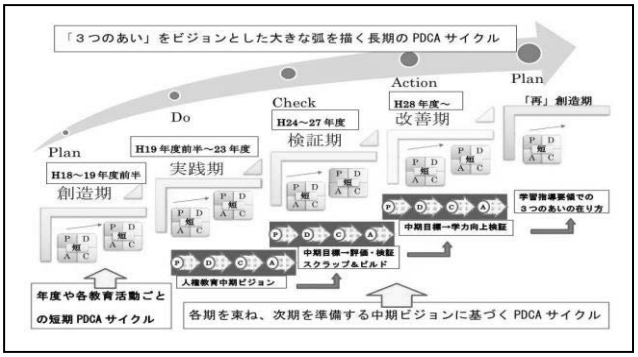
Ⅲ　おわりに

１　成果として

以上の通り、管理職のみならず全職員で創りあげた「３つのあい」という一貫したビジョンが、系統的な短期・中長期のPDCAサイクルの確立を促進し、カリキュラムマネジメントが機能した。この結果、組織や教育課程の中での教職員の目標・役割が明確となり、使命感・達成感が高まった。また、継続しているQ-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）で、「認められていない」と感じる生徒群（非承認群）についても下表の通り顕著な減少が見られた。（各期の３年生）

長期サイクル 期（年度）		非承認群	学校生活 満足群	侵害行為 認知群	学校生活 不満足群
P	創造期（H18）	２９％	３８％	１１％	２２％
D	実践期（H20）	２３％	３３％	１６％	２６％
C	検証期（H26）	１８％	３２％	１７％	３３％
A	改善期（R01）	１２％	６１％	５％	２２％

特に改善期に入ると「伝えあい」から「認めあい」が進み、授業に集中し、行事を盛り上げ、部活動等各種大会でも活躍する等、「磨きあい」が成果をあげている。その状況は、上表のとおり学校生活に満足し、侵害行為も少なくなったことに現れており、「活気ある学校」の具現化が着実に進んだといえる。



検証を上図に総括した。ビジョンを柱とした系統的マネジメントサイクルの一例として提示したい。

２　課題として

本校の取組は、今後も社会に開かれた教育課程の検討の中で継承されていく。長期の PDCA サイクルは「再創造期」というべき局面にある。充実から発展へ。理念は普遍、かつ取組みは柔軟に。「主体的・対話的で深い学び」を「３つのあい」で豊かに読み取り実践していきたい。なお、本校学区は令和元年９月に台風15号で被災し、復興の途にある。被災から何をどのように学び、「何ができるようになるか」。地域に愛される学校を目指し、地域や保護者とともに考え、実行していきたい。「故きを温ねて新しきを知る」カリキュラムマネジメントによる、本校の不断の挑戦は続いていく。（写真は校舎の復旧のため、土嚢を運ぶ生徒の姿）

進歩を感じ、やる気が高まり、使える喜びを味わえる小学校外国語教育の実践

～外国語を話す必然性のある言語使用場面と「フィードバック」を大切にした学習プロセスを通して～

旭市立滝郷小学校
校長 加 瀬 政 美

１. はじめに

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』(文部科学省 2017)のねらいは, 次の３つの基盤の上にある。それは,「何を理解して，何ができるか」を目指す「知識及び技能」,「理解していること，できることをどう使うか」の「思考力，判断力，表現力等」,「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」という「学びに向かう力，人間性等」である。さらに,「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること」が必要とされている。これらを踏まえ，旭市教育委員会が主催する旭市外国語教育プロジェクトチームは, *We Can! 1, We Can! 2.*（文部科学省，2018）の具体的な活用を示し，市内小学校共通の外国語教育を実践できるための「誰でもできる小学校外国語の授業」を目指し，ゴール達成を目的とし，外国語を話す必然性のある言語使用場面を大切にした学びのプロセスを作成した。また，具体的な言語の働きを意識して言いたいことを考えて表現させていく言語使用場面と，一度表現したことを自らの「気付き」をもとに振り返らせ再構築できるフィードバックを設定した。この言語使用場面とフィードバックが学習者の動機づけを刺激し，進歩を感じ，学習意欲を高め，コミュニケーションする相手を配慮しながら,「理解したもの，できたもの」が使えるようになる喜びを味わうことで，学習者の Directed Motivational Currents (DMCs)の可能性は広がるものと考えた。DMC とは,「できた！」という喜びを感じ，学習者が進歩を感じられる瞬間があれば，それは満足感，さらには達成感につながり，動機づけをより一層高める機会になる（Dörnyei, 2016）。本研究は, 私が勤務する旭市立滝郷小学校において，2018 年 5 月から 2019 年 6 月までの 26 時間の中, 公立小学校 1 校 5 年生 19 名，6 年生 15 名を対象に，外国語を話す必然性のある言語使用場面と「フィードバック」を大切にした学習プロセスを通して，どれだけ言語運用が可能になり，どれだけやる気が高まり，使える喜びを味わえたかを検証したものである。また，校外学習で東京都の英語村,「TOKYO GLOBAL GATEWAY(TGG)」での英語を母語とする外国人とのインタラクションや修学旅行（箱根・鎌倉）での，英語を母語とするまたは母語としない外国人へのインタビュー活動が，英語を使える機会を与えたことで動機づけをさらに高める結果となった。

２. 先行研究

Dörnyei(2016）は，指導者がどの場面で，どんなきっかけを与えれば，学習者の DMC を引き上げられるのかについて考察し，DMC を「長期間の行動を鼓舞したり，それを支えたりさせるような急激な動機づけの衝動もしくは高まり」(p. 2) であると定義している。DMC の特徴の 1 つとして,「特定可能なきっかけとなる要素がある」ことを挙げている。この要素を，言語活動の間に入れる自己の「気付き」を促す児童自身のフィードバックとして捉えている。

学習指導要領の目指す思考力・判断力・表現力等の育成のためには, 言語使用場面が現実味のあるもので, 具体的な言語の働きを意識し，ゴール達成を目指し，外国語を話す必然性のある言語使用場面を大切にした学びのプロセスが欠かせないとされる（Ellis, 2018)。

本研究は，言語使用場面後の「振り返り」で，特に「言いたかったけど言えなかった表現」に焦点を当てるような「振り返り」の場を設定した。Schmidt（1990, pp.129-158）の「授業の流れの中の『振り返り』の場面で言語の意識化が言語習得を促進させる」という理論に基づいている。これが，学習指導要領の求める適切な言語材料を活用し，思考・判断して情報を整理するとともに，自らの考えなどを形成，再構築する力につながるものと指摘されている。その中で，言語使用場面後の「振り返り」を通した省察的活動で,「どう言えばよかったのか」適切な言語形式や「やり取り」を

思考するようになる。この授業展開が学習者の思考を豊かにし，言語産出(output)の中で「発話の正確さ」の向上につながると述べている(Ellis , 1994)。

このような先行研究を踏まえ，本研究は，*We Can! 1, We Can! 2.*（文部科学省，2018）の中でそれぞれ１つずつの Unit からインタラクションの起こりえるゴール達成を目指す問題解決型の言語使用場面を設定した。「振り返り」を行うことで，発話に自信を持たせ，課題解決を可能にし，目標言語に近づき，進歩を感じ，学習意欲を高め，使える喜びを味わうことが，児童の productive skill に影響を与え，達成感を味わい，「もっと学びたい」という小学校外国語教育の礎が構築できると考えた。

３. 研究実践

3.1 研究実践の目的

小学校英語において，ゴール達成を目的とし，外国語を話す必然性のある言語使用場面を大切にした学びのプロセスで，言語活動の間に入れる児童自身のフィードバックが，自己の「気付き」を促し，学習者の言語習得を促進する礎になるかどうか，また長期的な動機づけに有効かどうかを調べる。

3.2 指導実践

(1) 使用教材および指導の手順

年間を通して，各 Unit ごとに CAN-DO リストを設けた。言語使用場面は，ゴールを意識化できるよう本物に近い authentic な課題解決型タスクとした（図 1，5 年生)。そのタスクを達成できるゴール到達までの言語活動の手順が「CAN-DO シート」である（図 2，5 年生)。このリストとシートは，旭市外国語プロジェクトチームで作成した。このシートは，どの指導者にもゴール達成までの指導手順や具体的な活動がわかりやすく解説されたもので，児童に配付され，児童は，ゴールまでの道筋が明確で，取り組みやすいと感じている。本研究実践は，5 年生においては，Unit 6 のトピック “I want to go to Italy.”に基づく「行ってみたい国はどこ？」と 6 年生においては，Unit 2 のトピック“Welcome to Japan.”に基づく「日本の紹介をしよう！」である。

表１は，指導の手順を示す授業の流れと具体的な指導者の働きかけ及び活動形態である。

図１　CAN-DO シートのタイトル一覧

CAN-DO シートのタイトル一覧！

We Can１（５年）

Unit 1.2	自己紹介ができて、相手をもっと知ろう！
Unit3.4	一日の生活を説明できる！
Unit. 5	先生、友達のできること、できないことをインタビューしてまとめ、自分のできること、できないこともふくめ紹介できる。
Unit. 6	成田空港で、街角インタビューに答えよう。行きたい国、見たいもの、食べたい、飲みたいもの、買いたいものなどを言うことができる。
Unit. 7	駅で英語を話す人から、質問を受けました。持っている地図を見せながら、英語で道案内をすることができる。
Unit. 8	友達といっしょに「ばんどう二郎」に行った。昼食をごちそうすると約束していた。財布には、2,000円しかない。注文を取りに来たウエイトレスは、アメリカ人であった。値段を確認しながら、英語で注文することができるか？
Unit. 9	自分のヒーローの紹介ミニポスターを作ることができる。

図２ ゴール達成までの言語活動手順　※(５年生 Unit 6 の実践)

***We Can 1*　Unit 6**

Class　No.　Name　　.

★成田空港で、街角インタビューに答えよう。行きたい国、見たいもの、食べたい、飲みたいもの、買いたいものなどを言うことができるか。
まず、

１　①P. 78のCountries Jingleの国から、興味のある国を１つ選ぼう！

　　.

②・その国のどこに訪れたい？（visit）　・何をみたい　（see）
　・何を食べたい(eat)　・何を飲みたい(drink)　・何を買いたい（buy）

③②についてどんな気持ち？

わくわくする	
おいしい	
美しい	
すごい	
楽しい	

２　次に、ペアでインタビューする。Ａ：インタビュアー　Ｂ：　旅行者
Ａ：　こんにちは。　質問してよろしいですか？　と言いたい！
Ｂ：　（快くいいよと言いたい）
Ａ：　どこの国に行きたいですか？
Ｂ：　（　〇〇の国へ行きたい）
Ａ：　なぜですか？
Ｂ　（〇〇したい、こうだから）と言いたい
例）I want to watch the Major League Baseball.　It’s exciting!

表１：授業の流れと具体的な指導者の働きかけおよび活動形態

Approach	授業の流れ	具体的な指導者の働きかけと活動形態
Pre-task	言語の使用場面を含むゴールを示す	「今回の課題はこれだよ」，「わかったこと，表現できたことを，実際にこんな場面で使えるかな」とやる気を起こさせる。
	基礎的な知識や技能を身につける活動	今日の目標はこれがわかって，これができる。だから，この活動で慣れていこう。
Task (Activity)	タスクを行う	児童同士，時には指導者とタスクを行う。児童同士は，ペアワークやグループワークで行う。時間を設定する。
Language focus	フィードバック「振り返り」を行う	録音または録画した発話を聞かせ，見せ，「振り返り」をすることで，言語形式，「言いたかったが言えなかった」など「気づき」を促す。指導者がモデルをしたり，児童の代表がプレゼンテーションをして，自分のパフォーマンスと比べる。
Practice	自分のものにしよう	「どこを改善すればいいのかな。」「うまく使えるために何が必要かな」「こういうこともできるよね」
Task ２ (Activity2)	もう一度タスクを行う	ペアやグループや指導者（相手）をかえて，再度タスクを行う。「さあ、再チャレンジだ。意識して使うとこ大丈夫かな」「相手が違うと話の流れも違うかも，その時どうする？」
Analysis Report	フィードバック「振り返り２」を行う	「１回目に比べ，どうだった？」「言いたいこと言えたかな？」「使えるようになったらどんな気持ち？」，「よくなったところを発表し合おうよ」「わかって，そしてできて，使えるようになったことはどんなことだろう？」

⑵ 授業の流れの中の「振り返り」の場面

Activity をした後，DMC のきっかけの要素になる自己の「振り返りシート」（図 3）をもとに，「気付き」から必要に応じて学習者の注意を言語形式や「言いたかったけど言えなかった表現」に焦点を当てるようなフィードバックを行った。表 1 の Language focus でのフィードバックで使用した「振り返りシート A」は，自分が「こう言いたい」と思ってリハーサルした表現等ができたかできなかったか調査した。次に，再び Activity をした後で，「振り返り 2」の場面で「振り返りシート B」を使用して，「振り返り」の前の Activity と比べ，言語使用に置いて何が克服できたのか，何ができるようになったのか，「振り返り」は有効だったのか，「振り返り」によって，動機づけは高まったのかを確認できるようにした。両振り返りシートからの意識の変容が児童の言語活動の際の発話にどれだけ影響を及ぼすのか調査した。

図 3 DMC のきっかけの要素となるフィードバックで使用した「振り返りシート」

フィードバック（振り返りシート）A

Q1 自分が「こう言いたい」と思ってリハーサルした表現等が実際にできたか。

4　十分にできた　3　できた方だ　2　不十分で満足はできない　1　できない

Q2 Q1で、4.3と回答した人に聞きます。　具体的にどんなことを心がけたからできたのか、教えてください

Q3 Q1で、2．1と回答した人に聞きます。　具体的に何が足らなかったのか、教えてください

Q4 難しい、うまく言えない表現はありましたか。「ある」と答えた人は、具体的に教えてください。

1　ある　2　ない

Q5 Q4で「ない」と答えた人は、友達にうまく言えるコツをアドバイスしてください。

フィードバック（振り返りシート）活動後 B

Q1 「振り返り」後、自分の言いたい表現は、うまく言えたのか。

4　十分にできた　3　できた方だ　2　不十分で満足はできない　1　できない

Q2 Q1で、4.3と回答した人に聞きます。　具体的にどんなことを心がけたからうまくいったのか。

Q3 Q1で、2．1と回答した人に聞きます。　心がけたけどうまくいかないのはなぜか。

Q4 「振り返り」は、自分のスピーキングに重要だと思うか。

4　とても重要　3　まあ重要の方だ　2　あまり重要と思わない　1　重要でない

Q5 Q4で、4、3と回答した人に聞きます。　なぜ重要なのか気持ちを含めて教えてください。

Q6 Q4で、2、1と回答した人に聞きます。　なぜ重要でないのか気持ちを含めて教えてください。

3.3 研究実践の概要

（1）研究の方法

期間は，2018 年 5 月から 2019 年 6 月までの 26 時間である。対象児童は，公立小学校 1 校 5 年生 19 名，6 年生 15 名の 34 名である。言語材料は，5 年生は，*We Can! 1*.（文部科学省，2018）Unit 6 のトピック“I want to go to Italy.”，“Where do you want to go? ”「行ってみたい国はどこ？」で，6 年生は，*We Can! 2*.（文部科学省，2018）Unit 2 のトピック“Welcome to Japan.”「日本の紹介をしよう！」を扱った。調査方法は，5 年生は JTE と 6 年生は ALT と 80 秒間のインタラクションを実施し，フィードバック前と後の言語活動の学習者が産出する言語について，語彙数の変容と質問紙からの意識の変容に関連する発話の質を面接法による質的調査を行った。

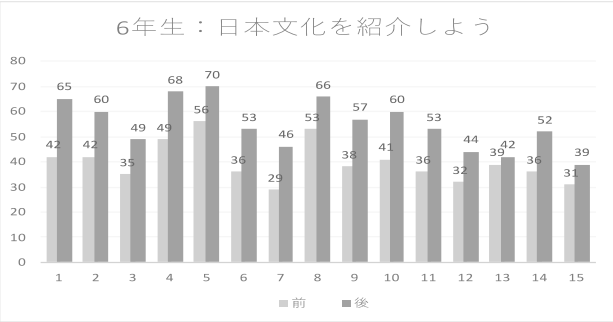
（2）分析の方法

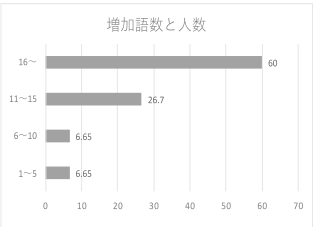
本研究実践の分析は，フィードバック前と後の言語活動の学習者が産出した語彙の中で，増加した発話語彙の質は，質問調査から児童の意識の変容を分類化し，質的研究のグランディドセオリーの方法を用いた。

（3）研究の実際

①フィードバック前と後の言語活動の学習者が産出する言語についての語彙数の変容を調査

表 2：　6 年生におけるフィードバック前と後の言語活動で産出した語彙数の一覧

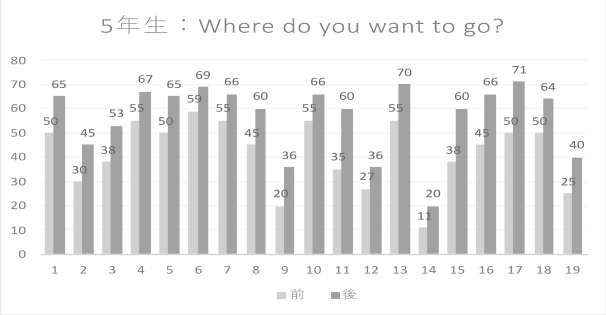


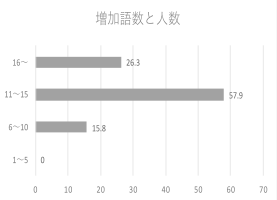


6 年生	平均使用語彙数
フィードバック前	40
フィードバック後	55

増加語数	人数割合
1～5	6.65
6～10	6.65
11～15	26.70
16～	60.00

表 3：　5 年生におけるフィードバック前と後の言語活動で産出した語彙数の一覧





5年生	平均使用語彙数
フィードバック前	42
増加語数フィードバック後	人数割合 57
1～5	0
6～10	15.8
11～15	57.9
16～	26.3

表 2.3 より，5 年生も 6 年生も，実施したトピックの違いはあるが，どの児童もフィードバック前の言語活動で産出した語彙数よりもフィードバック後の言語活動で産出した語彙数の方が，増加していることがわかる。このことから，フィードバックが発話語彙数を高める有効な手立てとなったと言える。

発話語彙数は増加したが，発話の質はどのように変化したのかに注目した。5，6 年生の児童のフィードバック前と後の実際の発話をそれぞれ書き起こした。その結果，増加した発話の質は，「自分の気持ち」の表現と「意味交渉」が増加したことがわかった。「意味交渉」とは，「おー，あなたは〇〇が好きなんですね。」「わかりましたか。」という確認チェックや「えっ，何ですか。」という明確化要求等である。このように，フィードバックの中で，何をきっかけにフィードバックの質が変容していったのか興味深い。また，フィードバック前から比較的発話語彙数値の高い児童は，増加はそれほど伸びていない。80 秒というインタラクションの制限がある以上，語彙数の増加には限界がある。そうしたことを踏まえ，はじめから話すことにおいて運用能力の高い児童は，フィードバックは有効なのか，もし有効ならどのような発話の質になるのか，語彙数の増加とともに検証してみた。

②フィードバック前の後の言語活動における学習者の意識に関する質問紙調査について

3.2 の（2）の授業の流れの中の「振り返り」の場面で，「振り返りシート A」と「振り返りシート B」を用いた。（表 4）AQ1 から BQ1 を 3 つの類型に分類し，事前も事後も言いたい表現がうまく言えたと感じた児童を 1，事前よりも事後の方が言いたい表現がうまく言えたと感じた児童が 2，事前も事後も言いたい表現は不十分で満足いかないと感じた児童が 3 とした。

AQ1 については，全体の 41.2%が肯定的に回答し，58.8%が否定的に回答したのに対し，BQ1 では，肯定的に回答した児童は 88.2%まで上昇した。そして，「振り返り 2」の場面では，1 と 2 の類型に回答した児童は，BQ4 でも 97.1%が肯定的に捉え，「振り返り」という場面が，児童の充実感や動機づけを高めているのではないか推測できる。また，再び Activity をする前の「振り返り」では，77.1%の児童は，一度では，自分の発話に満足できず課題が残ると感じていることがわかる。言語活動の児童自身の発話語彙数の変容と振り返りを通して意識の変容について面接法による質的調査を実施した。

表 4：「振り返りシート A と B」を使用した質問項目の学習者の意識に関する変容について

AQ1 と BQ1 の回答選択肢：

4 十分にできた　3 できた方だ　2 不十分で満足できない　1 できない

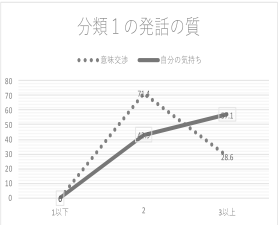
A Q1→BQ1 ： 事前も事後も言いたい表現がうまく言えたと感じた児童：1
A Q1→BQ1 ： 事前よりも事後の方が言いたい表現がうまく言えたと感じた児童：2
A Q1→BQ1 ： 事前も事後も言いたい表現は不十分で満足いかないと感じた児童：3

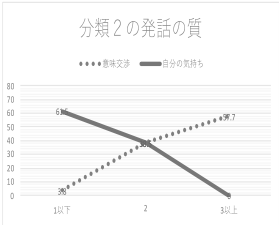
割合	A Q1	AQ4	BQ1	BQ4
4	11.76		38.24	88.24
3	29.41		50.00	8.82
2	50.00		8.82	2.94
1	8.82		2.94	0.00
ある　1		77.1		
ない　2		22.9		

4. 結果と考察

増加した発話語彙の質は，質的研究のグランディドセオリーの方法で結果を考察したら，5・6 年生を合わせて，主に 2 つのカテゴリーに分けることができた。1 つは，「意味交渉」であり，もう一つは、「自分の気持ち」の表現である。そして増加した発話語彙の質について，グラフで示したものが表 5 である。

表 5：増加語彙数の中から、児童の発話内容の質について





横軸は，「意味交渉」の使用回数と「自分の気持ち」の表現使用回数である。縦軸は，参加児童全体の割合である。AQ1→BQ1 のフィードバック前も後も言いたい表現がうまく言えたという児童を分類１とし，この分類の児童は，「自分の気持ち」の使用が最も高く，「意味交渉」の使用を上回った。一方，フィードバック前よりも後の方が言いたい表現がうまく言えたとういう児童を分類２とし，この分類の児童は，「自分の気持ち」を表現するに至っていないが，「意味交渉」の回数が極めて増えたということがわかる。分類１の児童は，It's interesting.や It's delicious. 等の「自分の気持ち」を伝える表現がフィードバック後増えていることがわかった。面接法において，個々に深く聞いてみると，「自分の意見を言った後にそれについて，自分の感情（気持ち）を相手に伝えた方が，相手が笑顔になる」や「フィードバックの時，ALT がモデルをしてくれたら，なんとなくイメージがわかり，あのように使うんだと意識化できた」と答えた児童がいる。このような「自分の感情（気持ち）を相手に伝える，ALT がモデルで意識化でき自分の発話が変わった」という児童は，全体の 85.3%であった。分類２の児童は，面接法で聞いてみると，「相手の言っていることに念を押すことで，確認できるし，そこで Yes と相手が言ってくれたら，自分の理解していることは正しかったんだと思い少しうれしくなった」や「フィードバックで，これを多く使うと相手とうまく話している感じがして，外国人になったようだ」等答えている児童が多かった。このような「意味交渉」がコミュニケーションの継続に有効であり効果があると実感できた児童は，73.5%であった。また，フィードバック後の言語活動では，「１回目に比べ，スムースに英語が言え，コミュニケーションが楽しかった，もっとやりたい」や「自分のできないところができてうれしい。英語が使えるようになった。次の Unit も頑張りたい」「校外学習や修学旅行で，実際に外国人と話す機会があるからもっと頑張ろうという気持ちになった」と答えている。そして「もっとやりたい」，「次も頑張りたい」と回答した児童は 88.2%になった。

つまり，フィードバック前から，ある程度英語の発話能力もあり意識の高い学習者は，フィードバックで，「自分の気持ち」を英語でうまく表現できるようになり，フィードバック前は，それほどうまく言えないと感じている学習者は，フィードバックで，「意味交渉」というスキルを身に付けつつあるということがわかった。また，言語活動の間に入るフィードバックは，学習者の英語学習についての技能を高めたいという意識の向上に有効であると示唆できる。そのきっかけが，動機づけになり，本校の外国語の授業を楽しみにし，使える喜びを味わえる外国語教育となった。

５．結論と今後の課題

5.1　結論

初期学習者である小学生において，指導者はフィードバックで，何に配慮しなければいけないか，どうすれば長く動機づけを保つことができるのかに焦点を当てた。自己の「気付き」を促すことも大切であるが，英語学習経験の浅い小学生には，フィードバックで気付かせるための指導者の具体的な働きかけが大事であることもわかってきた。質的調査の面接からわかったことは，適切なモデリングを与えて「気付き」を促すことが大切ということである。今研究で，ALT のモデルから理想とする発話の流れや必要な表現（自分の気持ち等）を学べ，学習意欲が高まるということである。フィードバックを通して再構築を図り，言語使用場面が現実味のあるものだからこそ動機が高まる。「気付く」機会を与えることで児童の学びに向かう力が涵養される。そうした中で，児童が自分の力を知って，より高度な「自己」を求めた時，「やる気」のスイッチが入り，言語活動の間に入れるフィードバックは学習者の productive skill に影響を及ぼし，学習意欲を高め，小学校英語においても DMC を引き上げられることがわかった。

5.2　今後の課題

動機づけにつながる真正性の高い言語使用場面の具体的な授業デザインを明確にし，動機づけの維持や児童自身が気付きを促進できる具体的なフィードバックのアプローチを市内の小学校で共通実践していきたい。

主体的に学びに向かい、「声と汗」があふれる体育授業に取り組む児童の育成

～深い学びの実現を目指して～

大網白里市立白里小学校
校長 内 山 知 良

1 主題設定の理由

次年度より完全実施される新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の必要性を示している。また、本校では教育目標を『よく遊び、よく学ぶ子の育成』と掲げている。本研究で掲げている「主体的に学びに向かう」とは、まさに『よく遊び、よく学ぶ子の育成』につながるものである。

一方で、全校児童を対象に行った運動有能感測定によると、「統制感」においては、学年が上がるにつれて特に低くなっており、「受容感」も全体的に低い。このような実態から、児童が友達や指導者との関わりを大切にしながら、課題を達成するために、どのような手立てがあるのかを講じることで、主体的に体育学習に取り組む児童の育成を図っていきたいと考えた。

2 主題について

（1）「主体的に学びに向かい」とは

○動きができるようになるための手立てとして、「めあて」をもって学習に取り組んでいること

○友達や指導者と「関わり合い」をもって学習に取り組んでいること の２つと捉えた。

（2）「めあて」とは

本研究では、「課題認識」「実態認識」「方法認識」の３つの認識を大切にすることとした。運動の課題（運動特性）を児童が把握し、理想の姿をつかむ（課題認識）。さらに、現状の運動のできばえを把握し（実態認識）、どういった部分に気をつけるのか（方法認識）、ということをめあてとして取り上げるようにする。

なお、発達段階ごとに「めあて」の立て方を以下のように考え、取り組んだ。

低学年･･･取り組み方や、やってみたい遊びをめあてとして捉える。「運動遊び」の良さを活かすためにも、振り返り活動や取り組みの中での気付きを大切にする。

中学年･･･児童の実態や動き・技のポイントから考えられるめあてを提示し、選択してもよいこととする。

高学年･･･中学年までの流れをおさえつつ、より自分の「現状のできばえ」を意識した手立てや取り組み方をめあてとして立てられるようにする。

（3）「関わり合い」とは

「わかる」と「できる」を結びつけるためには、考える視点を与え、さらには出来ばえを客観化できる手立てが必要となる。そこで、本研究では「関わり合い（特に友達同士）」に重点を置いている。

（4）「声と汗」とは

学習規律を基盤とし、「めあて学習」「関わり合い」に重点を置いた学習を行うことで、児童が主体的に関わった深い学びがなされることを「声と汗」と捉えている。単に「運動量」を表しているのではなく、新学習指導要領でいう「主体的・対話的で深い学び」の「深い」に当てはまるものと考えている。具体的に理想とする児童の姿を設定した（資料１）。

	声	汗
低学年	友達の良い動きを見つけたり、自分の成功体験を進んで伝えたりする。	様々な場や動きに挑戦する。繰り返し同じ場や動きに取り組む。
中学年	友達の動きや自分の成功体験からコツやアドバイスを見つけ、共有しようとする。	共有したコツやアドバイスを活かしながら、積極的に活動に取り組む。
高学年	単元の見通しをもち、自分たちに合った課題を見つける。	単元の見通しをもち、練習方法を工夫したり、活動の場を選んだりしながら取り組む。

（資料１ 「声と汗」の発達段階における理想の姿）

3 研究の目的

児童が主体的に学びに向かうようにするため、めあての設定の仕方や、活発な関わり合いをもてる工夫・改善を、体育科の授業実践を通して明らかにする。

４　研究の仮説

（仮説１）

自分にあっためあてをもたせ、そのめあてに対する解決方法を理解できるような工夫をすれば、児童が主体的に体育学習に取り組むことができるだろう。

①めあてをもたせるための手立て（資料２）

・学習のねらいや見通しを示すためのオリエンテーションの充実
・理想の姿を示すための学習資料
・自分の実態を把握させるための試しの運動、視聴覚教育機器

②解決方法を理解させるための手立て（資料２）

・パワーアップタイムによる基礎感覚づくり
・つまずきに気付かせるための、学習資料や視聴覚教育機器の活用
・段階的な練習方法を示すための学習資料の活用や共通課題の設定

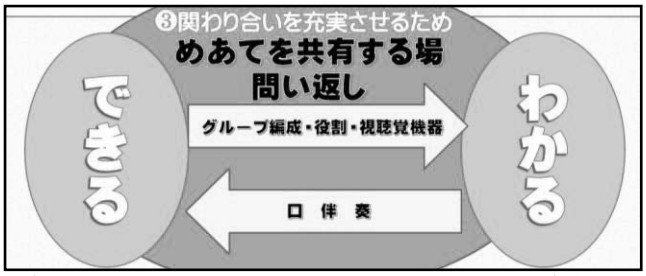
（資料２　主体的に学びに向かうための、めあての設定　仮説１のモデル）

（仮説２）

関わり合いを充実させる工夫をすれば、児童が「できる」、「わかる」喜びを味わい、深い学びが実現されるだろう。

③関わり合いを充実させるための手立て（資料３）

・めあてを伝え合い、共有するための場の設定や問い返し
・「わかる」から「できる」ための口伴奏の活用
・「できる」から「わかる」ための意図的なグループ編成（グループ内等質・異質）や役割の設定、視聴覚教育機器の活用



（資料３　関わり合いを充実させるための手立て　仮説２のモデル）

５　研究の方法

（１）仮説検証授業

平成２９年度の課題から、「運動の系統」を大切にすることで、児童が「めあて」をつかみやすくなり、「関わり合い」も活発になるだろうと考えた。そこで、「運動の系統」がはっきりしていると考えられる「器械運動領域」に絞り仮説検証授業を行ってきた。

さらに、令和元年度より、部会研修を「低学年部会」、「中学年部会」、「高学年部会」から「マット運動部会」、「鉄棒運動部会」、「跳び箱運動部会」と改め、学年をこえて、より系統を大切にした実践を進めることができるようにした。

（２）理論研修

運動の系統とその支援の方法や運動、健康への関心を高めるための手立て等について、体力向上委員会を組織し、取り組むこととした。

６　実践の内容

（１）仮説検証授業

①めあてをもたせるための手立て

○学習のねらいや見通しを示すためのオリエンテーションの充実

（２年　鉄棒を使った運動遊び）

忍者修行という場面設定をし、多くの技や動きに挑戦できるようにした。また、低学年という実態を踏まえ、２時間オリエンテーションを行った。実際に体を動かしながら行い、見通しをもてるようにした。

（６年　マット運動）

オリエンテーションでは、学習の進め方や動きについて確認した。単元を通して「集団マット」に取り組むこととした（資料４）。そのために、技のできばえを高めたり、新たな技に挑戦したりするという見通しを示した。また、単元計画を示し、それぞれの時間の活動２では「集団マット」を行うこと。活動１では、「集団マット」に取り入れたい技について、技能を高めていくようにした。

（資料４　単元を通して行う「集団マット」に取り組む様子）

○理想の姿を示すための学習資料

（６年　マット運動）

実際に「集団マット」を行っている様子の動画を視聴し、どんな技・動きを行っているか、どんな工夫をしているかについて意見を出し合い、イメージを膨らませた。（資料５）

（資料５　動画を視聴する様子）

○自分の実態を把握させるための試しの運動、視聴覚教育機器

（２年　鉄棒を使った運動遊び）

試しの運動では、前学年で取り組んだ技や動きを確認することで自分の実態を把握できるようにした（資料６）。その中で、さらに取り組みたい技や動き等、学習課題を見付けることができた。

（資料６　試しの運動で、前学年で取り組んだ遊びを行う様子）

（６年　マット運動）

視聴覚教育機器の後追い再生機能を利用して、自分の動きを把握できるようにした。自身の技のできばえを確認したり、課題を認識したりすることができた（資料７）。

（資料７　視聴覚教育機器を利用し技のできばえを確認する様子）

※低学年では、「運動遊び」の良さを活かすためにも、取り組み方や、やってみたい遊びを「めあて」としてとらえることとした。そこで、振り返り活動や取り組みの中での気付きを大切にする。

②解決方法を理解させるための手立て

○パワーアップタイムによる基礎感覚づくり（資料８）

（２年　鉄棒を使った運動遊び）

鉄棒だけではなく、固定施設やマットを活用しながら感覚づくりを行えるようにした。連続前回り下りや、ゲーム性のある活動を取り入れることで、何度も繰り返し取り組めるようにした。

（資料８　何度も繰り返し取り組めるようにしたパワーアップタイム）

（６年　マット運動）

動物歩きやゆりかご等、単元後半からは壁倒立も取り入れパワーアップタイムを行った。目線や手の位置等に気をつけさせることで、基礎感覚・基礎技能の向上につながった。

○つまずきに気付かせるための、学習資料や視聴覚教育機器の活用

（２年　鉄棒を使った運動遊び）

遊びのできを得点化、視覚化することで遊びのよさをいかしながら、さらに高い目標を設定できるようにした。例えば、振動感覚を高める運動では、着地点にケンステップを置くことで、振動の大きさを確かめられるようにした。

（６年　マット運動）

技を局面ごとにわけ、それぞれの局面での動きに着目させることで、つまずきの例を示した。また、つまずきの例に応じて目線や手の位置を意識するための目型、手型等を用意し、自分ができているか確認できるようにした。（資料９）

（資料９　目型を使った練習の様子）

○段階的な練習方法を示すための、学習資料の活用や共通課題の設定

（２年　鉄棒を使った運動遊び）

単元前半で、「跳び上がりや跳び下り」「ぶら下がり」「易しい回転」を共通課題として設定し、運動感覚を身に付けられるようにした。また、動きのポイントも確認し、遊びに取り入れられるようにした。

（６年　マット運動）

単元前半で、「倒立系」「回転系」の技に取り組むようにした。それぞれ「壁倒立」「跳び前転」を共通課題として設定した。課題に応じた練習方法や段階的な練習方法を示すことで、自分の実態やめあてに応じて進んで練習に取り組めるようにした（資料１０）。

（資料１０　共通課題に取り組む様子）

③関わり合いを充実させるための手立て

○めあてを伝え合い、共有するための場の設定や問い返し

（２年　鉄棒を使った運動遊び）

めあてについて、問い返しを行い、児童の目指す動きを具体的にイメージさせることができた。また、遊びの良さを活かすために、振り返りにも重点を置いた。実際に動きを示し、ポイントを共有することができた（資料１１）。

（

資料11　振り返りにおけるポイントの共有）

（６年　マット運動）

めあてについて、何の技について、どのポイントに気をつけ、どういった場で練習を行うかを児童に考えさせるようにした。そのうえで、なぜそういっためあてを立てたのかを問い返しすることで、前時の課題や実態に目を向けさせた。

○「わかる」から「できる」ための口伴奏の活用

（２年　鉄棒を使った運動遊び）

共通課題等に取り組む中で見付け、共有したポイントを口伴奏として取り入れた（資料１２）。積極的に活用することで、「わかる」を「できる」につなげることができた。

（資料１２　「振動」についての口伴奏を活用する様子）

（６年　マット運動）

共有したポイントを口伴奏として活用するだけでなく、積極的にアドバイスをすることができた（資料１３）。

（資料１３　目線についてアドバイスする様子）

○「できる」から「わかる」ための意図的なグループ編成や役割の設定、視聴覚教育機器の活用

（６年　マット運動）

視聴覚機器を積極的に活用することで、課題の把握を行うことができた。特に、「集団マット」に取り組む中で、タイミングを合わせたり、安定した動きに意識を向かわせたりすることができた。

（２）理論研修

①体力向上指導部

各学年における重点とする運動を設定し、取り組むようにした。

（マット運動・マットを使った運動遊び）

１年生	壁登り逆立ち（壁との距離２０ｃｍ・５秒間）
２年生	だんごむし逆立ち（壁・補助なし５秒間）
３年生	頭倒立・壁倒立
４年生	壁倒立（５秒間）
５年生	補助倒立（５秒間・片手で横から補助）
６年生	一人逆立ちから倒立前転（倒立姿勢を確実に）

②鉄棒運動・鉄棒を使った運動遊び

１年生	ふとんほし（振り）
２年生	かかえ込み振り
３年生	かかえ込み周り（補助）・逆上がり（補助器）
４年生	かかえ込み回り・逆上がり（補助）
５年生	連続かかえ込み回り・逆上がり
６年生	後方支持回転

③跳び箱運動・跳び箱を使った運動遊び

１年生	馬跳び・タイヤ跳び（縦・横）	
２年生	開脚跳び（低学年用跳び箱・縦４段）	
３年生	開脚跳び（縦４段）	台上前転（縦４段）
４年生	開脚跳び（縦５段）	
５年生	かかえ込み跳び（横５段）	大きな台上前転（縦5段）
６年生		首・頭はね跳び（縦5段）

また、各学年のパワーアップタイム等で実施する基礎感覚づくりの運動についても動きを設定した。

②調査広報部

運動有能感調査・形成的授業評価の集計を行った。また、「体育便り」を発行することで運動、健康への意識喚起を図った。

③特別支援部

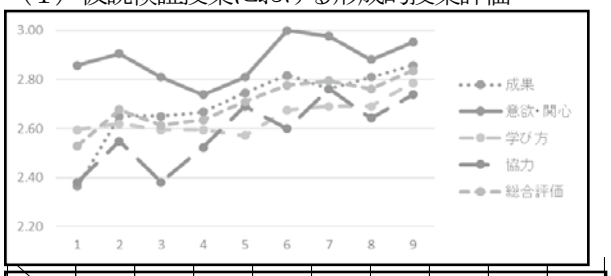
ユニバーサルデザインの視点を活かしながら、学習時における教師の関わり方を提案した。

④環境整備部

体育環境の整備を行った。体育倉庫のデザインを作成、整備した。また必要に応じて教材・教具の作成を行った。

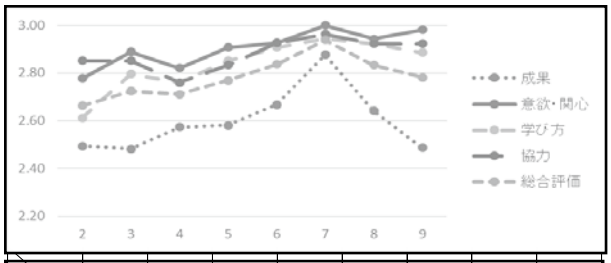
7　研究のまとめ

（1）仮説検証授業における形成的授業評価



単元＼項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9
成果	2.37	2.65	2.65	2.67	2.75	2.82	2.76	2.81	2.86
意欲・関心	2.86	2.90	2.81	2.74	2.81	3.00	2.98	2.88	2.95
学び方	2.60	2.62	2.60	2.60	2.57	2.68	2.69	2.69	2.79
協力	2.38	2.55	2.38	2.52	2.69	2.60	2.76	2.64	2.74
総合評価	2.53	2.68	2.61	2.63	2.71	2.78	2.79	2.76	2.84

（資料１４　２年１組の形成的授業評価）



単元＼項目	2	3	4	5	6	7	8	9
成果	2.49	2.48	2.57	2.58	2.67	2.88	2.64	2.49
意欲・関心	2.78	2.89	2.82	2.91	2.93	3.00	2.94	2.98
学び方	2.61	2.80	2.76	2.85	2.91	2.94	2.92	2.88
協力	2.85	2.85	2.76	2.83	2.93	2.96	2.92	2.92
総合評価	2.66	2.72	2.71	2.77	2.84	2.94	2.83	2.78

（資料１５　６年１組　形成的授業評価）

（2）運動有能感測定の結果

因子	R1.6（n＝21）		R1.10（n＝21）		有意差
	Mean	SD	Mean	SD	
身体的有能さの認知	12.86	2.85	13.38	1.68	n.s.
統制感	12.95	2.84	14.19	1.22	†
受容感	10.57	3.50	12.57	1.99	*
	n.s 非優位 †.05＜p＜.1, *p＜.05　**p<.01				

（資料１６　２年１組　運動有能感測定の結果）

因子	R1.6（n=27）		R1.11（n＝27）		有意差
	Mean	SD	Mean	SD	
身体的有能さの認知	12.48	3.80	13.26	3.80	*
統制感	16.85	3.36	16.93	3.25	n.s.
受容感	15.89	3.57	17.15	3.35	**
n.s 非優位 †.05＜p＜.1, *p＜.05　**p<.01					

（資料１７　６年１組　運動有能感測定の結果）

（3）成果

○めあての設定の仕方を工夫することで、意欲・関心に関わる自己評価や、統制感を高めることができた。特に、効果的なオリエンテーションの設定や、「問い返し」によるめあての意識化、焦点化が有効であったと考える。

○解決方法を理解させるための手立てとして、共通課題を設定し取り組んだことで、学び方について、児童の肯定的な考えを高めることができた。各課題に応じた練習方法を示したことも効果的であった。また、統制感・身体的有能さを認知させることができたと考える。

○活発な関わり合いをもてる工夫を行ったことで、受容感の高まりが見られた。関わり合いの場を効果的に設定したことや、グルーピングの工夫等が効果的であった。また高学年においては、単元を通して取り組む活動（集団マット）を設定したことや、視聴覚教育機器を効果的に活用できたことが要因であった。低学年では遊びを活かすことで「口伴奏」を効果的に活用できたこと、振り返りの場に重点をおいたことが効果的であった。

○運動の系統を大切にしたことで、「各学年の重点とする運動」を設定することができた。「各学年の重点とする運動」については、継続して実施していくことで、さらなる成果が期待できる。

（4）課題

▲統制感において有意な差が見られたとは言えない。「各学年の重点とする運動」について、予想されるつまずきと、それに応じた支援の仕方やアドバイス等を共有していくことが必要であると考える。また、パワーアップタイム等に反映させることも効果的であると考える。さらに、各学年・発達段階に応じた手立てを考えていきたい。

▲児童の実態に応じた課題の設定を行っていきたい。そのためにも、「各学年の重点とする運動」について見直しを図るとともに、児童ができるようになっていく段階や支援の仕方を実技研修等で共通理解していきたい。

8　おわりに

３年間の体育研究を通して、成果・課題を明らかにしていくことができた。しかし、継続した教育実践こそが大切であり、主体的に体育学習に取り組む児童の育成につながると考える。

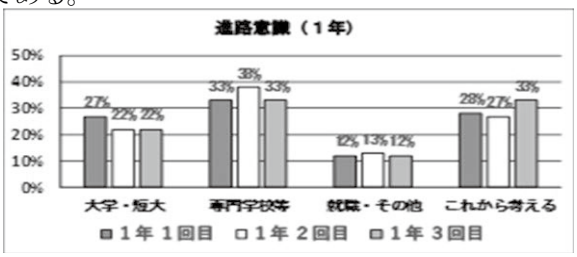
児童一人一人が、小学校生活６年間をかけて、「声と汗」があふれる体育学習を目指し、引き続き体育研究を深めていきたい。

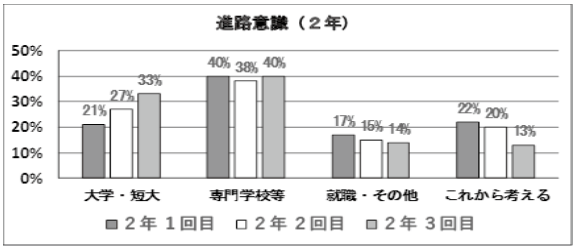
「教わる」から「学ぶ」へ　～「探究ゼミ」の挑戦～

千葉県立浦安高等学校
校長　若　菜　秀　彦

１　現状の課題
～進路意識と学力、そして意欲～

下のグラフと表は平成２９年度に実施した進路意識調査とＧＴＺ[1]の結果を学年別に表したものである。





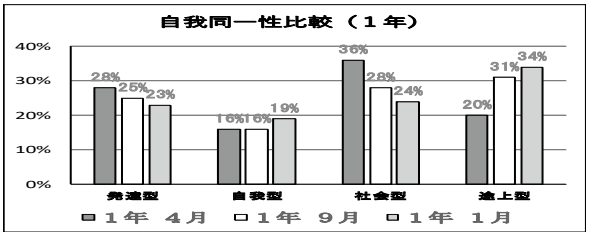
学年別	１年			２年		
ＧＴＺ	４月	９月	１月	４月	９回	１月
国語	C2-	C2-	**C3-**	D1+	D1-	**D1-**
数学	C3-	D1+	**D1+**	D1-	D2+	**D2+**
英語	D2+	D2+	**D1-**	D2+	D2-	**D2+**

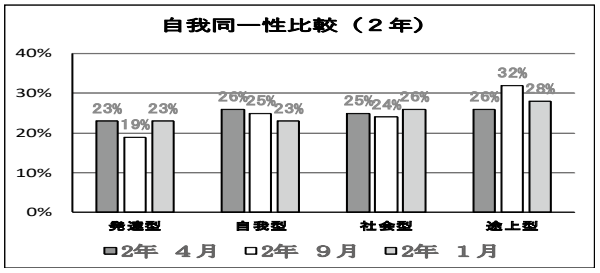
進路意識を見てみると、１年生では、「大学・短大」が減少し「これから考える」が増加している。２年生では「就職・その他」や「これから考える」が減少し、「大学・短大」が増加している。

ＧＴＺでは、１年生の「英語」は上昇傾向だが、１，２年生ともに「国語」と「数学」がそれぞれ下降傾向である。特に１年生の「数学」ではＣゾーンからＤゾーンへダウンしている。

これらのことから、「これから考える」が増加している１年生では、目標の不明確さからかＧＴＺも下降傾向であるのに対し、「これから考える」が減少している２年生では、ＧＴＺは下落しているもののその下落幅は小さいということが言えよう。このことから、進路意識とＧＴＺの間には関係性があり、進路の明確化が学力向上につながるのではないかということが推測できる。

次のグラフは、自我同一性[2]のタイプ別人数割合の月ごとの変化を学年別に表したものである。





１年生では「発達型」や「社会型」が減少するとともに「途上型」が大きく増加している。これは

---

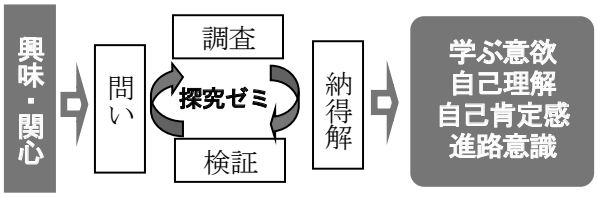
[1] ＧＴＺとはベネッセコーポレーションによる基礎力診断テストでの学力到達度を表す指標で、次のような４段階に大別される。
Ｂ３　～Ａ２　：４年制大学一般入試で合格がめざせる。
Ｃ３－～Ｃ１＋：４年制大学推薦入試で合格がめざせる。
Ｄ２－～Ｄ１＋：短期大学・専門学校の合格がめざせる。
Ｄ３－～Ｄ３＋：希望が実現できなかったり、進学後の授業についていけない可能性が高い。

[2]「自分としての連続性や自分が自分であるということに確信がもてること」と「社会の中での位置づけが決められること」の２つを統合するというエリック・エリクソンが提唱した考え方で、次の４つの型に分類される。
発達型：相対的に自我、社会性ともに平均以上
自我型：やりたいことはあるがそのために何をやればいいのかわからない
社会型：知識や情報はあるが自分が何をやりたいのかわからない
途上型：自我、社会性ともに相対的に低い

自分自身の特性がわからず社会に対する知識も不足しているため、社会の中で自己実現を図るイメージが持てなくなっている生徒が増加している傾向を表している。２年生はどの型も平均しており、ほぼ同数で推移している。１月の時点での「社会型」と「途上型」の合計を見ると、１年生は５８％、２年生は５４％にのぼっており、しかも上昇傾向にある。これは、社会に対する知識の有無は別にして、自分自身のやりたいことがわからない生徒が半数以上いることをあらわしている。このことが、進路意識の明確化や学力向上を妨げている一つの要因であることは想像に難くない。

２　やりたいことを見つけ、意欲を高めるために
～「探究ゼミ」のスタート～

生徒の学ぶ意欲を高め、自己の特性の理解を深め、自己肯定感を高揚させる手立てとして「探究ゼミ」を平成３０年度に実施した。これは、１年生の総合的な学習の時間に、年間９回（各回２コマ）計１８時間を使って、各分野の専門家がゼミナールを開講するもので、生徒は自分の興味や関心に基づいて年間を通じて所属するゼミナールを１つ選択し、講師の先生の指導のもと「問い」を創り、探究し、レポートにまとめ、発表するというものである。



【「探究ゼミ」のねらい】

上の図は「探究ゼミ」のねらいを示したものである。生徒は自分自身が興味を持つ分野について「問い」を創り、その「問い」の答えを求めて調査し検証する中で、新たな疑問が出たらさらに調べて検証する。この探究のスパイラルの中で自分なりの納得できる解を得ることで、自信がもてるのではないだろうか。また、この探究のプロセスをまとめたりプレゼンテーションをすることで自己理解とともに自己肯定感が高まり、これらが「学ぶ」こと全般に対して意欲的になり、ひいては自分自身の将来の職業や具体的な進路に対して明確な目標を持てるようになるのではないか。このようなねらいのもと、前述した本校の課題を解決する一つの突破口として、「探究ゼミ」を実施することにした。

このねらいを達成するためには、いくつかの関門がある。

最も大きな関門は、生徒の興味や関心を喚起するために多様な分野の指導者を集められるかということである。本校の教員の負担を考えるとやはり外部人材に頼らなければならない。また、進路という点では大学教員に多くを頼らなくてはならないのではないかとも思われた。

もう一つの関門は、果たして「問い」が創れるのかというものである。授業時数や学校行事、また、外部指導者の都合等を考えると９回（１８時間）が限界だった。この時間の中で「問い」創りまで求めるのは難しいのではないかと思われた。そのため、あえて「問い」にこだわらずテーマでも良いということにした。

また、一つのゼミナールの生徒の人数を考える（１学年２４０名）と教室管理者としての学年職員の人数を考えると、１０のゼミナールが必要と判断された。こうした考えのもと、快く承諾してくださった外部講師の先生方による「探究ゼミ」が次のような日程で始まったのである。

計画	月	日	曜	主な活動内容
第１回	5	17	木	全ゼミワークショップガイダンス
第２回	6	21	木	探究
第３回	9	27	木	探究
第４回	10	11	木	探究
第５回	11	8	木	探究
第６回		22	木	探究
第７回	12	6	木	探究
第８回	1	14	木	ゼミ内プレゼンテーション
第９回		21	木	学年プレゼンテーション

【「探究ゼミ」年間計画】

平成３０年１月１４日に、各ゼミナール内でプレゼンテーションを行い代表者を決め、１月２１日には各ゼミナールの代表が学年全生徒の前でプレゼンテーションを行った。

最後に、全校生徒の投票と講師の審査によりＭＶＰが選出された。

【学年プレゼンテーションの様子】

	分野	指導者／所属	代表生徒のテーマ
1	商学	青木靖喜／千葉商科大学商学部講師	チラシの工夫とアレンジメニューで若者にも干物を広めよう
2	法律学	大村芳昭／中央学院大学法学部教授	放置自転車をどうするか
3	経営学	成松恭平／敬愛大学経営学部教授	ディズニーができた理由について ディズニーに関わる仕事について
4	舞踊学	村瀬瑠美／千葉敬愛短期大学現代子ども学科専任講師	二人で協力して頑張るしっぽ取りゲーム 体が不自由な人でもリラックスできる体操
5	地理学	亀井　尊／淑徳大学総合福祉学部講師	浦安の魅力マップを作ろう
6	日本文化	大貫俊彦／千葉工業大学　工学部助教	「俺妹」に描かれた千葉について考える
7	観光学	神末武彦／明海大学ﾎｽﾋﾟﾀﾘﾃｨﾂｰﾘｽﾞﾑ学部教授	浦安のすべり台
8	心理学	矢口幸康／聖徳大学心理・福祉学部教授	なぜ人は集中すると時間を忘れてしまうのか
9	幼児教育	宮崎玲子／ふたば保育園園長	１０円玉ピカピカ実験
10	農業	佐藤一彦／農業法人経営	世界を救えるか　日本の農業

【各ゼミ代表生徒のテーマ一覧】

学校としても初めての試みであり、外部講師の先生方にとっても初めての経験の方が多く、当初は戸惑いながらも、ある程度多様な分野のゼミナールがそれぞれ展開され、多くのメディア[3]でも紹介された。

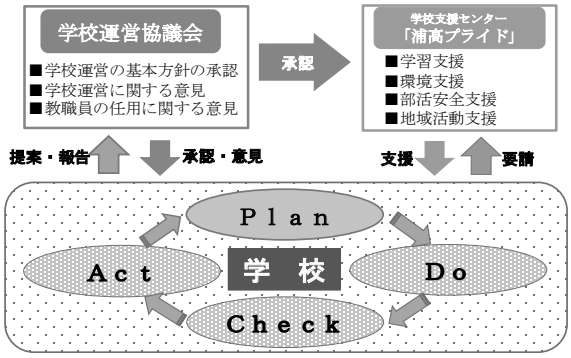
一方で、当初懸念された「問い」創りについては、やはり課題が残った。各ゼミの代表生徒のテーマを見てもわかるとおり、多くが「問い」になっていないため、単にテーマについて調べてまとめるという「調べ学習」で終わってしまい、「納得解」を求めて探究するというところまでいかなかったのである。

「問い」創りは、さまざまに浮かぶワードを検索しながら関連を考え、マップを作成する中で疑問点をあげ、さらに調べながら吟味していくという過程をたどる。その対象の分野は多岐にわたり、書籍では到底カバーできるものではなく、インターネットが何より適当かつ適切な方法である。しかし、インターネットに接続できるのはＰＣ室の４０台のパソコンしかなく、学年の全生徒が使用するためには、タブレット端末が必要不可欠である。

また、生徒たちが「問い」創りに対して習熟していなかったというのも大きな課題であった。調査研究ということは義務教育段階でさまざまに経験してきているが、「なぜ？」「どうして～？」という疑問文を自分で設定するとしいことを経験している生徒は意外に少数で、また、高校に入学しても授業等で行っていないため、その結果多くの生徒が「～について」というテーマになってしまったのである。

３　クラウドファンディングでタブレット端末を～コミュニティスクールの強みを生かして～

コミュニティスクールである浦安高校には学校運営協議会があり、校長の経営方針等を承認するなど、地域の人々が学校経営に参画しているが、平成３０年度に新たに学校支援センター「浦高プライド」を設立した。これは学校の要請に応じて学習や部活動、環境等の場面で支援する校外組織である。いわば、学校運営協議会の要望等に学校が応えられるよう支援する活動体と言える。



この「浦高プライド」の協力で、平成３１年４月１日～令和元年５月１３日までの期間で１００万円を目標にクラウドファンディングに挑戦した。

卒業生や浦安市に在住の市民の方々、大学や高校、中学校等の学校関係者、ＳＮＳで知ったという他の都県の方々、地域の民間企業など、４０人

[3] 日本教育新聞（30.6.4 付）、読売新聞（30.7.6 付）、東京新聞（31.1.28 付）、千葉日報（31.2.11 付）他コミュニティ紙等多数。Ｊｃｏｍニュース、こちら浦安情報局等でＴＶ放映。

の個人と企業３社からご支援をいただき、結果的には1,230,000円もの金額が集まり、クラウドファンディングは成功した。こうして３４台のタブレット端末を購入し、「探究ゼミ」はもちろん、他の授業や学校行事にも活用できるようになった。

【募集のために配布したチラシ】

生徒の「問い」創りに対する習熟という点では、現代社会の授業で実施した。

６月７日に校外学習で茨城県笠間市に行き、民家体験を行ったが、そこでの体験をもとに笠間市に関する「問い」創りを行い、フィッシュボーンチャートでまとめたのである。その中では「はちみつが万能なのはなぜか」、「マロンポークを世界に広めるためにはどうすればよいか」、「なぜ御影石は加工製品に大量に使用されているのか」「お守りの効果を最大限に引き出すにはどうしたらよいか」等、民家の方々と交流したからこそ生まれる笠間市ならではの多岐にわたる「問い」が生み出されたのである。

こうして、２つの関門に対してある程度対処して２年目の「探究ゼミ」を迎えた。

４　「教わる」から「学ぶ」へ
～新たな「探究ゼミ」のスタートと挑戦

次の表は、令和元年度の「探究ゼミ」の一覧である。新たに福祉、マネーデザイン、生活社会、物理の分野が加わり、生徒の多様な興味・関心を受け止められる講座となった。これは前年度の実績とともにマスメディアに負うところが大きいと思われる。

また、昨年に引き続き担当される外部講師の先生方は、昨年の経験からさらにゼミナールのテーマを工夫され、大学の施設を使用しての授業や実地での調査、インタビュー等をシラバスの中で記されており、生徒の興味を十分惹きつけるものになっている。このような外部講師の先生方の意欲が何よりもありがたく、生徒にとって有意義なものになるという確信の根拠になっているともいえよう。

No.	分野	所属及び指導者名	テーマ
1	国際関係	中央学院大学法学部 教授 大村芳昭	国際関係
2	日本文化	千葉工業大学工学部 准教授 大貫俊彦	J-POP～歌詞について考える
3	観光	明海大学ﾎｽﾋﾟﾀﾘﾃｨ・ﾂｰﾘｽﾞﾑ 教授 松島康彦	観光でまちを元気に!
4	心理	聖徳大学心理・福祉学部 准教授 矢口幸康　名誉教授 末永　清	心の働きって何だろう?
5	福祉	順天堂大学スポーツ健康科学部　准教授 松山　毅	バリアフリーって何だろう?
6	ﾏﾈｰﾃﾞｻﾞｲﾝ	Ｍｅ＆Ｄﾌｧｲﾅﾝｼｬﾙﾌﾟﾗﾝﾅｰ 渡辺伸子　町田健一	1 億円の資産をつくる人生設計
7	幼児教育	千葉敬愛短期大学現代子ども学科　教授 吉村真理子 准教授 久保木健夫　ゼネラルサポーター 佐久間敦子	子ども絵本 1・2･3～子どもの発達と絵本･絵本の制作～
8	街づくり	千葉経済大学経済学部 教授 粟沢尚志	街づくり
9	生活社会	和洋女子大学家政学部　教授 佐藤宏子　入試センター事務室 松田ゆり	20 世紀日本における生活革命
10	物理	日本大学短期大学部（船橋校舎）教授 豊田陽己	自然の不思議

【令和元年度「探究ゼミ」一覧】

また、講師の先生方からの要望もあり、回数を昨年度よりも１回増やし、年間１０回（各回２コマ）計２０時間を１年生の総合的な探究の時間の中で実施できるようにした。

	月	日	曜	主な活動内容
第１回	5	9	木	※全ゼミワークショップガイダンス
第２回	6	13	木	探究（グループ分け・レクチャー）
第３回		27	木	探究（「問い」創り）
第４回	9	19	木	探究（「問い」創り）
第５回	10	3	木	探究（調査・研究）
第６回	11	7	木	探究（調査・研究）
第７回		21	木	探究（調査・研究）
第８回	12	5	木	探究（調査・研究・まとめ）
第９回	1	16	木	※ゼミ内プレゼンテーション
第 10 回		23	木	※学年プレゼンテーション

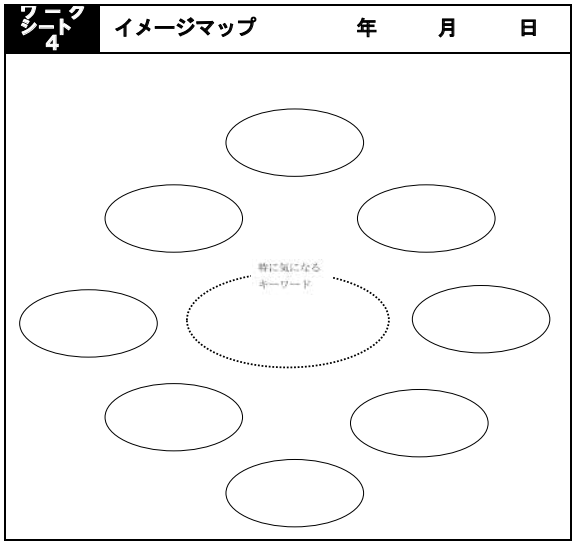
【令和元年度「探究ゼミ」年間計画】

第１回のオープニングガイダンスでは、昨年と同様、４回に分けて生徒が希望する各ゼミのブースを２０分間隔で回り、講師の先生方の説明を聴きながら、第一希望のゼミを決めるという方法を

とった。そのため、各ゼミのシラバス[4]を事前に生徒に配布し、その中から生徒はあらかじめ４つのゼミを決めておくようにした。

【オープニングガイダンスの様子】

また、「問い」創りに慣れるために、前述したように校外学習や社会科等の授業でも「問い」創りを取り入れるとともに、下のようなワークシートを７種類用意し、各ゼミナールの外部講師や学年職員に参考資料として配付した。



【「問い」創りのためのワークシートの一例】

生徒の出欠確認や引率等、教室管理については、各ゼミに担当として割り振られている学年職員が担当しており、指導者をサポートしている。また、タブレット端末の台数に限りがあることから、今年度は全てのゼミナールで少人数グループ（４人程度）での活動としている。

５　まとめ　～挑戦し続ける浦高に～

今年度の「探究ゼミ」は、多様な分野に展開され、講師陣の意欲は高く、また、「問い」創りのための道具であるタブレット端末が用意され、「問い」を創るための指導も授業の中で行われている。

以上の点を考えると明らかに当初のねらいの達成に向けて進化していると言えよう。しかし、それが「納得解」を得られたという成功体験につながるかどうかはこれからである。また、それらが「学び」全般に波及するかどうかは、実は、日常の授業にこそ、その鍵があるのではないだろうか。「教わる」から「学ぶ」へ、多くの方々の支援に支えられているコミュニティスクールとしての強みを生かし、これからもこれらの課題に挑戦しつづけたい。

【タブレット端末を使って「探究」ゼミに取り組む生徒】

[4] シラバスには、ゼミの主なテーマ、どのようなことを探究できるか等の項目と講師の先生からのメッセージ、年間計画が記載されている。

読書の質を上げる読書指導の在り方

～司書教諭と学校司書の連携を通して～

市川市立第三中学校
司書教諭　国語担当　執筆　代表者　五十嵐　ふみ代
学校司書　金　子　紀　子

１　はじめに

（１）　学校紹介

本校は創立７０年を超える学校で、学級数は22学級と大規模学校に属する。我が校の特色の一つとして、「朝の読書」（以後「朝読」）を毎日実施している。私が赴任してから３年目の平成２７年から実施を始め、今年で５年目を迎える。

（２）　学校図書館の状況について

蔵書数は現在、16,494冊であり、優秀学校図書館と認定されている。私は司書教諭として働き始めて20余年、それ以前は図書館主任として働いてきた。学校司書は、週３日の非常勤務である。勤務日には緊密な連絡を取り、それぞれ勤務に励んでいる。図書館開館日は学校司書の勤務日の月、水、金に設定している。校内組織の図書館部会は、司書教諭、学校司書、各学年１名の教員の計５名で構成されている。

図書の貸し出しは、一人５冊までとしており、長期休み前は10冊としてある。

（３）　市川市の図書貸借ネットワークシステム

市川市では、小・中学校・公共図書館の図書資料の相互貸借を行っている。このネットワークシステムを利用したい教師が自校の学校司書に依頼する。すると、学校司書がメールで依頼をし、希望した日に必要な図書資料等が届くシステムである。このシステムのおかげで自校の図書資料が不足していても、市内の学校図書館や公立図書館から借りられるので十分な図書資料が届ことにより、生徒の学習に大いに役立っている。

（４）　図書委員会

委員会活動は、生徒主体でしっかり行っている。貸出業務が主な仕事になっている。それ以外にはポップ作り、図書便り、大判の読書紹介ポスター作りの仕事がある。これ以外にも、図書館内の図書でお気に入りの本を選んで図書紹介ポスターを制作し、校内に掲示している。生徒目線で紹介されるポスターは、多くの生徒の関心を集めている。

さらに、文化祭で図書委員会主催の「全校ビブリオバトル大会」を行い、今年で四年目になる。

２　主題設定の経緯

（１）　市川第三中学校の読書傾向

「朝読」を行うようになってから、確実に生徒の読書量は増えた。朝読の時間に生徒の様子を見るとどのクラスも真剣に読書していることが見て取れる。とても読書に集中した時間になっている。しかし、授業で詳しく話を聞くと、読書に興味を持てない生徒が各クラス２，３人程いることがわかった。また、生徒が紹介する本を見てみると、生徒の年齢にあったいわゆる良書を読んでいる生徒は多いとは言えず、ライトノベルと呼ばれる図書に偏った読書をしている生徒が目立った。さらに、読書力のある生徒は大人が読むような「本屋大賞」に選ばれた本や宮部みゆき、伊坂幸太郎、東野圭吾と言った有名作家の本や、テレビの原作本を読んでいた。生徒に必要な成長段階にあった「良書」との出会いが少ないということが分かった。

（２）　個別的な読書指導の必要性

読書は、元来個別的なものである。強制されて行われるものではない。しかし生徒が、年齢にふさわしい読書をしていないのは生徒の心の成長を考えると問題があるように思われる。生徒の実態を知り、思春期の彼らにふさわしい読書を勧める必要性を強く感じた。また、本がなかなか読めない生徒には、絵本を勧めてみるのだが、「中学生になったのだから絵本なんてみっともない」というプライドがあるようで、なかなか手に取ろうとはしない。絵本の中には、中学生が読んでも心に響く良い本が少なくない。絵本というだけで、遠ざけられているのが残念である。以上のことを踏ま

え、28年度から読書に気持ちがなかなか向かない生徒への手立てを考えること、生徒の成長段階にあった本を選ぶことで、読書の質を上げることを目差す読書指導を試みることにした。

３　実践内容

（１）　市川三中のお勧め本リストの作成

上記のような目的で国語科の教員や図書館部会の教員、他校の学校司書から意見を募り、本校の学校司書が中心になってお勧め本のリストを作った。リストの作成は今年で四年目になるが、毎年新刊本を加え改訂している。小学校中・高学年向けの読みやすく短めの本から、高校生向けの本まで、幅広く取り入れ、７０冊を選んだ。そして、それぞれの本の難易度を示す星印をつけた。☆一つは簡単で読みやすい本（『５分後に意外な結末』シリーズ・目黒哲也編）☆４つは、最も難しい本（『夜と霧』Ｖ・Ｅ・フランクル）とした。特に気を使ったのが本を読むのが難しい、選べないレベルにある状態の生徒達に向けた本選びだった。そのために簡単に読み切れたり、写真の多い本を選んで図書館に入れた。例えば先に挙げた『５分後に意外な結末』シリーズは、生徒に人気の作品になった。正直なところ、中学生が読むには短すぎて物足りない感があるが、このシリーズは読書嫌いの生徒のみならず多くの生徒の間で好評である。その点で、教師がどこまで生徒に譲歩できるか本選びの目が問われる。そのような観点から生徒に譲歩した本としては、読書に慣れていない生徒にも読みやすい『妖怪アパートの優雅な日常』（香月日輪）、また絵本でありながら中学生の心にフィットしてくる『ぼくを探しに』（シェル・シルヴァスタイン）を選んだ。さらに、漫画ではあるが『漫画　君たちはどう生きるか』は読むに値する本であると判断し、リストの中に入れた。古典的な本としては、『星の王子様』（サン・テグジュペリ☆☆）、『２年間の休暇』（ジュール・ベルヌ☆☆）『赤毛のアン』（モンゴメリー☆☆）『鼻・芋粥・蜘蛛の糸』（芥川龍之介☆☆）『人間失格』（太宰治☆☆☆他の本でも可）（『ゲド戦記』（ル・グウィン☆☆☆）『坊っちゃん』（夏目漱石☆☆☆）『高瀬舟』（森鴎外☆☆☆）『短編集』（Ｏ・ヘンリー☆☆☆）などが挙げられる。また、最近の本で比較的生徒にも読まれている本として、『都会のトム＆ソーヤ』（はやみなかおる☆☆）『西の魔女が死んだ』（梨木香歩☆☆）『精霊の守人』シリーズ（上橋菜穂子☆☆）『幸福な食卓』（瀬尾まいこ☆☆）などが挙げられる。さらに、良書でありながら、生徒にお勧めしないと生徒が手に取らない本として『家なき鳥』（グロリアー・ウイーラン☆☆）『ガラスの封筒と海と』（アレックス・シアラー☆☆）『素数ゼミの謎』（吉村仁☆☆）『夜間中学へようこそ』（山本悦子☆☆）『闇のダイヤモンド』（キャロライン・Ｂ・クーニー☆☆☆）などがある。様々な本を入れることで、生徒の心に引っかかってくれたらいいと思った。

お勧め本リストは国語の授業を通じて生徒に配付した。毎年二月に行われる新入生説明会で「朝読」の実施を連絡する際に、リストも一緒に配った。新入生から親子で本選びをしてもらうには有効な機会である。図書館内にも、学校司書のアイデアで別置でお勧め本コーナーを作り、生徒が本を探しやすくした。常時かなりの本が貸し出される結果となった。

さらに図書館前の掲示板にお勧め本リストの一覧を学校司書が大きく書いて、生徒が読んだら、自分の名前を書いたシールを貼っていくことにした。また、国語の授業でもお勧め本を読んだら金シールをあげる取り組みをしている。多い生徒だと４０冊くらい年間で読み切っている。私のお勧めで『家なき鳥』を読んだ生徒（３年）は読み終えて「先生、この本を読むのは辛くて大変だった。読むのをやめたいくらいだった。でも、今は読み通して良かった。いい本を紹介してくれてありがとうございます。この本を読んで良かった。」と感謝された。インドの少女の苦難に満ちた人生を描きながら、無学で貧困の中、少女が強く生き抜いていく話である。とかく楽な読書へと流れやすい生徒が、一冊の本と出会いで自分の人生の見方を変えていき、成長していく姿を見られて嬉しく思った。また、その生徒がクラスメートに勧めている姿を見ることもでき、読書の輪が広がっていくのも見ることができた。

（２）　教職員のお勧め本の展示

校長から事務職員に至るまで、職員全員のお勧め本の紹介文を図書委員会の発行する「図書便り」に載せ、随時新聞を発行していった。さらに学校司書が図書館前に長テーブルを置き、お勧め本の紹介文と本と教職員の顔写真も一緒に展示した。親しみの持てる紹介本スペースとなった。生徒が興味深くのぞいていたし、興味を持った本は借りられていた。

（３）　授業での取り組み

どの学年でも、図書館を活用した多様な単元を行い、

どの学年でも読書紹介の単元を行った。常に、学校司書が授業にＴＴとして参加して、図書の探し方や興味深い本を生徒に紹介した。

①　１年次の取り組み

「図書館オリエンテーリング」生徒の調べ学習の土台を確認し、図書館利用指導がどの程度浸透しているかを確認し、図書を活用する授業ができるように実施。まず、奥付について学び、それから、６グループに分かれてオリエンテーリングの用紙を受け取る。各グループ６人の問題は異なっており、それぞれの生徒が図書館内を歩き回り、自力で問題を解いていく。問題の例を挙げると「『山茶花』は、なんと読むか。山茶花の写真が載っている本を探して、ページを書きなさい。」というように簡単に答えがでないようになっている。ルールとして「人に聞いてもいけないし、人に教えてもいけない。」と書かれてあるので、生徒は必死になって、１０進分類表を見つめて、めあての本棚に行く。一人でどんどん調べられる生徒もいれば、一問目からつまずいている生徒もいる。そこで、１５分たったら学校司書と教師に質問してアドバイスをもらってもよいことにした。４０分でオリエンテーリングを終了し、解答を配る。普段は国語の授業に無気力な生徒も熱心に取り組んでいた。この学習を通して、図書館で調べ学習の土台を作ることにしているし、図書館で調べ物をするときはどうすればいいかを知ることになる。楽しみながら学習ができるこの単元は生徒に好評である。

「百科事典使いこなそう」小学校時代に引くことがある百科事典だが、案外にうまく引けない生徒が多い。そこで、百科事典「ポプラディア」セットを他校から6 セット借りた。クイズを交えながら、事典を引く練習を６班に分かれて行った。思った通り、慣れていない生徒が少なくなく、よい機会になった。

「古典物語にチャレンジ」『竹取物語』を学習した後、古典物語を読んで読書の幅を広げてみようという目標で実践した。市川市のネットワーク便で借りた２００冊程度の古典物語（平安時代～江戸時代）は、一口に古典物語といっても短編から長編まであるし、難易度も様々であった。絵本になっている作品もあり、生徒の興味や読書力の差に応えられた。実際、生徒は古典物語を読んで、意外なおもしろさに惹かれていた。『宇治拾遺物語』や『今昔物語』は、読書が苦手な生徒でも取り組みやすかった。また、『雨月物語』の中編や、『南総里見八犬伝』『落窪物語』などの長編作品にチャレンジしている生徒も多かった。特に、「朝読書」ではなかなか読書に熱中できない生徒が、『四谷怪談』を夢中になって読んでいた姿が印象的であった。読書後の生徒の感想を読むと、多くの生徒が「最初は古典が読めるのかなと思っていたが、読んでみると、おもしろくて楽しく読書ができた。」と書かれていた。

「読書会『あのころはフリードリヒがいた』リヒター作」この作品は、ユダヤ人迫害をテーマに据え、ユダヤ人の少年とドイツ人の少年の交流を描きながらその当時のユダヤ人迫害を赤裸々に描いた作品である。ネットワーク便で１クラス分 40 冊を揃えた。一冊全部読む時間が取れないので、熟考の上内容の 1/5 はカットして、教師の説明を加えた。大切な部分を読み、章ごとに感想や疑問に思ったことを記録・発表していった。そして、意見交流をしていき、最後にいくつかの大きな問いを出して、読書会の中で解決していった。「もし、あなたが防空壕の中にドイツ人として居たら、周囲の人の反対を押し切ってユダヤ人を防空壕の中に入れてやれと言えるのか」という問いである。その問いによって、「ユダヤ人迫害はひどすぎる」と意見を言っていた生徒たちは、深く考えたじろいでしまう。自分の命を賭けてまで人を救える勇気はなかなか持てないことに気付く。ここで生徒は迫害の持つ裏側を知ることになる。そんな時代の中でも、ユダヤ人を救おうとした人達がいたことを後で他の本から学ぶことになる。「読書会『あのころはフリードリヒがいた』」の後に、「ナチスがしたこと」と言うタイトルで学校司書がブックトークを行った。普段はけっして手を伸ばすことのない本を読むことで、読書をしながら深く考える習慣をつけることができた。

〈感想〉Ｓ：この小説を読んで、なんてひどいことが行われていたのだろうと初めて知った。私もクラスの人も「ユダヤ人迫害はひどい。」という意見で一致していた。しかし、ナチスがドイツを支配していた中で、「ユダヤ人迫害はひどい」と声を大にして言える人はあまりいない。みんな自分の命が大切なのだ。しかし、私は、人を差別することがどんなに酷いことか知った。私は、人として差別をしないで生きていく人間になっていきたい。

②　２年次の取り組み

「日本の伝統的なものを紹介しよう」例えば、漆、着物、和楽器、和紙、伝統文化（歌舞伎、落語）等を、ネットワーク便で集めた 150 冊余りの本を使って、調

べ、新聞にまとめた。ここで取り扱う図書は７類の本が多い。調べ学習なので、最初は百科事典で、大ざっぱなところをつかんでから、詳細な説明が書かれた専門資料にあたっていく。今までと違う点は、調べ学習になっていることだ。情報カードを使い、一つ一つ課題を解決していく。課題は疑問形にさせ、例えば「漆の正体とは？」「ふろしきは今と違っていた？」「和楽器の種類はどれだけあるの？」等々。いくつかの本にあたって、わからない疑問についてはパソコンで調べた。しかし、たいていの問題は、図書資料で解決できた。調べる疑問が新しいことではないので、図書資料で十分間に合うのである。最終的に、Ｂ４判の新聞の形にまとめさせた。お互いに新聞を読み合い、廊下に掲示し他クラスの新聞も読めるようにし、授業を終えた。**〈編集後記〉Ａ**：私は前から漆のことは知っていましたが、まさかこんなたくさんのところでつかわれていて、とても魅力のある美しい伝統工芸品だったなんて知りませんでした。この新聞を書いたことで私のように漆についての魅力をたくさんの人に知ってもらえて、興味、関心を持ってもらえたらうれしいと思います。**Ｂ**：落語は実はすごく面白く興味がわいた。（中略）最近は、日本の伝統文化が世界の人に広がって、もっと日本人である私も日本の文化について知りたいと思った。**Ｃ**：調べてみると、意外なことが分かったりするので、また、調べ学習をするときは、もっと楽しんでやろうと思いました。みなさんも楽しんで調べものをしてみてください。

「近代の文学者の作品を読み、パンフレットを作ろう。」近代作家と言えば、中学二年生にとって読みづらい作品が多いだろう。読書が苦手な生徒はできるだけ短編で解説がついている本を選ぶように勧め、生徒全員が夏休みに読んできた。生徒の中には夏目漱石の『こころ』や森鴎外の『舞姫』太宰治の『人間失格』等の長編にチャレンジした生徒も結構いた。２学期に近代作家調べを行い、ネットワークで180 冊くらいの本を集めた。苦労しながらも、作家の人生やエピソード、人柄や業績等をそれぞれが興味を持ったことを調べまとめて、パンフレットにしていった。**〈編集後記〉Ａ：**（略）このパンフレット作りを機に何冊かの文庫を買ったので、読んだことのない作品を読むのが楽しみです。**Ｂ：**芥川の考え方や生き方は現代の私たちと少し違って興味深かった。彼の作品からは考えさせられることがたくさんあって、とても関心を持った。現代とは違う世界観を感じ取ることができたのは、自分の考え方や物の見方の幅を増やすことにつながったので、とても良い勉強になった。今後もたくさんの近代文学の作品を読んでいこうと思った。

「四字熟語で冬季オリンピックの感動を伝えよう。」感動した競技や人物の新聞記事を切り抜いて、それを四字熟語を用いながら作文で表現してみた。四字熟語は図書館で調べた。発表活動をして、共有した。いろいろな四字熟語を知り、活用することができた。

③　３年次の取り組み

「読書紹介―１分間読書コマーシャル」さらに、**「ビブリオバトル（書評合戦）に挑戦」**を実施。「ビブリオバトル」とは、４人組のグループを作り、その中で自分のお気に入りの本について三分間語り、その後に質問タイムを設け、生徒が紹介した本への質問をぶつける。参加者４人が本の紹介をして、その中で一番読みたくなった本を選ぶというゲームである。生徒の読んでいる本が、１学期に比べ、「三中お勧め本リスト」の中から選ばれていることや図書館の本に変わってきていた。生徒の読書の質が変わってきたのを感じることができた。そこで、「ビブリオバトル」から更に発展させて、**「書評文を書いてみよう」**を実践。各自が「ビブリオバトル」で書いたスピーチメモを元に、書評文を書かせた。それぞれ納得できる書評文になっていた。

「和歌の歌合わせをしよう」教科書に載っている万葉集・古今和歌集・新古今和歌集の和歌を図書館で調べた。ネットワーク便を活用し、２００冊程の図書資料から情報を得た。分担した和歌を、歌合わせのようにテーマが同じ和歌（例えば恋愛）を発表・対戦させ、どちらの和歌が優れているかを聞き手に考えさせた。

「読書会　『バースデイ・ガール』村上春樹作」本格的な純文学であるが、生徒は抵抗なく読み、熱心に自分の意見を出し合った。時には激論になることもあり、充実した時を過ごした。文学に触れさせ、その面白さに気づかせることができた。

「世界の子ども達を見つめて」最近では、世界中から、多くの写真集が出され、世界の子ども達の映像を見ることができる。しかし、世界が今どんな状況になっているかを知らない生徒が多い。そこで世界で起こっている子ども達の貧困、児童労働、ストリートチルドレン、少年兵士、紛争に巻き混まれた生活等々を撮った写真集を集めた。そして、一枚の心に突き刺さった写真を選び、その写真の背景を探り、意見文としてまと

めた。意見文の中には調べた国の識字率や乳幼児死亡率、就学率を必ず調べ、客観的なデータから、その子どもの現状をつかんだ。多くの生徒が世界の子どもの現状に驚き、今の自分にできることはないかと自分に問いかけていた。深い学びのあった単元であった。

生徒の意見文：黙々と一人で真剣に作業をする一人の少年がいる。カメラにも目もくれず、家族のためにひたすら仕事をしているのだ。彼が住んでいるダッカという地域は、バングラデッシュにある。バングラデシュの乳幼児死亡率は33%、識字率は61.5%と、日本の100%と比べるとかなり低いことがわかる。この原因の一つとして貧困が考えられるだろう。また、所得が低く、大人の失業者も増えていることがわかる。(略) 私たちがいつも普通に行っていることは、彼のような子どもたちにとって普通で当たり前ではないのだ。また、児童労働の七割が農業で働き、家にも帰れず、家族ともなかなか会えず、さらには子ども達の健康にも被害をもたらしているのだ。中にはゴミ箱へ行き、使えそうなものを探してお金にしようとしている子ども達もいる。その子ども達にとっては、それが当たり前の生活かもしれないが、きっと心の中には悩みや不安をたくさん抱えていると思う。私たちはこの子ども達に比べれば十分幸せな生活を送っている。だからこそ、苦しんでいる子ども達に手をさしのべ、少しでも彼らが快適な生活を送れるように手助けをし、何ができるのかを今一度考えることが大切であり、それが私たちが今できる最善のことだと思う。

「アンソロジー詩集作り」卒業制作として、この単元を実施。ネットワーク便を活用し、３００冊程度の詩集を集め、自分の好きな詩を選び、自分だけの一冊のオリジナルの詩集本を作成した。それぞれの生徒が詩の魅力に気づき充実した顔をしていた。

＜生徒詩集あとがき＞人は生きていれば必ず大きな壁にぶつかります。つらくって、苦しくて、あきらめたくなったり投げ出したくなったりするかもしれません。本書は、そんな時前向きになれる詩を集めたものです。私は今まであまり詩に触れてきませんでした。学校の授業で少し触るくらいで、詩の良さも正直あまりわかりませんでした。今回詩集を作ってみて、詩は自分の心の支えになってくれることが分かりました。たった何行かの文章で、心が大きく揺れました。

言葉にはたくさんの力があります。人を励ます力、落ち着かせる力、時には悲しくさせることもあります。みなさんも辛いことがあった時、自分を支えてくれる言葉を探してみて下さい。きっと前向きな気持ちになれるはずです。

「ブックトーク」一年生全員に学校司書が「この本ならすらすら読める」を、長期休み前にも実施。三年生にも卒業前に「未来を生きるあなたに」というタイトルで学校司書が中心となり司書教諭と一緒にブックトークを行った。生徒が日頃読む本ではないが、こういう試みが地道ではあるが、図書館の本を読むきっかけになったと考えている。

４　成果

（１）生徒が読み切れる本や写真集を多数図書館に入れたおかげで、読書を苦手とする生徒にも読まれた。それがきっかけとなり読書への入り口になり、今では長い本を読んでいる生徒をみかける。

（２）授業で、図書館を活用した授業を行うと、自然に生徒が図書館の本に触れ、本を借りていくことが多い。また、長期休み前に図書館に連れて行くということだけで、長期貸し出し冊数の限度10冊の本を借りていく生徒が多い。学校司書も「授業で図書館を使ってくれると貸し出し冊数も伸びる」と言っていた。図書や図書館が身近なものになり、生徒は、図書館の授業をかなり楽しみにしている。生徒にとって主体的で達成感のある学習だったと言える。

生徒に本を勧める行為は、根気のいる仕事である。できる限り図書館の本を読んで生徒に勧めていく。生徒は、図書館の本を確実に借りていく。これからも生徒の読む力と嗜好を聴きながら、読みたくなる本を根気強く探していく行為を続けていきたい。

（３）この３年で図書館の本を借りていく生徒が増えた。2016年は、3,344冊、2017年は、4,500冊そして2018年度は、6,471冊になった。一概に図書館の本を読むからといって「読書の質が上がった。」といえない面もあるかもしれないが、生徒の間では確実に、心の成長にあった本を選び、読んでいる生徒が増えた。貸し出し冊数は、他校と比べても圧倒的に多い。近隣の同規模の５校の平均貸し出し冊数は、1,803 冊で、本校の生徒が学校の本をよく読んでいることがわかる。

（４）国語の授業で、文学に直接触れさせ、調べさせたことで、その面白さに気づかせることができた。それが、一番読書の質を上げた本質的なアプローチだったのではないのかと考えている。

主体的・対話的で深い学びの実現を目指す国語科授業の実践

～言語活動のさらなる充実のために、カリキュラムマネジメントの視点やICTの活用を通して～

浦安市立富岡小学校
教諭 伊 藤 全 仁

Ⅰ.研究主題及び副主題の設定理由

中央教育審議会答申（H28 12 月）では、2020 年からの学習指導要領実施に向けて「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」と述べられている。これを受けて新学習指導要領において身に付ける三つの資質・能力が、

・生きて働く「知識・技能」
・未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」
・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

にまとめられた。

中央教育審議会答申（H28 12 月）より

これからの１０年先、２０年先を考えると、まさに予測困難な時代と言うことができる。社会が大きく変化していく中で児童に何を、どのように教えていけば良いのか。授業改善の指針として主体的・対話的で深い学びというキーワードが出された。教育現場で、児童の実態に即し、三つの資質・能力を高めるための授業改善を、学習指導要領を解釈し、次にあげる二つの視点で実践し検証を行った。

一つ目の視点として、言語活動の質を見直し、さらなる充実を図ることである。現行学習指導要領で言語活動の充実が叫ばれ、国語科においても様々な言語活動の実践が行われた。その点においては充実したと言えるが、果たしてその活動が児童の実態に即し、資質・能力を高めるものであったのかという疑問から、授業改善を考えていく。

二つ目の視点としてカリキュラムマネジメントを取り上げる。今回の改訂でカリキュラムマネジメントについて言及されている。主体的・対話的で深い学びの授業実践を行うためには時数の確保が必要となる。年間計画を見直し、教科横断的に学習を行うことにより柔軟に時数を作り出し、長いスパンで学習を進めることで深い学びとなるのではないかと考え実践した。

以上の二つの視点をもとにして、新学習指導要領と、千葉県の施策、実践モデルプログラムをもとに行った授業改善について述べていく。

Ⅱ.児童の実態

本校は、全校児童 367 名、全 13 学級の学校である。児童は比較的落ち着いており、不登校児童が一人もいない学校である。

保護者の学校への関心も高く、様々なボランティア活動が行われている。また、保護者会や学習参観では毎回 90％を超える参加がある。

学力面で見てみると、6 年生の学力学習状況調査や、4 年生を対象に行われる浦安市の学力テストの結果から全国平均よりも良好な数値が出ている。一方で、学習への関心・意欲の面を見てみると、その数値はあまり高くない。普段の学習の様子から見てみても、出された課題や、宿題に関してはしっかりと行うことができる児童が多いが、自分から課題を見つけて学習したり、より深く学ぼうとしたりする児童は少ない。また、家庭学習においても宿題はやるものの、課題を図書館で調べたり、宿題以外の学習に取り組んだりする児童が少ない。こういった実態を踏まえて、国語科の学習で指導事項を確実に身に付け、主体的に学ぶことができることを意識して実践を行った。

Ⅲ-1.授業実践①

単元名　ようこそ４年２組リーディングカフェへ

～あなたにぴったりの本をおすすめします～

教材名　教育出版　４年下　読書発表会をしよう

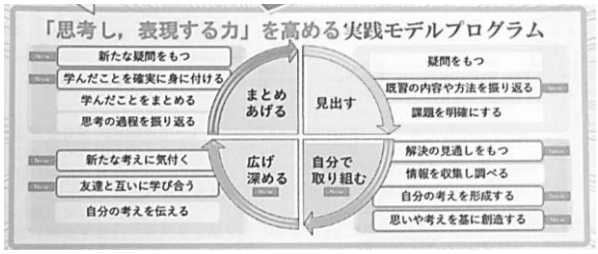
単元の目標

（1） たくさんの絵本を読み、紹介する相手を明確にして選書のために比較、分類することができる。（知識及び技能（2）イ）

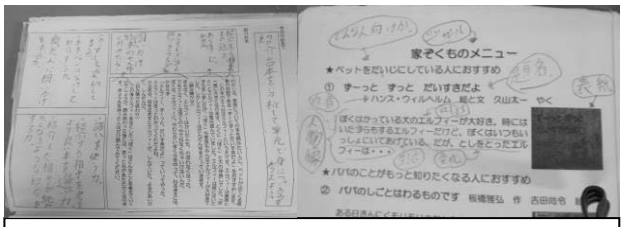
（2）絵本を紹介する活動を通して、登場人物の人物像を、叙述を基にして捉えることができる。（読むことイ）

（3）絵本を紹介する活動を通して、紹介する観点に沿って絵本を読み、感想や考えをもつことができる。（読むことオ）

実践１は、２年生に絵本の読み聞かせをして紹介するという言語活動を設定し、言語活動の目的を明確にした。千葉県の施策である「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムをもとに授業を行った。今回の変更で学びの図が一方通行ではなく、円となり、繰り返し学びを繋げることが強調された。学習を繋いで、思考力、表現する力を高めていくために、指導計画から見通しを持ち、毎時間の振り返り活動を行うことが必要であると考えた。



１時間目に、２年生に「本を紹介するカフェを作ろう」と児童に投げかけた。そして児童に教師が作成したメニュー表と、紹介文の見本の分析を行った。メニュー表には、おすすめする人を具体的にすること、あらすじを書くこと、興味を引くような語彙を使うことを読み取った。紹介文からは、絵本のどの部分を読み聞かせするのかや、紹介の最後をどのようにすれば聞いている側が読みたくなるのかを分析した。



児童の教師見本の分析。メニュー表には、どんな人むけの絵本か、あらすじ、表紙の写真が書いてあること。紹介原稿からは、読みたくなる言葉や、読み聞かせする部分が書いてあることを読み取った。

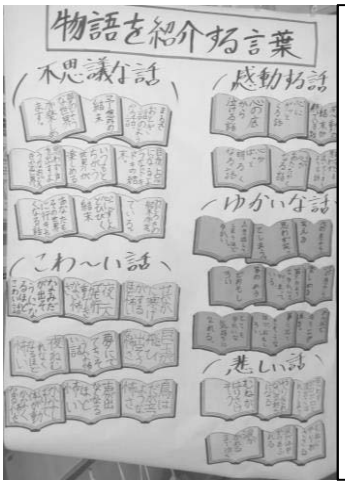
この分析をもと、学習計画表を作成した。全１１時間の学習計画を作り、単元で身に付ける力を明確にし、１時間ごとに振り返りを行いながら学習を進めた。児童は絵本を多読し、選書を行い、メニュー表にまとめ、紹介の練習をした。単元の最後には２年生を図書館に招待し、本の紹介活動を行った。

以下は、新たな取り組みとして語彙指導の充実への手立てと、新設の「情報の取り扱いに関する項目」の指導の手立てについて述べる。

○　語彙指導の充実

今回の国語科の学習指導要領改訂の中で語彙指導の充実が取り上げられた。これまでは本を数多く読み、知らない語彙に出会った時に辞書を引くことで、ある程度の語彙力が身に付くと考えていた。しかし振り返ってみると、児童が効果的に語彙を使うことができていない現状がある。そこで今回は物語の魅力をより良く伝える「紹介の語彙」を身に付けることを狙った。

学校司書が、図書の時間に読み聞かせをする際に、「紹介の語彙」として、「心が温まる話だよね」や「悲しくて涙が出てくる話だね」といった言葉を意識的に使ってもらった。これにより児童も語彙への意識を高めていった。そして絵本を読んで心の残った語彙や、「感動もの」「冒険もの」などのジャンルによって必要な語彙を考えて集め、掲示することで自分の紹介文やメニュー表に活用することができた。



それぞれのジャンルごとに語彙を集めて掲示した。「心にずしんと響く」や「予想外の結末」等の語彙が挙げられた。児童の紹介原稿の中にもここで得た語彙を使って書くことができていた。

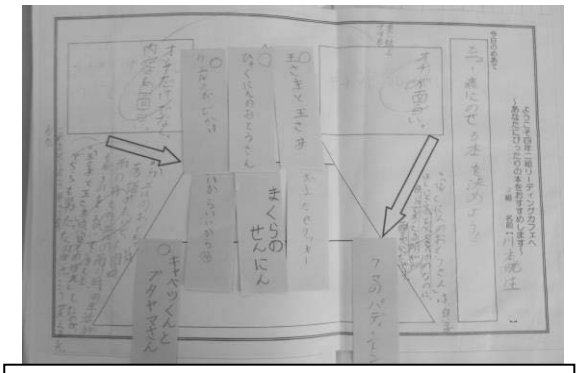
○　ピラミッドチャートの活用

新学習指導要領の「知識・技能」の中に情報の取り扱いに関する項目が新設された。現在、高度情報社会と言われているように、様々なところで情報が溢れている。その大量の情報から自分が必要な情報を収集し、分類や比較を通して活用していくという力が必要となる。今回は、情報を選別するために思考ツールである

ピラミッドチャートを使った。

ピラミッドチャートは観点を決めて情報を選別するのに適したツールである。思考ツールもたくさんの種類があり、情報を扱う際に使用することで児童の思考も整理されるので、その特性を検証しながら使用することが大事である。

今回は、絵本を選別するに際し、たくさんの絵本の中から観点を決めて選別を行った。選別の観点を決めているので児童は理由を明らかにして絵本の選別をすることができていた。その後グループで自分が選別した絵本を持ちより、観点をグループで決めて選別することができた。



付箋に絵本の題名を書き、それを操作しながら選書を行った。この児童は観点を「オチがおもしろいもの」「オチだけでなく内容もおもしろいもの」として理由をつけて選別している。

○　成果と課題

成果

・２年生に読み聞かせをするという活動が児童にとって主体的に取り組める魅力的な活動であった。

・読むことに配慮が必要な児童も絵本を使うことで主体的に取り組むことができた。

・身に付ける力が明確であり、毎時間見通しと振り返りを行うことによって、児童も自分の学びをメタ認知しながら学習を進めることができた。

課題

・計画的に学習を進めることができたが、１１時間構成はやや長いので検討が必要。

・絵本を教材としたので、人物像をつかむという指導事項には適さなかった。

Ⅲ－２　授業実践②

単元名　今日からあなたもプレゼンター

教材名　教育出版　４年上　　写真をもとに話そう

単元の目標

・浦安市の取組をプレゼンする活動を通して、相手を見て話したり聞いたり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方に注意して話すことができる。

（知識及び技能（１）イ）

・浦安市の取組をプレゼンする活動を通して、それぞれの課題にあった話題を決め、集めた材料を比較したり、分類したりして伝え合うために必要な事柄を選ぶことができる。

（話すこと・聞くことア）

授業実践①を受けて、主体的・対話的で深い学びの実現には、時数の確保が必要であると感じた。そのためカリキュラムマネジメントを行って、総合的な学習の時間と教科横断的に学習を進めた。国語科の「写真をもとに話そう」の７時間と「伝えよう住みやすい町浦安」の１５時間の単元を合科で行った。

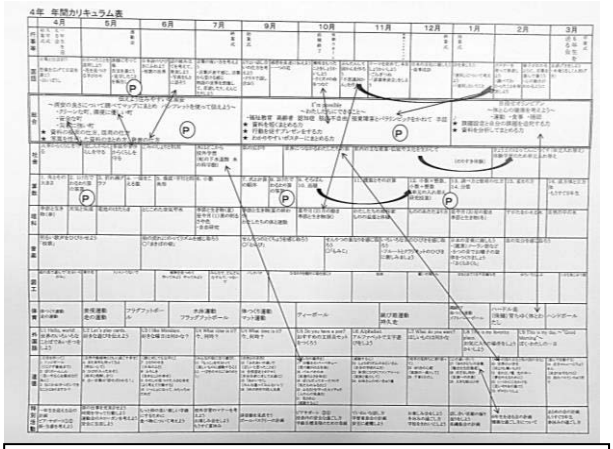
今回の単元では、児童に身に付ける力として写真を読み解く力を育成することを狙った。写真や動画がどのような意図を持って作られているのか、文章と結びつけて考えるという力を身に付けていくことを考えた。

教材は、広報「うらやす」という地域の広報誌を使って学習を進めた。また、写真の分析を行うには ICT の活用も必要であると考え、積極的に活用した。

単元の最後には、児童が作成したパンフレットをもとにプレゼンを行った。写真の読み取りの力はちばっ子チャレンジ１００の問題を用いて検証した。

○　カリキュラムマネジメント

カリキュラムマネジメントに関しては、新学習指導要領で大きく取り上げられている。これまでの各教科の学習から、同じ教材を使うことができるものを、他教科と教科横断的に行うことで時数を確保し、資質・能力を高めることができると考えた。そこで本校でも各学年、年間指導計画の見直しを行った。



４年生の年間指導計画　単元の関連を矢印で結び、教科横断的に学べるものを明確にした。

カリキュラムマネジメントを行う際に重要であるのは、それぞれの教科の特質を生かして、身に付ける力を明確にして行うことである。今回の単元では、国語科ではプレゼンをする活動を通して「話すこと・聞くこと」の力と写真を読み解く力、総合的な学習の時間では、自分の主張を伝えるために効果的な写真を選別する力と写真を活用してパンフレットにまとめる力を身に付けることとした。

○　写真を読み解く

児童の周りにはたくさんの文字情報と共に、写真や動画といった視覚に訴える情報もたくさんある。その情報に対し児童は受身である。写真や動画にはそれぞれ作り手の意図があり、それを読み取る力はこれからの社会を生き抜くのに必要な力である。また、児童がパンフレットを作成するのに絵や写真を用いることがあるが、その写真が自分の主張と合っておらず効果的でないことも多い。この現状から児童が意図的に写真を選び使用できる力が必要であると考えた。

今回の単元では、写真を読み取るのに浦安市の広報誌である広報「うらやす」の平成２８年度と平成２９年度の浦安市花火大会を紹介する写真を用いた。

写真を見比べてみると、平成２８年度は縦に長い花火の写真を使っているのに対し平成２９年度の花火大会の写真は紙面いっぱいの花火を使用している。広報誌の２面には花火大会に際しての見所やプログラム、歴史が書かれている。この２面と表紙の写真を結び付けて読み取ることを狙った。

平成 28 年度 7 月 15 日 No1054 広報「うらやす」1.2 面

平成２８年度の写真からは、花火大会のサブタイトルが、「咲き誇れ～浦安の未来へ～」というタイトルから花束の形を思わせる花火の写真を使っているということ、２面のプログラムにはカラフルな花火「情熱の赤、安らぎの緑、希望の黄色」という表現から３色の色が使われていることを読み取れることを狙った。

平成 29 年度 7 月 15 日 No1078 広報「うらやす」1.2 面

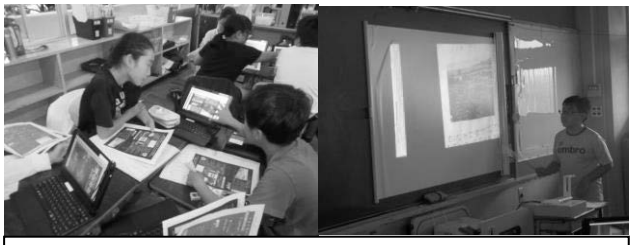
平成２９年度の写真からは、「空に海に光輝く～浦安花火～」というサブタイトルから海から打ちあがっている様子や、画面いっぱいの花火を描いていることと、２面の浦安花火大会の変遷から３５００発から１万発まで増えたことを画面いっぱいの花火で表現したことを読み取れることを狙った。

児童は、タブレットを使って写真の分析を行った。本校では、タブレットが４０台、実物投影機やデジタル教科書を使うための ICT カートが各学級に１台用意されている。それを最大限に活用していくように様々な使用方法を試しているところである。昨年度から児童になるべく多く機器に触れさせることで汎用的な能力として機器を使いこなせるようになってきている。

さて写真について個人で分析した後グループで分析した。児童からは平成２９年度の２面の記事の「ふるさとの思い出を積み重ねる」という記述から「花火が積み重なっているように見える」といった意見や平成２８年度からは「浦安の未来へ」というサブタイトルから「花のように未来に向かって咲いてほしい」という思いからこの写真を使ったといった意見が出され、教師側が考えていたよりも深く読み取りを行えていた児童がいた。一方で読み取りが難しかった児童もいたので、４年生として写真の意図を読み取るという課題が難しかったのか、花火大会という題材が難しかったのか今後も研究を進める必要がある。

児童は、写真の分析を行ったことで、自分のプレゼンに効果的な写真を選ぶことに意欲的に取り組むようになった。児童が写真の選別を行っている様子を見ても、写真の比較、分析をして選んでいることがわかった。また、プレゼン本番では、写真を大きく写して自信を持ってプレゼンすることができた。児童の振り返りからも「写真がプレゼンを聞いている人に、どのような状況かわかるものを選んだ」「自分のプレゼンがも

っとも伝わる写真を選んだ」といった記述が見られた。



タブレットを使って分析をする児童と、パンフレットを使ってプレゼンする児童

○ちばっ子チャレンジ１００を使って検証

ちばっ子チャレンジ１００の４年生の問題を使って力が身に付いたのか検証した。問題は４つのひまわりの写真から、自分のスピーチに合った写真を選んでスピーチ原稿を書くというものだったが、条件に合わせて写真の状況を説明しスピーチ原稿を書くことは全員の児童ができていた。さらに４つの写真の特徴をそれぞれ比較してより良いものを選んでスピーチを考えることができた児童もいた。結果から、写真に意図や意味を持たせて使うことを児童が意識して行うことができるようになったと言える。

○成果と課題

成果

・写真から意図を読み取るという学習は児童にとって新鮮であり、ICT を使ったことも含めて主体的に学ぶことができた。
・時数をしっかりと確保して行うことができたので、総合的な学習の時間としても国語としても資質・能力も伸ばすことができた。

課題

・教材となる写真を探すのが大変であること。また学年ごとの系統性、難易度を考えていくことが必要である。

Ⅳ考察

今回２つの授業実践を終えて、来年度から完全実施となる学習指導要領が述べる「主体的・対話的で深い学び」となる授業改善を考察する。

一つ目の視点である、言語活動のさらなる充実については、目的意識をしっかりともち、学習計画を立てて振り返りを行うことで自分の学びをメタ認知しながら進めることが改めて重要であることがわかった。

また、児童が主体的に学ぶためには、魅力的な教材を準備することが必要である。２年生に読み聞かせを聞いてもらうカフェを作ったり、広報「うらやす」という身近な地域教材を使ったりすることが大事である。

新設された情報の取り扱いに関する項目について、今回は思考ツールを用いたが、思考ツールによって児童の考えが整理されてわかりやすくなっただけでなく、対話的な学習にも生かされた。思考ツールによって比較や分類といった思考操作が行われることにより深い学びへと繋がった。語彙指導の充実においては、児童が物語を紹介する語彙を増やすことによって、紹介の質を高めることができた。

二つ目の視点であるカリキュラムマネジメントとICT の活用について述べる。

カリキュラムマネジメントは主体的・対話的で深い学びを実現するためには欠かせないものであった。教師が主体となり、知識や技能を身に付けさせる一斉授業は、一見すると効率的だが、児童の主体性や理解度を考えると、児童にとっていつも正しいとは限らない。一方、自分から主体的に課題を見つけ、友だちと対話しながら学びを深めていくという方法にはどうしても時間がかかってしまう。そこで、年間カリキュラムを見直し、教科横断的に行うことにより時数を確保し、長いスパンで学習を進めることで深い学びを得られることがわかった。

ICT 機器の活用はこれまでも児童が意欲的に学ぶことができるということが報告されている。写真や動画を扱う単元では、タブレットの使用が効果的であった。今後ますます ICT 環境が整ってくると考えられるので、積極的に活用していく。

Ⅴ　課題

今回、私は教務主任として、学校全体の行事計画や年間授業計画を見直すことで研究を進めることができた。カリキュラムマネジメントの視点は学校全体で取り組んでいるが、今年度作った年間計画が適切であったのかどうかを毎年見直しながら考えていく必要がある。また４学年担任として授業研究を行ったが、学年の先生の協力も得ながら研究を進めることができた。教材研究は一教師だけで行えるものではないので学年の協力や学校全体の研究のもとで児童の実態に合った教材開発を今後も進めていく。

主体的・対話的で深い学びの実現は授業改善の一つの方策である。児童の実態に即し、効果的な改善の方策を模索し実践することで、児童に資質・能力を確実に、高いレベルで身に付けることができる。今後も研究を継続していきたい。

すべての子どもが自ら考え、主体的、対話的で深い学びのある図画工作科

～プロセスを大切にした造形遊びの実践を通して～

八千代市立睦小学校
教諭 有 福 絵 里 加

１　主題設定の理由

（１）本校における研究課題から

本校は，昭和５７年度から，粘土を中心とした図画工作科研究を継続している。そのため，子どもたちの図画工作科に対する思いは深く，感性も豊かに育っている。本校の研究の特徴は，全校の子どもたちが自分の土粘土を所有しており，粘土の健康観察もかねて，粘土と触れ合う時間をしっかりと確保している点にある。６年間一緒に成長した粘土は，卒業制作として自分の思いを込めた作品となる。数十年，粘土の研究に重点を置き，この営みは継続されてきた。しかし，本校の図画工作科の研究を本校にとどめることなく，発信していきたい。そのためには，土粘土からほかの題材へと研究領域を広げたいとの思いが高まってきた。そこで平成２８年度に研究の方向性を検討し，どの学校でも活用できる，より身近な学習にしていくため，粘土以外の工作や造形遊びも研究していくこととなった。

（２）児童の実態から

本校の児童の実態としては，学習意欲の喚起が課題である。そんな中でも，本校の研究の成果もあり，図画工作科は大好きで，意欲的な子どもが多く，授業を心待ちにしている様子も窺える。また，授業研究を見ていても，すべての子どもが自分のめあてや思いをもち，表現するために一生懸命になっている。図画工作科はすべての子どもが，個々に思いを膨らませて，それをいかに表現するか思考し，型にしていける教科なのだと考えている。そして，その中でも造形遊びは，技能，思考，表現力等，どれをとってもすべての子どもが同じスタートラインに立って，生み出していけるものなのだと気付かされた。そこで，造形遊びですべての子どもが思いを膨らませ，思考しながら表現活動を繰り返していけるような授業を展開していきたいと考え，本主題を設定した。

２　研究内容

新学習指導要領には，造形遊びについて以下のように表記されている。

> ○造形遊びをする
>
> 遊びにおいて，児童は，自ら身の回りの世界に進んで働きかけ，いろいろと手掛けながら，自分の思いを具体化するために必要な資質・能力を発揮している。そこには心と体を一つにして全身的に関わりながら，多様な試みを繰り返し，成長していく姿がある。このような遊びがもつ教育的な意義と能動的で創造的な性格に着目し，その特性を生かした造形活動が「造形遊びをする」の内容である。

造形遊びは，絵や立体工作とは大きく異なる面がある。それは，「作品にならなくてよい」という点，そして教師が設定することが「材料のみ」という点である。絵や立体工作では，何を（対象）何で（材料）どのように（形式，様式，技法や知識）の中の「どのように」の部分だけが子どもたちに委ねられている。そのため，決められた範囲の中でつくるので，子どもたちは焦点化しやすくなる。しかし，造形遊びでは，材料のみ決められていて，子どもたちが「何をしたいか」「どのようにするか」というところから考えさせていくので，思考する場面が多くを占めている。また，上記にあるように「いろいろと手掛け」，「多様な試みを繰り返し」ながら表現していくので，遊びの中でひらめき，挫折，思考，生み出すということを繰り返し，成長していく。私は，その活動の移り変わりの中での子どもたちのひらめきや思考を追っていくことにやりがいを感じている。挫折と思考を繰り返すことで成長し，子どもたちが助け合い繋がっていくことが，造形遊びの醍醐味であると考える。そこで，以下のような主題に対する手立てを作成した。

３　主題への手立て

（手立て１）プロセスの見通し

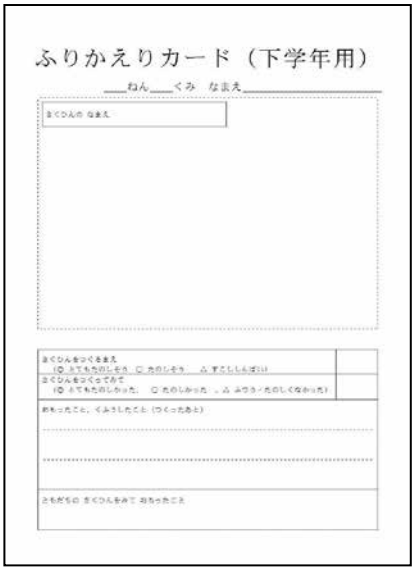
子どもたちの思いや願いを膨らませ，「やってみたい」「遊びたい」という気持ちを高めるために，動機付けを大切にする。その中で，素材に触れたり，少し遊んでみたりし，どんなことができそうか考えさせることで，見通しをもたせていく。

（手立て２）プロセスの共有

作りながら変化していく一人一人の思いをICT機器の活用で可視化し，全体に共有していく。個々のよさを拾い上げ，活動のプロセスを認めることで，そこから対話的で深い学びへと広がりをもたせていく。

（手立て３）プロセスの振り返り

学習のまとめとして，本校では学校共通の写真が添付できる振り返りカードを使用している。そこで，本時の個々の心の変化や友だちのよさを書き残し，学習のプロセスが振り返れるようにする。それらを，１年生から６年生までの６年間，持ち上がっていくことで，個々の技能の成長や，６年間の学習のプロセスを大切にしていく。


ふりかえりカード（下学年用）

___ねん___くみ　なまえ_____

４　研究の実際

（1）第１学年　造形遊び

題材名
「ならべる　つなぐ　つむ　～なにしよう？～」
主材料：ペットボトルキャップ

本題材は，ペットボトルキャップという身近な材料を多量に使うことで，素材の特徴や形を生かした活動にしていった。特に，キャップは「積む」ということができるので，平面的な活動だけでなく，立体的な活動になっていくようにしたいと考えた。そこで，導入の際に多量のペットボトルキャップを山積みにし，「こんなにたくさんあったら何ができるだろう。」とわくわくするような出会いを設定した。また，場もいつもの教室とは違い，何もない解放された廊下のフリースペースや階段を使えるようにすることで，一人一人の造形遊びが広がっていくようにした。〈手立て１〉

事前に，隣の学級で授業をした際には，本時よりも多量のペットボトルキャップを提示した。すると，そこに真っ先にプールのように飛び込む子が出て，その遊びからなかなか脱せず，活動が移り変わらないという事例があった。それを見たときに「量が多すぎたのか」と考え，本時は減らしたところ，スムーズに活動が移り変わっていくのを感じた。この経験で，造形遊びは「材料の量」が大変重要なのだと改めて知ることができた。　〈手立て１〉

導入では，多量のペットボトルキャップに出会い，「触れたい」「遊びたい」という気持ちを大切にしたかったので，まずは自由に触れさせた。すると自然に「音を楽しむ」「感触を楽しむ」「並べる」「つなぐ」「積む」と様々な活動が出てきた。そこで「どんなことできそうかな。」と投げ掛け，簡単に特徴や技法を確認した。　〈手立て１〉

【並べる】　【つなぐ】　【積む】

その後，それぞれにお気に入りのキャップを集めて自由に作り始めた。その際，副題になっている「プロセス」を大事にすべく，ICT 機器を活用し，活動の様子を撮影しながら子どもたちのその場面ごとの思いを

聞いて回り，それらを本時の振り返りで見られるように，電子黒板も準備した。　〈手立て２・３〉

【児童の様子①】
○学習が苦手で生活面も友人や教師，姉などに助けてもらわなくては遅れてしまう児童Ｙ。様々な面で，遅れてしまうため，友達との関りよりも年上との関りが多くなりがちなＹも，この日は誰の助けもなく，自分で必要なキャップを集めて，黙々と制作した。また，その合間に級友の作品を見て回ったり，同じ色のキャップを集めている子の手伝いを自然に始めたりと，自分とも他者とも対話しながら活動することができていた。

【児童の様子②】
○普段は見慣れないペアが自然にできていて，同じものを協力して作ろうと意気投合していたり，積み上げていたものが壊れて挫折したもの同士が協力し合って試行錯誤したりしている場面も見られ，図画工作科の要である「子どもが自ら考えつくり出していく」ということが達成されている瞬間を目の当たりにすることができた。

（２）第２学年　造形遊び

題材名
「ならべて　つなげて　ひろがるかたち」
主材料：洗濯ばさみ（２０人学級→３５００個程度）

本題材は，（１）で述べたペットボトルキャップの実践から系統性を考えて，より立体に組みやすい洗濯ばさみを使うことにした。洗濯ばさみは，はさむことで固定したり，ぶら下げたりすることができる。はさみ方の工夫によっては，カーブを描いたり，放射状につないだり，立体的に組み立てたりすることができる。また，厚紙やひもなどと組み見合わせることで，遊びの幅も広がる。そこで，それらの付属品をどこまで，どのように提供するかによって子どもたちの活動も変わってくる。洗濯ばさみの量やバリエーション，その他の付属品の種類や量，提示の仕方などに留意しながら授業を構成した。

洗濯ばさみのバリエーションは，「はさむ強度」「色」「自立する形状」「大きさの大小」など考え，様々なものを準備した。実際に，子どもたちはそれらの中から作りたいものに合ったものを選ぶということから思考が始まっていた。　〈手立て１〉

【児童の様子③】
○友達になかなか自分から声を掛けられず，輪に入るのに時間がかかる児童Ｓ。しかし，本時にはその児童の「つなげる」という活動がまわりの目を引き，自然に人が集まり，教室の外まで広がる大きな活動となった。級友たちも称賛され，その出来上がった線を学級みんなでたどるという活動にまで発展した。

この題材での事前授業では，学習の終盤に「立たせたい」という児童がいたため，段ボール（細長いもの，円等）をそっと提示すると，そこからそれらを使った活動に移行していった。それらを生かせたものもいたが，段ボールそのものの形を使おうとする児童が出てきたため，趣旨から外れてしまうと考えた。そのため本時ではあえて提示しなかったのだが，それらが必要とする場面もなく，新しいものを作ったり，友達と繋がったりして，延々と活動が移って行っていたのでよかったと感じている。予備材料は，提示するだけで様々な変化が出るため，本当に必要な場面で提示するよう見極めることが重要であると感じた。

【児童の様子④】

○最後の鑑賞の時間には，それぞれの遊び場をみんなで回ろうツアーを行った。その際，日ごろ発表が苦手な児童Mが，率先してお店屋さんのように振る舞い，学級のみんなにつくった扇を売って回っていた。もらった児童たちも嬉しそうに授業が終わるまで仰いでいる姿を見て，互いの思いを受け止め合っているのだと感じ，嬉しくなった。

授業中は，教師がタブレットのカメラを起動させたまま，その場面ごとの児童一人一人の思いを聞いて回った。その際，その映像は大きな画面に映し出され，全体に個々の作品が見えるようにした。そうすることで，個々のよさを共有していった。そして，それらの過程の作品を最後にみんなで振り返ることで，一人一人の成長や友達との係りを振り返る材料とした。

〈手立て２〉

（３）第２学年　造形遊び→工作

題材名

「切って　ひねって　つなげると…○○に見えた！」

主材料：牛乳パック

本題材は，工作としてとらえられることが多いものである。しかし，これも導入や場を少し工夫することで，造形遊びの要素を取り入れて楽しむことができる。

まず，導入では牛乳パックを細く長く切り続ける時間をもった。そこで，途中で切れないように切るにはどうしたらよいか，どのように切れば長く切れるかなどを実際に切らせながら意見を出し合ったり，互いに比べたりした。そののち，切ったのもはすべて教室の中心に集めて，山積みにしていった。すると，休み時間にそれらを集めてふわっと投げたり，そこに寝転んだりして遊び出した。それらは決して，この題材の趣旨ではないが，そうすることでその素材に愛着が沸いたり，素材の感触を味わったりできるので，一見遠回りなようで，近道に感じることができた。その後，ひねってつなげて形にしていきことも，全員が達成することができ，一人一人が愛着をもって作品を大切に扱うことができた。　〈手立て１〉

このように，工作や粘土も造形遊びの要素を取り入れると，子どもたちのわくわくした気持ちが作品に反映されたり，児童同士の対話が自然に起こったりすることが分かった。素材と関わる，素材と仲良くなるということは，自然に素材の特徴や感触を味わえるきっかけになる。これらを，様々な題材や場面で取り入れていきたいと思う。

5　児童の変容と考察

（1）手立て１ プロセスの見通しについて

プロセスの見通しは，やはり出会いの工夫から始まり，素材と触れ合う時間をしっかりと確保してあげることが重要であるということを感じた。児童は，触ってみたい，使ってみたいという思いから題材への思いを膨らませ，触れたり操作してみたりすることでイメージしていく。その一つ一つの過程が，子どもたちの学びであり，成長であると考える。

（2）手立て２ プロセスの共有について

児童一人一人が作りながら膨らませた思いを，教師が拾いながら教師の目線をICT機器の活用で可視化することで，自然に友達のよさを見取ることができ，自分の活動に取り入れる子もいた。また，その際に「何ができた？」と聞くのではなく，その児童の行為ややっていることを補足していくような言葉掛けが有効であると感じた。そうすることで，児童からは自然に活動を説明する言葉が出てきたり，この先どのようにしていきたいのかというイメージを話してくれたりする。それが自然に子ども同士の対話につながり，思考が深まっていくのだと感じた。よって，今後も子どもたちに「説明したい」「伝えたい」という思いが芽生えるような言葉掛けや，鑑賞形態を設定していきたいと思う。

（3）プロセスの振り返りについて

振り返りについては，本校で統一して使用している振り返りカードを使用している。これは，実際に書く内容としては多くないのだが，子どもたちにとって一番伝えたいことである「新しい発見や気付き」「友達のよさに対する気付き」が表現できるようになっている。振り返る際には，個々の活動のプロセスを思い起こせるよう，写真を電子黒板で見せたり，その場面での会話を取り上げたりする。そうすることで，自然に振り返りの時間にも対話が発生し，学びが深まっている。

(2)成果と課題

【成果】

○手立て１を行うことにより，子どもたちの思いを滑り台の上まで上らせ，そこから滑り下りるように造形遊びに入っていくことができた。また，授業開始時に何をしていいのか困ってしまうような子も出なかった。

○手立て２を行うことにより，学級のどのような児童でも自ら考え，自然に主体的で対話的な学びを深めることができるようになった。また，普段係りの少ない子ども同士も，自然に仲が深まった。

○手立て３を行うことにより，その時間の思いの変化を書き記し，互いのよさも認め合うことができた。また，６年間の心と技能の成長も振り返ることができた。

○造形遊びは活動の移り変わりが速いので，手立て２のようにICT機器を活用することで，児童の思考過程や仲間との関わりが見えてくるということがわかった。

【課題】

●多量の素材を使った題材が多いので，他の造形遊びでもこの手立てが有効か，研究していきたい。

●ICT機器の活用では，静止画で画像を残しているので，動画での児童の変容も検証してみたい。

●子どもたちの活動が，教師の言葉掛けで変容していくということが明確になったので，どのような言葉掛けが有効なのかも研究を深めていきたい。

このように，図画工作科はすべての児童が楽しみながら考え，主体的に取り組み，自然に対話したくなる教科である。造形遊びをするたびに，学級の児童の関係が豊かになっていくことも感じている。そして何より，教師が児童の思いや発想に驚かされながら，一緒になって楽しめることも魅力である。そんな図画工作科を，もっとたくさんの方に発信していきたい。

佳　　作

《佳　作》

学校部門

千葉県立国分高等学校	校長	髙野　義幸	ＳＤＧｓの具現化を目指した特色ある教育活動の展開
千葉県立八街高等学校	校長	須郷　秀明	総合学科の発展を目指した取り組みについて
千葉県立九十九里高等学校	校長	唐鎌　和恵	地域と連携し、地域を支える人材を育てる教育の推進
船橋市立丸山小学校	校長	井川　富美子	自ら考え、自分の考えを表現できる児童の育成
八千代市立大和田南小学校	校長	田中　一成	「学習の自立と共生」について
浦安市立見明川小学校	校長	鈴木　香織	教職員が笑顔で働く学校を目指して
船橋市立法典西小学校	校長	掛村　利弘	自律的・主体的な英語学習者の育成をめざして
流山市立南流山小学校	校長	遠藤　由樹	主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
銚子市立春日小学校	校長	塚本　義雄	子ども支援の校内体制を活性化する取り組み
長生村立八積小学校	校長	宮﨑　浩章	自分を大切にし、他人を大切にする児童を育てる道徳教育
富津市立大貫小学校	校長	鹿島　　順	学校を活性化するスクールマネジメントの実践
富津市立湊小学校	校長	横田経一郎	共同生活による小中連携教育の充実
木更津市立真舟小学校	校長	中澤　泰藏	確かな学力を育てる算数科指導方法の研究
習志野市立第三中学校	校長	富所　　緑	主体的に学ぶ力を伸ばす指導の探究
香取市立佐原第五中学校	校長	伊藤　　憲	考え、議論する道徳科授業の実現
市原市小中一貫教育校　加茂学園	校長	山田　正治	確かな学力と心身ともにたくましく生きる力の育成を目指して
千葉県立東葛飾中学校・高等学校	校長	平賀　洋一	併設型中高一貫校における教育活動の円滑な接続について
鴨川市立江見認定こども園	園長	鎌田　悦子	地域との関りの中で、自立心と協同性を育てる

《佳　作》

個人・グループ部門

千葉県立若松高等学校	教諭	細越　貴裕	定期考査におけるマークシート及びＷＥＢテストの有効性について
千葉県立国府台高等学校	教頭	黒川　康宏	カリキュラム・マネジメントにおける外部人材の活用に関する研究
千葉県立船橋芝山高等学校	教諭	吉次　　修	第二言語習得理論と生成文法を取り入れた授業研究と実践
松戸市立松戸高等学校	教諭	萩原　利幸	「逞しくジリツ(自立・自律)した18歳の育成」を目指して
千葉県立松戸特別支援学校	教諭	新田　賢司	「通級による指導」において、保護者および在籍校との連携について
千葉県立槇の実特別支援学校	教諭	小澤　典夫	障害の有無にかかわらず他者を理解する生徒を育む交流教育のあり方について
千葉県立市原特別支援学校	教諭	田村　信一	「１２年間を見据えた対話的な学びの実現に向けて」
市川市立須和田の丘支援学校	教諭	澁井　彩乃	主体的に演奏に取り組むための特別支援学校での指導法
千葉県立船橋夏見特別支援学校	教諭	星名　義明	人工呼吸器（バイパップ）を使用しながら取り組む学校生活
市川市立曾谷小学校	教諭	栗原　崇通	理科の見方・考え方を深める学習の在り方
市川市立曾谷小学校	教諭	竹内　光司	人を育て、心をつなぐ新聞教育、書く力を育む新聞教育
市川市立曾谷小学校	教諭	富永加代子	自信を持って思いや願いを伝えられる児童の育成
浦安市立北部小学校	校長	船橋紀美江	子供の育ちと学びをつなぐ
松戸市立常盤平第一小学校	教頭	中澤　智章	ＳＤＧｓに根ざした児童の育成を目指した取組
流山市立流山小学校	教諭	安藤　淳一	ＩＣＴ機器を使用した体育授業の展開
柏市立大津ケ丘第一小学校	教諭	井上　　昇	児童の防災意識を高める防災教育カリキュラムの提案
成田市立加良部小学校	教諭	小田　幸枝	難病と闘っている子ども達が発信できること
市川市立第三中学校	教諭	原　奈良子	校内不登校支援教室の運営における実践と生徒の変容
市川市立大洲中学校	教諭	長﨑　　誠	「ちばのやる気」学習ガイド理科２を活用した観察活動を中心にした授業実践
船橋市立旭中学校	教諭	高橋　拓也	教室で出来る模擬野外観察の実践
館山市立第二中学校	養護教諭	小瀧　清美	中学校区の小中学校で連携したノーメディアデーの取り組み

令和元年度募集

教育実践研究論文集

ー 第34号 ー

令和２年３月23日　発行

発 行　公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部

千葉市中央区中央４－13－10
（千葉県教育会館新館）
電話（043）224－8851